
理由ある反抗

伊藤 直人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理由ある反抗

【Zコード】

Z2735W

【作者名】

伊藤 直人

【あらすじ】

高校野球の名門、東尾商業へのスポーツ推薦での進学を希望する、中学三年生の井岡誠と、学業最優先の進路を強要する、父・義秀の、親子間の葛藤を書いたお話です。主人公と同じ中高生や、その年代のお子さんがいらっしゃる方に、特に読んでいただきたいと思っています。

1 (前書き)

えらーによつ、更新できなくなつてしまつたので、新しく投稿し直します。

市立東尾中学のグラウンドで行われている、野球部の紅白戦は終盤に差し掛かっていた。3・2と紅組の一転リードで迎えた最終回。後攻白組の攻撃は「死ながらランナー」・三塁。一打サヨナラの好機に、打球が三遊間を襲った。レフト前へ抜けようかというその打球はしかし、間一髪の所でショートを守る井岡誠のグローブに拾い上げられた。誠は、元は黄色だったが、使い込んで黒ずんだ愛用のグローブから、素早くボールを右手に持ち替え、ノーステップで一塁へ送球した。ショートバウンドになつた送球が、ファーストを守る小川佑介のミットに掬い上げられるのと、ほぼ同時にバッターランナーが一塁墨上を駆け抜ける。全部員の視線が、主審を務める野球部顧問青木健二に注がれた。

「アウト！」

アウトともセーフとも取れる際どいタイミングだったが、青木は力強く右拳を突き上げ、アウトの判定を下し、試合は紅組の勝利で終わつた。

「3・2で紅組の勝利。礼！」

「ありがとうございました！」

ホームベース前で整列した部員達は、互いに帽子を取つて頭を下げた。

「じゃあ、道具の片付けどグラウンド整備をして、解散

誠が、バックネットの裏側にある倉庫へ、グラウンド整備用のトンボを取りに向かうと、菊池翔太が声を掛けてきた。

「最後の守備凄かつたっスね、絶対抜けると思つたのに。やっぱこないだスカウトされちゃつたから気合入つてんスか？」

翔太は誠より一年後輩で、この日は白組のセンターを守つていたが、普段は誠と一緒にコンビを組むセカンドのレギュラーだ。体格

は小柄だが、一年生部員の中では抜群のセンスを持っている。そしてスカウトというのは、県立東尾商業高校野球部の監督、西崎俊雄の事である。

東尾商業、通称“東商”^{とうじょう}の野球部は、春五回、夏四回の甲子園出場の実績を誇る名門校だ。西崎は二十五年前の夏に、東商の四番打者として甲子園に出場し、一本墨打を放つ活躍で、チームをベスト8に導いた男だった。そしてその時の二年後輩が青木である。その縁もあって、東尾中野球部で実力を認められた者は、東商野球部にスカウトされるのが通例となつており、東尾中野球部員にとつて、西崎に認められることは大きなステイタスでもあつた。誠達の二年先輩で、当時のキャプテンだった小松辰弥も、西崎の誘いを受けて東商入りし、東商においても時期キャプテンの座がほぼ内定している。その西崎が、先日東尾中の練習を見学に訪れた際に、三人の部員をスカウトした。エース投手で三番を打つ宮田英治、四番ファーストでキャプテンの佑介、そして一番ショート井岡誠。

東尾中野球部員にとってこの上ない名誉な事だが、誠にはその話題には触れられたくない事情があつた為、わざとそつけなく答えた。「あの状況でそんな事考えらんないよ。必死で捕りに行つただけ。それに、今日は西崎監督来てないじゃん」

「でもいいプレーしたら、青木先生から報告して貰えるかも知んな
いじゃないスか」

なおも食い下がる翔太の質問をさえぎるように、後ろから声を掛けたのは佑介だ。

「俺達はお前みたいに雑念だらけでプレーしたりしねえんだよ」

佑介は誠とは幼馴染であり、少年野球チーム時代からのチームメイトもある。

「お前こないだもバレバレの隠し球狙つて、先生に怒られたばっかだろ。もうちょっと真面目にやれよな。他所との試合になつたら、出たくても出れない奴らだつているんだから、レギュラーに選ばれてる以上、例え野球部同士の紅白戦でも、キャラキャラした態度見

せんなよ」

キャプテンのお叱りを受けた翔太は、ペロリと舌を出したおどけた表情で「はーい、すんません」と言いながら、ズルズルとトンボを引きずつてグラウンド整備に向かっていった。誠と佑介もトンボを担いでグラウンドへ向かう。

一人でマウンド周辺の土にトンボを掛けていると、視線は自分がならしている土に向けたまま、佑介が訊ねてきた。

「やっぱりおじさん、許してくれそうにないの？」

その質問に誠は「・・・うん」と力なく答えた。

「そつか…。まあ東商は偏差値あんま高くないし、ヤンキーとかも結構いるからな。親としては嫌かも知んないよな。せっかく成績良いのにもつたいたいもんな」

佑介が言うように、東商は、高校野球の強豪としては、県内でも名高いが、学校そのものの評判は決してよくなかった。事実、誠たちの先輩達にも、西崎のスカウトを受けながら、「東商はガラガ悪いから」という理由で、他校へ進学する者も少なくなかつたという。誠の場合、本人はそれでも東商へ行きたいと思っているのだが、父の義秀がそれに断固として反対しているのだった。だが誠は、自分の進路選択において、自分の意思より親の意思が優先されているという状況を、まだ認めたくなかった。

「でも、まだ完全に諦めたわけじゃないよ。やっぱり自分の進路なんだから自分の意志で決めないと。東商で野球やるにしても、一般受験するにしてもさ」

佑介よりも、自分自身に言い聞かせるような口調になつていてのがわかつた。佑介は、そんな誠の気持ちを、知つてか知らずか「そうだよな、せっかく小学校からずっと一緒にやつて来たんだからさ、高校でも一緒にやろうぜ。な、誠。東商なら甲子園にだつて行けるも知れないぜ」と言つて、誠の背中を、大きな手の平でぽんぽんと叩いた。

誠も、「ああ」と努めて明るい声を出したが、作り笑いが引きつ

つているのが自分でもわかつてしまつほゞ、不自然になつてしまつた。

佑介は一瞬戸惑つたような表情を見せたが、誠の気持ちを察したのか、それ以上はこの話題に触れる事はせず、既に丁寧にならしてある土に、軽くトンボを掛けなおして、トンボを肩に担ぐと「よし、こんなもんでいいだる。トンボ、倉庫にしまつて帰ろうぜ」と言って、倉庫の方へ歩き出した。その佑介の声色も、不自然に明るかつた。

幼馴染の気遣いが、嬉しくもあり、辛くもあつた。

後片付けを済ませた後、誠はいつもより、佑介と共に下校した。いつもなら野球談義をしながら帰るのがお決まりだったが、その日は先刻の会話が尾を引いていてしまい、どうしてもよそよそしい雰囲気になってしまっていた。お互いにその気まずさを紛らわすように、言葉を搾り出すのだが、会話が続かない。間が持たない。やがてお互いに黙り込んでしまい、佑介の家の手前の曲がり角で、別れの言葉を交わすまでは、共に下校しているというより、ただ一緒に歩いてるだけという状態だった。

「じゃあ、俺こっちだから。また明日な、誠」

「ああ、じゃあな」

いつもは、ここで佑介との会話が途切れるのが、少し名残惜しかったが、今日は、氣まずい空気から開放されて、少しホッとした気分だった。

佑介と別れてから井岡家までは、徒歩で約五分程の距離だったが、自分が父を説得できるだろうかという思いが、誠の足取りを重くさせていたせいか、いつも何倍も長く感じた。

憂鬱な気持ちのまま帰宅した誠を、母の美奈子が出迎えた。

「おかげり、誠。あら、ユニフォーム泥だらけじゃない。塾まで、まだ少し時間あるし、すぐにお風呂入っちゃいたら？」

「うん」

そう言って、誠は風呂場に向かった。

汚れたユニフォームをかごに放り込み、熱いシャワーを浴びる。

疲れた身体に、湯の熱さが染み渡る。できれば湯舟にも浸かりたいが、七時には塾に行かなければならないため、あまりゆっくりはしていられない。

「はあ…」

思わず、ため息が漏れた。部活の後で疲れていたことがあるが、

それだけではない。東尾商業への進学を、父に断られてから、誠は毎日、どうすれば父を説得できるだろうかと、そればかり考えていた。しかし、あの融通の利かない父が、自分の主張を曲げる事など、あるだろうか。

誠が野球を始めたのは、小学三年生の時だった。きっかけは、當時仲の良かつたクラスメイトに誘われたのだ。

誠が野球チームに入りたいと言い出したときも、義秀は、あまり良い顔をしなかつたが、週に一回、一時間だけという練習時間なら、さほど勉強に支障はないだろうと言う事で、了承してくれた。

もともと運動神経は良い方で、足も速かつた事に加え、眞面目で練習熱心だった誠は、めきめきと上達し、五年生で、ショートのレギュラーポジションを獲得した。

誠にとって、毎週土曜午後三時から五時まで、一時間の練習は何よりの楽しみだった。平日の午後は、二箇所の塾を掛け持ちし、放課後自由に遊べるのは、水曜日だけだった誠は、その時間も大概野球をして遊んだ。相手が見つからなければ、一人で校舎の壁に向かって、日が暮れるまでボールを投げつけていた。

中学に上がつても、誠は一年生からサードのレギュラーに抜擢された。

そして、この時ショートを守っていたのが、辰弥だった。

軽快なグラブ捌きと強肩で、ヒットを許さない守備も、体の軸が全く崩れないシャープなバッティングフォームで、広角に打ち分ける打撃も、辰弥のプレイは一つ一つが洗練されており、美しかった。辰弥のようなプレイが出来るようになりたいと、強く思った。辰弥は、誠の憧れだった。もう一度、辰弥と一緒に野球をしたいと言ふ事も、誠が東商で野球をしたい理由のひとつでもあった。

譲れない。これだけは、どんなに反対されても譲れない。そのためには、なんとしても、父を説得しなければならないのだ。

義秀は、一人息子である誠に、幼い頃から厳しかった。特に職業柄か、勉強に関しては、満点でない限りは褒められる事は無く、義

秀の個人レッスンの下で、不正解だった問題の復習をやらされた。

義秀の、厳しい指導の甲斐あつてか、誠の成績は小学校時代から、学年でも上位から数えたほうが早かつた。クラスメイトや、教師たちからも、「井岡君は、頭がいい」と言われた事は、決して少なくなかつた。そして、それが父の厳しさのおかげだと言つ自覚は、誠にもあつた。だが、どんなに良い成績を収めても、勉強が楽しいと思つたことは、一度もなかつた。

自分は何の為に、こんな事をしているんだろう。

父に言われるままに、勉強に打ち込む自分に、疑問を感じるようになったのは、少年野球のチームメイトの言葉だつた。

野球の練習中に、グローブが破けてしまつたのだ。紐も何箇所か痛んでいて、今にもちぎれそうだつた。誠は、家に帰つてから、義秀に新しいグローブをねだつた。

それを聞いた義秀は素つ氣無く「じゃあ、明日の帰りにでも、ホームセンターに寄つて、買つてきてやる」と言つた。

だが、誠が欲しかつたのは、ホームセンターで卖つているような安物ではなく。プロ野球選手が使つているような、野球用品専門メーカーのグローブだつた。この時、破れてしまつたグローブも、ホームセンターで買つて貰つたもので、チームメイト達が使つているメーカー品のグローブが、ずっと羨ましかつたのだ。

「ホームセンターじゃなくて、スポーツ洋品店で売つてるやつが欲しいんだ。ダメかな?」

「いくら位するんだ?」

「一万円くらい…」

「そんなにするのか、しかし、うーん、さすがに、このグローブをこれ以上使うのは無理だしな。よし、買ってやる」

義秀は、使い古してぼろぼろになつたグローブを、手にとつて眺めながら、そう言つた。

「本当!? ありがと!」

「但し」

はしゃぐ誠を制するよつた口調で、義秀は付け加えた。

「今度の塾のテストで、いい点が取れれば、の話だ。それが出来なかつたら、ホームセンターの物で、我慢しなさい」

「うん、わかつた」

一瞬氣落ちしたが、誠は俄然やる気になつた。入念に予習をし、義秀が納得するだけの点数を取つたのだ。

「よく頑張つたな、誠。それじゃあ約束通り、グローブを買いに行こう」

返却されたテストの答案を見ながら、義秀は満足そうな笑みを浮かべ、誠の頭をなでた。

そして誠は、憧れのメーカー品のグローブを買って貰つた。それまで使つていた、合成皮革の物にはない、本皮の香りに胸を躍らせた事を、今でも鮮明に覚えている。

そのグローブを始めて少年野球の練習で使つた日、チームメイトの川西弘之が、誠がグローブを新調した事に気づいた。

「お前、グローブ買い換えたんだ」

「うん。塾のテストでいい点採つたら買って貰つて、お父さんと約束してたんだ」

誠がそういうと、弘之は、嘲るよつて言つた。

「なんだよそれ、お前、親の言いなりじやん」

「えつ？」

確かに誠は、義秀に逆らう事は殆どなかつた。といつより出来なかつた。たまに反論しても、すぐに言いくるめられてしまつ。そういうことを、繰り返すうちに、確かに誠は、言いなりと言つていいほど、義秀に従順になつていつた。

だがそれまで、自分と父のそいつた関係に疑問を持つことは無かつた。どこの家でも、子供は親の言つ事を聞くのが、当たり前だと思っていた。

「やうやつて、えさで釣られて、なんとも思わないのかよ、だつせえ」

誠は、何も言い返せなかつた。確かにそうかもしれない。義秀は、誠が欲しがつていたからではなく、成績を上げることに利用できるかもしないと思って、あのよつな条件をつけたのかもしれない。自分は、義秀の手の上で、踊らされていただけなのだろうか。

買つて貰つたばかりのグローブを、愛しく思う気持ちは変わらなかつた。その証拠に、こまめにローションで磨き、オイルを塗り、手入れを怠らずに大切に扱い、今でも愛用している。

だが。

お前、親の言いなりじゃん。

その日、誠の胸の奥を抉つたその言葉は、今も深く突き刺さつたままだつた。

まだ六月だと書つのに、この日の最高気温は三十度近かつた。日に比べれば、幾分涼しくはなつてゐるもの、熱い湯をたっぷりと浴びて、火照つた身体のまま風呂場から出れば、すぐに汗が噴き出してくるだろう。

誠は、湯のバルブを少し閉め、その締めた分だけ、水のバルブを開いた。熱かつた湯が、適度に冷たい温度になり、火照つた身体を心地よく冷ます。

体の火照りが冷めてからも、誠そのまま、シャワーに打たれ続け、どうしたら父を説得できるだろうかと考えていた。

考え込めば、考え込む程、心が折れそうになる。

だけど、諦めるわけにはいかない。自分の進むべき道は、自分の意思で決めなければならぬ。東尾商業で、野球をやりたいと言う気持ちも強かつたが、それ以上に、自分の進路を父に委ねてしまう様な、弱いままの自分でいたくないという気持ちのほうが強かつた。

「誠、随分長く入つてゐみたいだけど、塾の時間大丈夫?」
母の声にはつとして、シャワーを止め、扉越しに尋ねる。

「今何時?」

「六時二十分。塾、七時からだつけ?」

「うん。もう出なきや」

風呂場から出た誠は、冷蔵庫から瓶入りの牛乳を取り出して、一気に飲み干した。微かな痛みを覚えるほど冷たさが、喉から胃にかけて、染み渡る。火照った身体は、外側と内側から冷まされ、すっかり汗もおさまった。

部屋に戻つて、塾へ行く支度をしていると、「ふと、先刻無造作に床に放り出した、部活用のスポーツバッグが目に入った。バックのファスナーを開き、グローブを取り出した。野球部の顧問の青木から、入部して間もない頃、型の良さを褒められた時の事を思い出す。「よく手入れがしてあるな。自分でやつてるのか?」「はい」

「そうか。偉いぞ井岡。道具を大切にする奴は、きっと上手くなる。特に内野手は、丁寧なグラブ捌きが大切だからな。これからも、大切に使えよ」「はい」

嬉しかつた。自分の野球への熱意を、褒められた気がした。でも

.....

「お前、親の言いなりじやん」

自分の野球に対する熱意と、父に対する従順さ。大きく揺れる今の自分の、その振り幅の対極にある二つの気持ちを、ともに象徴するグローブ。

高校で野球することになつても、高校野球は硬式野球だから、軟式用のこのグローブを使うことは無い。つまり野球を続けるにしても、辞めるにしても、このグローブでプレイするのは、中学卒業までの間だけだ。役目を終えた後の、このグローブは、誠にとって、何を思い出させる物になつているだろう。

誠は携帯電話のディスプレイを開いた。待ち受け画面に映るのは、野球部の仲間たちと撮った写真。その画面署のデジタル時計は、午後六時二十八分を示している。

誠は塾用のショルダーバッグを肩にかけ、部屋を出た。

「いってらっしゃい。気をつけてね

「うん」

玄関を出て、自転車に跨る。ペダルを漕ぐ度に、洗い髪をなでる風が、心地よかつた。

誠が通つてゐる塾は、駅前の大通りに面した、六階建てのビルの、五階にある。エレベーターで五階へ上り、教室の扉を開くと、すでに何人かが席についている。一人掛けの机が、八つ、一列に並んで配置された座席の、壁に掛けられたホワイトボードから、向かつて右側の列の、前から一番目の机の窓際が、誠の席だ。誠が自分の席に座ると、少し遅れて阿部亮平が教室に入ってきた。亮平は、誠とは違う中学で野球部に在籍しており、何度か練習試合でも対戦したことがある。

「よお、井岡。翔太から聞いたんだけどさ、お前東商からスカウトされたってマジ？」

亮平は、翔太と同じ少年野球チームの出身だ。上背はないが、がつしりとした体型で、強肩強打の三塁手として、青木からも一目置かれていた。

「ん、まあ、一応……」

「マジかよ！凄えじやん！今あそこ、お前の先輩の小松さんと、一年の大谷つて人が凄えらしいじやん。来年は久々に甲子園行けそうって言われてるし、お前ももしかしたら……」

「そんな簡単にいくわけないだろ。大体まだ東商に行くつて、決めたわけじゃないんだから、そんなに騒ぐなよ」

一人で勝手に盛り上がる亮平を、制するように、誠は言った。

「えつ、何で？せつかく誘われてんのに、勿体ねえじやん」

先刻の、翔太とのやり取りを思い出し、誠は思わずため息をつく。

「そんなに簡単に決める事じやないだろ。自分の将来にも関わる事なんだから、野球やりたいからつてだけで、あっさり決められるかよ」

「じゃあ、東商に行かないとしたら、どうひらくんの高校狙つてんの？」

「一応、第一志望は鶴川学園」

「鶴川学園？あそこ野球部ないじゃん」

だからこそ、選んだのだ。東商を諦めたら、もう野球はできない。だからこそ、なんとしても父を説得し、東商で野球をやるのだ。そうやつて自分を追い込むために、あえて野球部の無い鶴川学園を第一志望にしたのだ。だけど、そんな事で、悩んでいる自分を、亮平に悟られたくなかつた。

「うるさいな。俺の事より、阿部はどうなんだよ。志望校決まつてんの？」

「俺？俺は今更悪あがきなんてしねえよ。ただ、この年で就職はまだしたくねえからな。とりあえず、入れりやどこだつていいよ」

「そんなら、わざわざ、塾なんか来なくたつていいじゃん。お前、何で塾通つてんの？」

亮平は、何故塾に通つてゐるか不思議なほど、不真面目だつた。授業中にくだらない事を言つて、皆を笑わせたりするのが得意で、誰からも好かれる性格だつたが、肝心の成績の方は、不動の学年最下位だ。誠は、亮平のような男が、何故塾に來てゐるのが、不思議だつた。

「別に、部活終わつてから、家に帰つたつて、俺一人つ子だし、やる事ねえじゃん。だつたら、誰かと会える場所にいたほうが楽しいじゃん？」

「つたく、そんなんで、将来大丈夫かよ？」

ため息混じりに言いながら、自分が義秀に言われてゐる事と同じような事を、良平に対して言つてゐることに、気がついた。その気持ちを紛らわすように、亮平の顔から視線を外し、教室の中を見回した。

誠達の他に、八人、計十人の生徒が、席について雑談をしている、いる。今日は欠席者はいないようだ。それとなく聞き耳を立ててみると、自分たちのように、進路について話をしている者もいれば、部活や、新しく発売されたゲームについて話をしている者もいる。

みんなは、自分の進路をどうなふうに決めているんだろう。親や教師、塾の講師ら、大人達が勧めるままの進路を選ぶ者は何人いるのだろう。それを当たり前のよう受け入れるものは、何人くらいだろう。それに抗い、別の道へ進もうと、もがいている者は何人くらいだろう。そうして決めた結果について、後悔する者と、しない者は、それぞれ何人ずつくらいだろう。そして結果に後悔した者達は、その後自分とどのよう向き合っていくのだろう。そんなことを考えていると、教室の扉が開いて、数学の担当講師、早川尚樹が入ってきた。生徒達はおしゃべりを止め、皆自分の席に着く。早川は、教室の中を見渡して、欠席者がいないのを確認すると、満足そうに頷きながら言った。

「よし、今日も全員出席だな。じゃ、はじめるぞ」

塾の授業が始まつても、誠はやはり集中できなかつた。いつもの習慣で、ホワイトボードに書かれているものを、ノートに書き写す作業だけは怠らなかつたが、早川が話している内容は、耳に入っこない。板書を終えて、ふうつ、とため息をついて、窓の外に目をやると、陽はすっかり暮れていた。帰宅ラッシュの時間のせいか、人通りは、この頃がもっとも賑やかだ。スーツを着た会社帰りのビジネスマン、自転車のかごを一杯にした買い物帰りの主婦、塾帰りの小学生。高齢者は、比較的少ない気がする。

五階という高さから、俯瞰氣味に町の風景を見下ろしてみると、町を行き交う人々の姿も小さくて、地上ですれ違う時に比べ、生命感を感じない。それでも彼らは確かに生きていて、一人ひとりに人生があり、家族や友人がいて、そして彼らにもまた、それぞれの人生がある。

人類が誕生してから、今までにいくつの人生があるのだろう。これから先、いくつの人生が始まるのだろう。その時間を全て足したら、どれくらいの時間になるのだろう。そして自分の人生は、全体の何分の一くらいになるのだろう。

地球全体と、砂浜の砂一粒くらいの比率だろうか？いや、もっと

小さいかもしない。それでも、自分にとつては、この人生だけが全てなのだ。この人生を、どれだけ実りあるものに出来るか、それが何より大切なのだ。そのためにも、今は強い気持ちで戦わなければならぬ。決して父のものではない、自分自身の人生のために。

「どうした井岡」

「えつ……」

「上の空で、外の景色なんか見て。いつも熱心に聞いてるお前が、珍しいな。部活なんかで、疲れてるのか？」

「いや、大丈夫です。すいません」

「そうか、それならいいけど、具合が悪いようなら、すぐに言つんだぞ」

「はい」

一応、そう答えた誠だつたが、結局、その日は最後まで、授業に集中できなかつた。

憂鬱な気分のまま、帰り支度をしていると、亮平が声を掛けた。

「井岡、ちょっとコンビニ寄つてこいぜ」

誠と亮平は、塾があるビルの隣にあるコンビニでアイスを買って、それを店先でかじつていた。

「お前、ほんとに今日ずーっと、ぼけつとしてたけど、どうしたんだよ？」

「いや……、ちょっと考え事しててさ」

「東商に行こうか、どしようかって？」

「…………うん…………」

学校でも塾でも、この話か。そつとしておいてほしいという気持ちもあるが、時期的に仕方ないとも言える。それに、彼らなりの意見を聞いて見たいという気持ちもあった。

「阿部だつたらどうする？」

「んー、わかんねえな。まあ、俺は東商からスカウトされるほどどの野球の実力も、進学校に合格できそうなほどの成績も無いからさ。

俺からすりや、贅沢な悩みにも思えるけど、でもなあ……」

そこまで言つて、亮平は俯いて口をつぐんだ。誠は、何も言わずに、地べたに座り込んでアイスをかじつている亮平の顔を見下ろした。亮平の話の続きは気にはなるが、せかすような事はしたくなかった。亮平は、誠との視線に気づいたのか、顔を上げて、誠の顔を見ると、再び口を開いた。

「俺や翔太がいたのチームの三口上の先輩でピッチャーやつてた人でさ、つつても、翔太が入つてくる前の年に卒業しちゃつたから、あいつとは面識ないんだけど」

「うん」

「その人も野球推薦で、長浜実業に行つたんだよ。木田君つて人なんだけど。」

「長実か、名門じやん」

長浜実業は、甲子園出場回数で言えば、東商よりもや少ないが、春の選抜大会で準優勝した事がある。輩出したプロ野球選手の人数も、東商よりやや多い。

「その人の親父も、長実の元エースでさ、ガキのころから、親父さんにしごかれまくつて、その分上手かつたよ。コントロールがめっちゃ良くてさ。フォアボールなんかほとんど出さないの。でも親父さんほんとに厳しかったみたいで、本人は、もう勘弁してつて感じだつたみたいなんだよね。野球自体は嫌いじゃないけど、あくまで楽しむレベルでやりたかったみたいな。だから長実行くのも、あんまり乗り気じゃなかつたんだつて」

「ああ、俺とは、逆のパターンか」

「そういや、お前ん家は、親父さんが勉強に厳しいんだっけ？」

「うん、まあ、教師なんかやつてるぐらいだから」

「なるほどね。で、その木田君なんだけどさ、嫌々行かされた長実で、全く通用しなくて、拳句の果てに肘壊して、結局中退しちゃつたんだよね」

他人事とは、思えなかつた。

父の身勝手で、自分の進路が決まってしまった時、どれほど悔しかつただろう、どれほど自分を情けないと思つただろう。その想いと、今、木田は、どのように向き合つてゐるのだろう。

「そんでさ、こないだ、久しぶりに木田君に会つて、色々しゃべつたりしたんだけさ、いつも優しくて、誰かの悪口なんか絶対言わないような人だったのに、親父さんのこと愚痴つてばっかで、なんか、かわいそうになつちゃつてさ、だから、その……、井岡にも同じような事で後悔して欲しくないんだよ。木田君が言つてたんだけどさ、親父さんの強引なやり方も許せないけど、それに従うことしか出来なかつた、自分の意志の弱さが一番許せないつて。だからさ、お前も、後悔したくなかったら、ほんとに東商で野球したかつたら、絶対諦めんなよ。お前の意志の強さ次第だぜ」

そういうつて、亮平は、誠の目を真つ直ぐに見た。誠も、その視線を正面から受け止めた。だけど、一人の視線が重なつていたのは、ほんの一、二秒だった。亮平のほうが、照れくさくなつて視線を外してしまつたのだ。

「悪い、なんか熱く語つちゃつてさ。大きなお世話だよな、お前だつて、自分なりに悩んでんだけし」

普段はお調子者で、ふざけてばかりいる亮平の、不器用な優しさが、嬉しかつた。

「そんな事無いよ。聞いてよかつた。ありがとな、阿部」「そつか。そんならいいんだけどさ」

「コンビニで亮平と別れ、一人家に向かう帰り道、誠は自転車を漕ぎながら、亮平が話した木田という男の話を、思い出していた。

野球推薦で進学したいという自分に、一般受験で進学しろと言つ自分。一般受験をしたいと言う木田に、野球推薦で進学しろと言つた木田の父。誠とは全く逆の形だったが、木田の気持ちが痛いほど良くわかる。

自分も木田のように、東商野球部のレベルの高さについていけないかもしない、という不安は、以前からあった。

だけど、自分の意思で進んだ道なら、たとえが上手くいかなかつたとしても、納得できる。少なくとも、結果を全て自分で受け止めることは出来る。

だけど、仮にもし、自分が東商行きを諦め、鶴川学園へ進学して落ちこぼれ、劣等感から中退するような事があつたら、そして、そうさせた父を恨むようになつたら、どれほど惨めだろう。

今まで、自分の将来について考えた事はなかつた。自分の将来進む道を、自分の意思で決める。当たり前の事だけれど、決して簡単ではないという事を、義務教育を終えるこの年になつて、初めて知つた。だけど、それが出来ないようでは、いつまでたつても親から自立できない。

まだ、胸を張つて自分が大人だと言い切れるような年ではない。しかし、自分力で何も出来ないほど、子供でもないはずだ。

絶対に、木田と同じ道は辿りたくない。

絶対に、父を説得しなければならない。

家に帰つたら、今日こそもう一度、父に自分の思いをぶつけてみよ。自分は決して、野球が好きだからというだけの理由で、目先のことだけを考えて、父が示す道を拒んでいるのではない。

自分なりに、真剣に自分の将来を考えて、悩んで、その上で、自

分の進む道を、自分の意志で決めたいと考えているのだ。それが出来なければ、きっと後悔する。そして、それを父のせいにする。そんな惨めな思いは、絶対にしたくない。それだけなのだ。それだけだけど、絶対に譲れないことなのだ。

家に着いて玄関の扉を開くと、いつものように、美奈子が出迎えに来ていた。

「お帰り、疲れたでしょ、う？」

「うん……、父さんは？」

誠は、靴を脱ぎながら、母に尋ねた。

「今日は遅くなるみたい。他の先生達と飲みに行くって、電話あつたから」

「あ……、そうなんだ」

「また、汗かいたんじゃない？お風呂入る？」

「いや、今日はもういいよ」

「そう、確かに夕方から、一気に涼しくなったものね。そんなに汗もかかなかつたか。じゃあ、すぐ、『ご飯にする？』

「うん」

テーブルに夕食が運ばれてくるのを待つ間に、誠は冷蔵庫から麦茶の入ったペットボトルを取り出し、氷を入れたグラスに注いだ。氷がぴきぴきと音を立てひび割れしていく。

一気に飲み干して、ふう、と息をつく。

肩透かしを食らった気分だった。父と、進路について、もう一度話をしたいとは、ずっと思っていた。思つてはいたけれど、なかなか決心がつかずについたのだ。

今日は、その決心がついていた。学校で佑介や翔太と、塾で亮平と、自分たちの進路について話をして、改めて、自分は東商で野球をしたいと思った。その想いを、自分以外の誰かの意思で、断ち切られたくない、強く思った。だからこそ、決心できた。それなのに、そんな日に限って、父は酒を飲んで帰つてくるという。義秀の帰りを待つても、酔っている父に、今の自分の気持ちをぶ

つける気にはなれない。義秀は、家ではあまり酒を飲まないが、外で飲んで来る時は、かなり酔つて帰つてくる。そんな状態の父に、

今の自分の真剣な気持ちをぶつける気にはなれなかつた。

タイミング悪いなあ、と思いつつも、自分の父親に、自分の気持ちを伝える、たつたそれだけの事に、これだけ大きな決心が必要な自分の脆弱さが、情けなくもあつた。

明日だ、明日こそは絶対に、父に自分の気持ちをぶつけよう。そして、絶対に説得してみせる。しなければならない。いつまでも迷つていられるほど、時間は残されてはいいのだ。

義秀は、結局十一時頃に帰宅した。

誠は、その時間には、部屋の灯りを消して、ベッドで横になつていたが、なかなか寝付なかつた。せつかく父を説得するために、高めた集中力が、行き場を失い、收まりがつかなかつたのだ。普段なら、今頃徐々に眠気が襲つてきて、目を閉じているのに、この日は、目が冴えていて、神経も研ぎ澄まされていた。その分、扉越しに聞こえて来た両親の会話は、はつきりと聞こえた。

「お帰りなさい」

「ああ、ただいま。誠は？」

「もう寝たんじやない。十時^{じろ}には、部屋に戻つてそれつきり」

「そうか」

「誠が、どうかしたの？」

今夜のように、なかなか寝付けなくて、両親の一人だけの会話が耳に入つてくる事はあるが、この時間なら、いつも誠がベッドにいる事は、義秀も知つてゐるはずだ。それでもあえて美奈子に尋ねたからには、義秀にも、何か自分について、考えるところがあつたのかもしれない。誠は、窓から差し込む月明かりしかない、暗がりの部屋の中で、聞き耳を立てた。

「いや、別に、どうつて事はないんけど……」

義秀が言葉を詰まらせた。いつも断定的な物言いをする義秀にしては、珍しく歯切れが悪い。どうとも思つていないはずなどない。

自分なりに、感じる事があつたに違いない。

知りたい。父が何を思つてゐるのか。なぜ、この日に限つて、自分の様子を気に掛けているのか、直接尋ねてみたい。

ベッドから飛び起きて、自分の思いを父にぶつけてみようか。そう思つたけれど、一度冷めてしまつた想いは、簡単には、熱を取り戻せない。

自分の感情をコントロールする事つて、こんなにも難しい事なんだろうか。いや、結局それは、自分の決断力が足りないだけで、意志の強い者なら、今すぐでも部屋を飛び出して、父に自分の思いをぶつけるのではないだろうか。

やはり、自分の人生が思い通りに行かない一番の理由は、自分自身の弱さなのではないだろうか、それを父のせいにして、自分の弱さから、目を背けているだけなのではないだろうか。

そんな事を考へてゐるうちに、両親の会話は途切れていった。微かに、水の跳ねる音が聞こえる。義秀は、もう風呂に入つているのだろう。美奈子も、義秀が上がれば、それに続いて風呂に入り、夫婦は寝室へ向かう。そうして、井岡家は一日を終える。

(今日もダメだった。でも、明日こそは、きっと)

誠は、一度萎えてしまつた気持ちを、再び奮い立たせるように、自分にそう言い聞かせ、目を閉じた。

翌朝、学校へ向かう途中、佑介と合流し、しばらく歩くと、ロンビニから富田英治が出てくるのが見えた。英治は、誠や佑介と共に、西崎のスカウトを受けた野球部員の一人だ。エースピッチャーであると同時に、三番バッターでもあり、副キャプテンでもある。

「エーちゃん」

佑介がそう声を掛けると、英治が振り向いた。切れ長な目で、鼻筋の通つた端正な顔に、縁の無い眼鏡をかけている。

「あ、おはよ！」

英治は、中学生にしては長身だが、色が白く体つきも細身で、制服を着ていると体育会系の者には見えない。しかし、ボールを低めに集める制球力は抜群で、切れ味鋭いスライダーは、誠や佑介でも簡単には捉えられない。

「昨日、どうしたの？」

並んで歩きながら、佑介が尋ねる。英治は、昨日の部活を休んでいた。

「うん、少し風邪気味だったからや。今の時期に無理は出来ないからね」「それって、受験に影響するからひとつ?..」
誠が尋ねる。

「勿論」

「じゃあ、エーちゃん、一般受験するの?」

「当然」

「じゃあ、東商行かないの?」

今度は、佑介が尋ねた。

「うん、もう正式に断つたよ」

英治は淡々と、そう言いつ放つた。最初から、東商に行く気など、わざわら無かつたかのような言い方だった。

投手に絶対的な柱がいないことに悩んでいた西崎が、最も熱心にスカウトしたのは、英治だった。それだけに、佑介は驚きを隠せない様子だったが、誠は、それほど驚かなかつた。英治は、大人しそうな外見とは裏腹に、意志が強く、考え方も大人びている。堅実な将来を考えれば、一般受験という選択は、当然に思えた。

「野球は、もうやんないの？」

佑介が聞くと、英治は淡々と答えた。

「いや、野球部には入ろうと思っている。でも坊主にされるのは嫌だから、坊主にしなくてもいい学校探してるのである感じ。私立は、高速厳しいところ多いから、多分公立だね」

「ああ、たしかに俺も坊主は嫌だな。それにエーちゃんが坊主なんて、絶対に似合わなそう」

佑介の言葉を聞いて、誠はふと英治の髪を見た。少し赤みがかつた色の直毛は、野球部員の中では最も長く、首筋を殆ど隠すほどだ。風を受けると、柔らかく揺れるその髪は、女性的にすら見え、英治を体育会系のイメージから、さらに遠ざける。

誠は、この髪が坊主頭になつた所を想像してみたが、全くイメージがわかななかつた。

「エーちゃん、最初つから東商行く気なかつたの？」

「うん、野球は好きだけど、野球するために学校へ行くような選択をするつもりは、最初から無かつたよ」

「ふーん、でも、やっぱ将来のこと考えたら、その方がいいのかなあ」

そういうて、誠は頭の後ろで手を組み、天を仰いだ。

「いや、俺も、別にそこまで先のこと考えてるわけじゃないよ。一応、大学には行くつもりだけど、将来やりたい事なんて、まだ何も無いし」

「じゃあ、なんで、公立受けよつと思つたの」

誠の質問にも、英治はあくまで淡々と答えた。

「別に、さつき言つた事以外に、たいした理由なんて無いよ

「へえー、なんかちょっと意外」

佑介が、目を丸くする。

「意外？何が？」

「いや、なんかエーちゃんて、大人っぽく見えるから、もう自分の将来のプランみたいなのが、出来上がってるんだと思ってた」

誠も、全く同感だった。英治の学業成績は、学年でもトップクラスだ。現時点で大学進学を視野に入れていることは当然として、その先の事まで、しつかりと見据えているのだろうと、勝手に思い込んでいた。

「そりゃまあ、やつてみたいなあつて思う仕事とかも、無いわけじゃないけどさ、高校三年間と、大学四年間、合わせて七年もあるんだよ。その間に、自分がどう変わっていくかなんて、少なくとも俺には、現時点じゃ想像もつかないよ。だから、今はまだ、そこまでの自分の将来を煮詰めたり、絞り込んだりする段階じゃないんじゃないかなってこと。はつきり決まってはいないけど、それなりに考えてはいるよ」

「やっぱり、エーちゃんは大人だなあ」

誠は、ため息混じりに言つた。

「どうして？」

「いや、なんていうかさ、いつも、周りに流されずに、地に足がついてるっていうか、自分の考えをしつかり持つてるとこだ。俺も将来何がしたいなんて、全然決まってないけど、もつやりたい事が見つけてる奴だつているじゃん。そういうの見ると焦っちゃうもん」

誠の話に、佑介も同調する。

「俺もそう思う。俺は、東商で野球やるつもりだし、親にも青木先生にも、そう言ってあるけど、その先のことなんて、やっぱどうなるんだろう、とかって不安になるもん。だから、誠みたいに、もつと先のこと、今の内から考えて、早く決めなきゃって焦っちゃう気持ち、俺もあるもん」

「いや、誤解の内容に言つておくけど、俺が自分の将来について、何も悩んでないってわけじゃないよ。でもさ、結局、中学生の俺達に、現時点で考えられる将来なんて、たかが知れてるじゃん。いま、将来の目標が決まってるって言つてる奴らだって、これから先に、他にもうとやりたいことが見つかるかもしれないだろ。だから、俺達ぐらいの年の奴らにとっては、将来のことを決めることより、悩んだり考えたりすることのほうが大事なんじゃなかつて、俺は思うんだよね。まあ、決まってるのに越した事はないかもしねいけど」

「やっぱ、エーちゃん大人だなあ」

佑介が、改めて感心する。誠も、態度には示さなかつたが、佑介と同感だつた。

英治の言うとおりだ。結局、十五年かそこらの人生経験しかない自分達に、出来る事なんて、たかが知れてる。でも、だからといって、大人達の言う事に黙つてしまがつていく事で、自分が大人になつていけるとは思えない。

たかが知れているかもしれないけれど、出来る限り自分の力で、自分の意思で、自分の進むべき道を見極めて行きたい。そう思つて、大人達の示す道を拒む子供達を、大人達は、反抗的だの、素直じやないだのと言つて、眉をひそめる。

自分の意思で行動すれば、何もかも上手くいくなどと思うほど、世の中が甘いものではない事ぐらいは、わかっているつもりだ。それでも、失敗を恐れて、立ち止まつたり、誰かに頼つていたりしていたら、いつまでも子供のままじやないか。

素直である事と、従順である事は違う。だけど、大人達の多くは、それを履き違えてはいないだろうか。

「つて言うか、井岡は、東商行くんじゃないの？」

英治からの質問に、誠は我に返つた。

「えつ？」

どきりとした。佑介をちらりと横目に見ると、バツが悪そうに目

を逸らした。昨日の会話を思い出したのだろう。自分の心の弱さが、幼馴染にまで余計な気遣いをさせている事が、もどかしい。

英治にも、本当は東商に行きたいのに、父親に反対できず、一般受験をさせられそうだなんて、言いたくなかった。昨日も、佑介と亮平に晒した自分の弱さを、英治の前でも晒さなければならぬのが、嫌だった。

「いや、そりやあやつぱり、行きたいけど、なかなか簡単には決めらんないよ」

英治の質問を、中途半端にはぐらかした言葉が、自分の胸に突き刺さる。父に抗う事もできず、その弱さを、仲間の前で素直にさらけ出す事もできない。自分の弱さがつづく嫌になる。

「へえ、それこそ意外だな。井岡だったら、迷わず推薦受けたと思つてた」

「えつ、何で？」

「だつて、井岡つて、ほんとに野球大好きつて感じに見えたからさ。練習中だつて、誰よりも熱心だし。それに、東商には小松先輩もいるじゃん。むしろ断る様な理由なんてあるの？」

「いや、別にこれといつて、理由があるわけじゃないんだけど……」

言葉に詰まつてしまつ。佑介が心配そうな表情で、見つめている。

「でも、まだ、ちょっと迷つてるつてワケだ」

誠の気持ちを代弁するように、英治が言つた。柔らかく、穏やかな口調だった。

「うん……」

「そつか、まあ、皆色々だよね」

そう言つたきり、英治はそれ以上、深く追及して来なかつた。マイペースで、人に干渉される事を好まない英治は、自分が他人に干渉する事も好まない。誠は、そんな英治が好きだった。

人は人、自分は自分。誰もが違つて当たり前だし、人には話したくない事情があつて当たり前ののだ。でも、それを弁えて人と接するのは、なかなか難しい。必要以上に深入りしてしまえば、相手を

怒らせてしまつ。けど、あまりにも無関心だと、鈍感な奴だと思われてしまつ。

英治は、どちらかといえば人と距離を置く方だけど、かといって、他人に無関心な薄情者ではない。事実、野球部の後輩達にも、良くも悪くも熱くなり易い小川キャプテンより、常に冷静沈着で、客観的な視点からアドバイスをしてくれる、宮田副キャプテンを頼りにしている者も、少なくなかつた。

佑介のように、幼い頃から気心が知れていて、何でも言えるような友達がいて、英治のように、適度な距離感が心地よい友達もいる。翔太のように、生意氣だけど、どこか憎めない後輩もいる。誠は、東尾中野球部が大好きだ。でも、この仲間達と野球ができる時間は、もうそれほど長くは、残されていない。夏の大会が終われば、三年生は事実上引退だ。夏休みに入れば、塾の夏期講習も始まる。

未練は残したくない。後悔もしたくない。東尾中学野球部の一員として、完全燃焼したい。そして、その為には、自分はもっと、強くならなければならない。

「エーちゃん、今日は、部活、出れそうなの？」

校門を過ぎ、三年生校舎の昇降口まで着いたとき、誠が英治に聞いた。

「うん、今日は全然大丈夫」

「うん、じゃあ、また後で」

「うん」

そう言って、誠と佑介は三年七組へ、英治は三年四組の教室へ、それぞれ向かつた。

午前の授業が終わり、昼休みになり、弁当を食べ終えた誠の所に、藤田隆が声を掛けてきた。

「よお、井岡。お前今月の『メジャー・リーグ』持つてる?」

「ああ、確か机の中に……」

そういうて、机の中から一冊の雑誌を取り出し、隆に手渡した。その名の通り、アメリカのプロ野球、メジャーリーグの詳細情報が満載の、ややマニアックな雑誌だ。隆は、元は野球部員だったが、一年の秋に退部している。それでも野球そのものは大好きで、誠や佑介とは、今でもよく野球談議をする仲だ。

「サンキュー」

誠に礼を言って、自分の席に戻つて行く隆の背中を見つめて、誠はその背中に、無言で問いかけた。お前はどうするんだ? どこの高校受けるか決めたのか? それは自分の意志で決めたことなのか? 親や教師に決められたことなのか?

隆は、本当に野球が好きだった。打撃練習も、守備練習も、真っ先に駆け出して懸命に取り組んでいた。

だが、隆には才能が無かつた。小学校時代は、弱いことで有名な少年野球チームで、セカンドのレギュラーを勤めていたそうだが、中学では、どんなに練習を積んでも、殆ど上達しなかつた。それを露骨にバカにする者も少くなかった。

「センスねえ癖にでしゃばんなよ」

「もう辞めた方がいいじゃねえの?」

しかし、心無い言葉を浴びせられても、隆は必死に努力した。チーム内の紅白戦の最中、ピッチャーの動きに集中するあまり、青木のサインを見落として、即座に交代させられても、後輩の翔太がセカンドのレギュラーに選ばれても、隆は諦めなかつた。

だが、一年の秋に、肩を痛めた。医者に見せたら、野球を続ける

のは無理だと言われたらしい。それでも、まだ隆は諦めなかつた。
野球部の練習に参加し続けた。しかし、やはり隆の肩は限界だつた。
サークルから一塁への送球はおろか、キャッチボールもままならない。
肩が痛む事を恐れる気持ちが、無意識のうちにフォームを狂わせ、
もともと制球が不安定だった隆の投げるボールは、どこへ飛んでいくか見当がつかないほど、不安定になつてしまつた。

「これ以上いたら、皆にも迷惑だから」

最後にそう言い残して、隆は野球部を辞めた。

隆は、成績もあまり良くなかつた。塾などにも通つてはいるはずだが、あまり成績の向上には結びついていないようだつた。

大好きな野球もできずに、受験できる高校の選択肢も決して多くない。その将来に、同情するのは、傲慢だらうか？でも、自分の境遇は、客観的に見れば、隆よりもだいぶ恵まれているだらうと思う。甘えは許されない、恵まれた選択肢の中から、勇気を持つて、自分の意思で、進むべき道を決めなければならない。

自分の席に戻つて、ぼんやりと雑誌のページをめくる隆の姿を見て、誠は改めてそう思った。

午後の授業が終わり、部活の時間になつた。

「アップが終わつたら、打撃練習だ。一人3ストライクまで。まずは、レギュラー陣が打順どおりに、打席に入れ。その後は控え選手が一巡するまで続ける。打順が回つて来るまでは、それぞれの守備位置に就く。宮田は、ピッチングに専念して、バッティングは最後だ」

「はい」

青木の指示に、英治が頷く。部活の時には、眼鏡を外している分、いくらかスポーティマンらしく見える。

準備運動を終え、一番バッターの誠が、左バッター・ボックスに向かつた。

白い線で囲まれた長方形の中に入り、スパイクで軽く土をならし、バットの先でホームベースの角を軽く叩く。

三年生にとっては、最後の公式戦となる夏の大会まで、残り一ヶ月を切つている。部員達の練習態度にも、そろそろその緊張感が現れ始める頃だ。

誠も、徐々に緊張感が高まってきた。今までに無い程、悔いを残さない試合をしたいという気持ちが強いのが、自分でもはつきりと分かる。

中学最後の大会だから、当然かもしれない。でも、もともと自分は、闘争心の強いタイプではない。やるからには勝ちたいという気持ちは、いつだってあるけど、楽しめればそれでいいという気持ちのほうが、いつもは上回っている。でも今は、何か違う。

落ち着け。ここで終わりじゃないんだ。この大会が終わつたら、東商で甲子園を目指すんだろう。あのわからずやの親父を、説得して見せるんだろう。自分に言い聞かせる。

マウンド上の英治は、いつものように淡々とした様子で、ロージ

ンバッグを拾い上げ、一、二度指先でそれを擦ると、もとあつた場所にそれを落とし、指先に軽く息を吹きかけた。微かに舞い上がった白い煙が、ただでさえ無表情な英治の顔を、さらに見づらくなせる。

巣原田なしに、英治はいいピッチャーだと思う。チームメイトだから、当然、試合で真剣勝負をしたことは無いが、こうして練習中に実践的な勝負をしたことは、数え切れないほどある。ミートにはそれなりに自信のある誠でも、簡単に打ち込んだ記憶は、殆どない。コントロールのいい英治は、じっくりとボールを見極めようとしていると、あつという間に追い込んでしまう。どちらかといえれば慎重な誠には、相性も悪いかも知れない。

だけど、今日は絶対に、英治の球を打ちたかった。英治はいい奴だとは思うけど、西崎からの誘いを、あつさり断つた男には、絶対に負けたくない。決して、英治が憎い訳ではない。むしろ、いい奴だと思っている。だけど、自分の野球への想いを、自分自身に証明するためにも、ここは絶対に負けられない。

肩幅に足を広げ、軽く膝を折る。バットは気持ち短めに持ち、やや寝かせ気味に構える。誠が一番バッターとして定着した二年前の秋、辰弥に教わった、ミート重視の構えだ。

英治がキヤツチャ一のサインに頷いた。ノーワインドアップから、コンパクトで動きに無駄の無いきびきびとしたホームから、アウトコース低めに、キレのいいストレートが投げ込まれる。甘い球ではないが、決して手が出ないほど難しい球でもない。誠の読みどおりのボールだった。

英治は、決して非力な投手ではないが、力でねじ伏せるような豪腕タイプではない。打者の癖や傾向を読んで、駆け引きで打ち取るタイプだ。誠が普段は、初球にあまり手を出さないことを計算に入れて、見送るはずだと踏んでの配球だろつ。

誠は、バットを振り抜いた。自分で驚くほど、スムーズにバットが出た。金属音が響き、それとほぼ同時に、両手にボールを捉え

たという感触が伝わってくる。

ショートの頭上、普段は自分が守っているポジションにいる控え選手が、ジャンプして目一杯伸ばした左手のグラブを掠めるようにして、打球はレフト前に落ちた。

「ナイスバッティング！いいぞ井岡。初球だつて打てると思つたら積極的に打つていけよ

「はい！」

一打席目の初球にも、誠はバットを出した。今度はインコース低め、膝元に食い込むスライダー。英治の決め球だ。これも読みどおりだった。理由なんて無い。なんとなく、このボールが来るような気がしただけだ。今までの自分なら、こんな難しい球を狙つて打ちに行くなんて考えられない。だけど、今日は何故か、じつとしていられない。バットを振らずにいられない。

肘を置んで膝を曲げ、腰の回転を使ってコンパクトにバットを振り抜く。今度はライト線を破るツーベースコースだ。自分でも少し驚いた。英治の球を一球続けて、こんなに綺麗に捉えられた事は、今まで一度も無かつたはずだ。

「いいぞ井岡！その調子だ！」

「はい！」

今度はどんな球で来るか。マウンド上の、英治の表情に変化は無い。読めない。ならばこちらも、あれこれ考えるのはよそう。来た球を打つ。それだけだ。

そうだ。攻めろ、止まるな、行動しろ、積極的になれ。あれこれ考えるのは、その後でいい。

次に英治が投じたのは、ど真ん中への、渾身のストレートだつた。球種やコースを見極める余裕は無かつた。ただ、バットを振り抜いた。殆ど反射的に、体が動いた。今度も、ジャストミート。

次の瞬間、思わず、あつ、と息を飲む。ライナー性の打球が、英治の顔に向かつて飛んでいくのが、スローモーションのようになつて見えた。

「危ない！」

崩れ落ちるような体勢から、英治が反射的に突き出したグローブに、打球が収まる。

英治は立ち上ると、一二フォームについた土を手ではたきながら、珍しく悪戯っぽい笑みを浮かべながら、誠に聞いた。

「わざと？」

誠も、笑いながら答える。

「うん、わざと」

「こら、井岡。冗談でもそんなこと言つな」

後ろから、審判を勤めている青木にたしなめられる。

「でも、ほんとにいいバッティングだつたぞ。最後もアウトにはなつたけど、富田の全力投球を、綺麗に捉えたもんな。勿論捕つた富田も、ナイスキャッチだ。でも、それにしても今日の井岡は気持ちが乗つてゐるな。お前はいつも一生懸命だけど、今日は特に気持ちが入つてる感じがする。最後の公式戦まで、もう少しだからな。その調子でチームを引っ張つてくれよ」

「はい」

誠は、青木に一礼してベンチへ戻り、ヘルメットを置くと、愛用のグローブを持って、ショートの守備に就いた。

青木は、いつも誠を讃めてくれる。特に、心を讃めてくれる。ミスをしてしまった時にも、温かい言葉を掛けて、励ましてくれる。誰に対してもそうだ。青木のおかげで、どれほど自分に自信を持てただろう。何度失敗から立ち直れただろう。周囲の教師から、青木先生は甘い、とたしなめられる事も少なくなかつたと聞く。

甘さと優しさは、紙一重なのかもしれない。それでも、誠は青木が好きだった。青木のおかげで、名門東商からスカウトされるほど選手になれた。もつと上手くなりたい。もつと野球がしたい。こんなところで、自分以外の誰かの意思で、自分の野球を終わりなんて、させられてたまるか。

英治は、一番の翔太を、得意のスライダーで三振にしとめた。悔

しさに顔を歪めた翔太が、セカンドのポジションに向かう。

三番の英治の打順を飛ばし、四番の佑介が、バッター・ボックスに入つた。

佑介、俺の所に打つて来い。そう思つた。

初球。インコース低目へのストレート。佑介が一番苦手なコースだ。窮屈そうなスイングになりながらも、何とかバットに当たったが、完全に差し込まれてファール。

二球目。アウトコース低め、ストライクゾーンからボールになるスライダー。佑介は、出しけたバットを、途中で止めた。コースは完全なボールだが、スイングか、ハーフスイングかは微妙だ。バット、止まつてますよね、と言いたげに、青木の方を振り返る。

「ボール」

青木のボールを確認した佑介は、何度も小さく頷くと、再びバットを構えた。佑介も、いつも以上に気合が入っているように見えた。カウント1・1からの三球目。インコース高めのストレート。佑介は、今度はしっかりとバットを振り切つた。しかし、二球目の残像があつたのか、最も得意なはずのコースのボールに、佑介は差し込まれ、力の無い打球がレフトとショートの中間に、フラフラと上がりつた。

「レフト！」

「ショート！」

ナインが口々に叫ぶ。どちらの守備範囲とも言えない、微妙な打球。ポテンヒットになるかもしれない。だが、捕れる。

打球が上がつた瞬間、そう判断した誠は、一度打球から目を切り、後方へ全力で走つた。もう一度打球を見る。思ったより伸びている、でも、飛びつけはあるいは……。

迷うな。行け。

自分の声が、聞こえたような気がして、誠は力強く地を蹴つて左手を目一杯突き出した。グローブの先にボールの重みを感じた次の

瞬間、うつぶせの姿勢から、つんのめる様に倒れ込んだ。着地の寸前にぎゅっと閉じた目を開き、左手を見ると、相棒はしつかりとボールを捕まえていた。

「ナイスショート！」

セカンドから回り込んできた翔太が、そう言つて手を差し出した。誠も手を差し出し、翔太に腕を引かれながら立ち上がる。

「絶好調じゃないスか。さすが、未来の甲子園球児！」

翔太にそう言われて、誠は少し照れてしまったような気持ちになつた。

「何言つてんだよ。大会近いんだから、お前も気合入れとけよ」

そういうつた後で、翔太の言葉を胸の内で繰り返す。未来の甲子園球児。東商野球部へ入つたとしても、自分の力が、どこまで通用するかなんて分からぬ。それでも、可能性はあるはずだ。東商のレギュラーの地位を勝ち取る事ができれば、高校野球の聖地、甲子園の土を踏む事も、決して夢ではない。そのチャンスが、今の自分にはあるのだ。そのチャンスを、逃したくない、手放したくない。挑戦してみたい。

佑介が、英治の球を捕らえた。今度は三遊間への痛烈な打球。逆シングルの姿勢で打球に飛びついたが、わずかに届かなかつた。起き上がり際に佑介の方を見ると、こっちを見て笑つている。

俺も負けないぜ。だから、お前も諦めるなよ。東商に行つて、これからも一緒にやろうぜ。佑介の目が、そう言つてゐる気がした。

誠も、少し笑つた。

練習が終わり、いつものよじりグラウンド整備をしていると、佑介が声を掛けってきた。

「随分、気合入ってたじやんかよ」

そういうた佑介の顔は、どこか嬉しそうだった。

「当たり前だろ。最後の公式戦まで、一ヶ月切ってんだから

「最後にする気なのか？」

佑介の顔は笑っている。

「してたまるかよ」

誠も、笑顔でそう返す。

「だよな。誠、青木先生にも相談してみよっぜ。もしかしたら、おじさん、説得してくれるかもしないぜ」

「そうか、顧問である青木に相談すれば、力になってくれるかもしない。」

「そうだな。帰りに、ちょっと話してみようかな」「がんばれよ。校門のどこで、皆と待ってるからな」

そういうて、親指を立てた佑介に、誠も同じ仕草で応える。

「うん」

グラウンド整備と、道具の片づけを終えた後、誠は、青木を呼び止めた。

「先生」

職員室へ引き返そうとしていた、青木が振り返る。

「どうした、井岡」

「あの、ちょっと話したい事があるんですけど」

「何だ？」

「あの、進路の事なんですけど……」

「東商の推薦の件か？」

青木の顔が、引き締まつたのが分かった。おそらく青木も、西崎

の誘いを受けた三人の中で、唯一明確な返答をしていなかつた誠の事を、気にしていたのだろう。

「俺、東商で野球がしたいです。でも、親父に反対されてて……」

「そうだったのか。それで返事が遅れてたのか。確か、井岡の親父さんで、学校の先生だったよな」

「はい」

「確かに、親父さんの立場からしたら、一般受験して欲しいと思うかもしれないよな」

青木の言葉に、不安がよぎる。先生、あんたも一緒によ。結局学歴が全てかよ。信じたのに。あんたは違うって、あんたら力になつてくれるつて、信じてたから相談したのに。

「でも」

誠の不安を打ち消すように、青木は続けた。

「井岡の進路は、他の誰でもない、井岡自信のものだからな。お前が東商で野球をやりたいって言うんなら、俺はその気持ちを尊重したい」

よぎつた不安が消し飛ぶ。やつぱりこの人に相談してよかつた。大人の中にも、こんな風に子供の立場に立つて、ものを考えてくれる人もいるんだ。

「家に連絡して、俺が親父さんに相談してみようか?」

青木の言葉に、一瞬期待してしまう。自分が言うより、顧問の青木が話した方が、義秀を説得しやすいかもしれない。でも……。

言葉に詰まる。青木は急かす事はせずに、誠が事得るのをじつと見守つてくれているように見える。

甘えてはいけない。頼つてはいけない。ここで誰かの力を借りるわけにはいかない。

「いえ、やっぱり、それは自分でやります。わざわざ、話を聞いてくれたのに、すみません。やっぱり、自分の力で、親父を説得してみます」

そうだ。他の誰かに頼つてはいけない。それに、青木が義秀に相

談してくれたとしても、義秀がそう簡単に、納得するとは思えない。もしかしたら、余計に話がこじれてしまうかもしれない。そうなつたら、青木を恨む気持ちが生まれるかもしれない。それは嫌だ。この人を、嫌いになりたくない。

「どうか。井岡、随分大人になつたな」

青木の表情が崩れる。

「えつ？」

「いや、なんて言うか、井岡はいつも真面目で、俺も含めて、先生や親の言う事に反発するような事とかつて、今まであんまり無かつただろ？それは、基本的にはいいことなんだろうけど、でも、俺は少し不安だつたんだよ。本当に、この子は大人達の言う事に納得してゐるのかなつて、本当は、言いたい事があるのに、そういう気持ちを押し殺して、我慢してゐるんじゃないかなつて。もっと自己主張してもいいじゃないかなつて、少し心配だつたんだ」

「先生……」

「がんばれよ、井岡。親父さんと話し合つて、お前がどんな結論を出したとしても、俺はそれを尊重するよ」

そういつて、青木は両手で誠の肩を優しく掴んだ。

「ありがとうございます」

嬉しかつた。この人に相談してみてよかつた。自分の野球への想いを、こんなにも大切にしてくれる大人がいる。それだけで、自分は決して間違つてはいけないという気になれた。勇気をもらえた。

「何とか、自分で親父を説得してみます」

「そうだな、自分の事は、自分で出来るようにならないとな」

「はい、失礼します」

そう言って、誠は、青木に頭を下げた。

薄暗くなつた学校を出ると、校門の所で、佑介達が待つていた。

「どうだつた？」

と、佑介。

「うん、やっぱり、相談してよかつた」

「先生、おじさんのこと説得してくれそう?」

「ん、そういうわけじゃないけど、でも、いいんだ」

佑介の顔色が変わる。

「なんだよそれ、おじさんの事、説得してくれるように、先生に頼んだんじゃないのかよ?」

「そんな事頼んでないよ。ちょっと、親父を説得するのに手こずってるって、そう言つただけ。そんで、先生と話して、相談してよかつたって、俺は思った。それで充分だよ」

「でも、誠……」

佑介は、まだ腑に落ちない様子だった。

「まあまあ、井岡自身が先生と話して、それでよかつたって思つてるんだから、それでいいだろ?」

英治が、佑介をたしなめるように、やつ言つた。こうこうこうが、英治は大人だと思う。勿論佑介もいい奴だけど。

「じゃあ、やつぱ、井岡先輩、東商行くんスか?」

翔太が尋ねる。

「行くよ。絶対行く」

宣言した。みんなの前で、はっきりと言い切つた。言つた以上、もつ後戻りはできないぞといつところまで、自分を追い込むために。

「よし、やるうぜ、誠。一緒に甲子園行つちやおうぜ」

佑介が、肩に手を置く。

「ああ」

やれる。今日ならきっと、父に自分の気持ちをぶつけられる。簡単には、いかないかもしね。だけど、絶対に諦めない。諦めるものか。

「ただいま」

家に帰ると、いつものように母が出迎えてくれた。

「お帰り、今日も随分練習がんばったのね」

泥だらけのユニフォームを見て、優しく微笑んだ母の顔を見て、

誠は少し、考え込んだ。

母さんは、どう思つているんだろう。

井岡家では今の所、誠は義秀の意向に従い、一般受験をするという事になっている。

母はどう思つているのだろう。自分が、本当に、義秀の意見に納得した上で、その考えを受け入れた思つてているのだろうか。

自分が、まだ野球への未練を断ち切れてないことに、気づいているのだろうか。もし、その気持ちを、自分が父にぶつけたら、母は自分の味方になってくれるだろうか。

父とは対照的に、母はいつも優しかった。誠を庇つて、自分が夫に怒られたりしても、いつも後で、義秀のいない所で、慰めたりしてくれた。そんな態度を、父から、甘いと叱責されることも少なくなかった。初めて、東商の推薦の話を持ち出した時も、「誠がそうしたいのなら」と、母は言つてくれた。

しかし義秀に、

「お前は甘い」となじられると、『氣の弱い母は、何も言えなくなってしまった。父に強く言われれば、母はそれ以上反対する事はできない。そんな母に、頼りなさやもどかしさを感じた事も、無かつたわけではないが、それ以上に、家族が自分の意見に従つて当然。と思つているかのような父の態度に、いつも怒りを感じていた。そして、そんな父に逆らえない自分自身にも。母の事は好きだ。でも。

援護は、期待できないな。一瞬脳の内で呟いた後で、思い直す。

いや、それでいい。自分の力だけで、父を説得すると、心に決めたのだ。だからこそ、青木の申し出だって断つたのだ。

「父さん、今日も遅い？」

「今日は、特に何も連絡ないら、九時くらいには帰つてくるんじゃない？お父さんに何か、用があるの？」

「うん、ちょっと」

「……そう

一瞬、間があった。しかし、それ以上は何も言つて来なかつた。美奈子なりに、何か察したのだろうか。でも、それは今の自分には関係ない。あくまでも一対一で、父を説得するのだ。

部屋に戻つた誠は、いつものようにすぐには風呂場に向かわず、グローブの手入れをした。ローションをしみこませた布で満遍なく汚れを落として、薄くオイルを塗りよく馴染ませた後で、ボールを中心に挟んで伸縮性のある専用のベルトで固定する。いつもより、少しだけオイルの匂いが強めなグローブの匂いを、ゆっくりと鼻から吸い込み、野球への想いを再確認する。

今日こそは、必ず父に自分の想いをぶつけるのだ。皆の前でも、東商に行くと宣言した。もう、後へは引けない、逃げるわけには行かない、負けるわけには行かない。

風呂場でシャワーを浴びながら、誠は東商からスカウトを受けた日の夜、父とその事について話し合つたときの事を思い出した。「父さん、今日さ、東尾商業の監督から、うちで野球やらないかって誘われたんだ」

誠の言葉を聞いた義秀は、一瞬間を置いて、抑揚の無い声で言った。

「どうか、それで？」

表情は殆ど変わらないが、微かに威圧的な光が目に宿る。

それで？聞かなくても、わかるだろう。俺は東商で野球がしたいんだ。わかつてゐるくせに、どうしてそんな言い方をするんだ。そう思つても、口に出来ない自分の意気地の無さが、もどかしい、

歯痒い、情けない。

「……だめかな」

やつとの思いで、一言だけ搾り出した。

「駄目に決まってるだろう」「

間髪入れずに、義秀に斬り捨てられた。威圧的な眼光が、さらに鋭くなり、誠を睨めつける。誠は、それ以上何も言えなかつた。

「誠、学校は、何をしに行く所だ」

押し黙る誠に、義秀が追い討ちを掛けた。

これも、義秀が誠に、“学校は勉強をするために行く所”と言いたいのは、明白だつた。だけど義秀は、こういう時、自分の口からは決して言わず、誠に言わせるよう仕向けるのが常だつた。義秀は、暴力を振るう事は無かつたものの、言葉で徹底的に追い詰めて来る事が、多々あつた。そのやり方が、誠に、どれ程の屈辱を与えた、自身への不信感を募らせていくのか、義秀は全く気付いていなかつた。いや、気付こうともしていなかつた。少なくとも、誠にはそう見えた。

「どうした誠。聞かれた事に、答えられないのか?」

義秀は、白々しく怪訝そうな表情を作り、誠に返答を迫る。誠がそれでも黙つていると、義秀は、これもまた白々しく大きなため息をついて、

「じゃあ、教えてやるよ。学校って言うのはな、勉強するために行く所なんだよ」と言つた。

義秀は、こいつ時、妙に芝居がかつた口調になる。その言い回しも、誠は大嫌いだつた。

「野球が好きだから、野球の強い学校へ行きたい。その気持ちは、俺にもわかる。でも、もうお前も、それだけじゃいけない年齢だろう」

嘘だ。何が“わかる”だ。あんたは、俺の野球への熱意を、ひとつも分かつちゃいない。分かるうともしていない。いつだってあんたはそうだ。俺が何かに夢中になつても、それが自分にとつて理解

の出来ないものだと、あからさまにけなすんだ。野球だけじゃない。保育園に通っていた頃、夢中になつて見ていたテレビ番組の変身ヒーローや、小学校の頃、当時人気だったアニメキャラのカード収集に熱中したときも、どうせ大人になつたら、こんなもの、見向きもしなくなるんだ、せつかく小遣いをやつてるんだから、無駄遣いをするな、なんて言つて、いつもバカにしていたくせに。

「お前の為に、言つてるんだぞ」

義秀が続ける。

その言葉を聞いた時、誠は奥歯をぎゅっと噛み締めた。

義秀がよく使う言葉の中でも、最も嫌いな言葉だった。

本当に俺の為なのか？自分の為じやないのか？俺を自分の理想通りの人間に造り上げて、自分が満足したいだけなんじやないのか？義秀は、いつも一方的だつた。誠の側に、歩み寄るようなことは考えていない、自分の側に一方的に、誠を引っ張り込むことによつて、距離を縮めようとするのだ。

義秀は、誠が自分の意見に異議を申し立てて、口論になると、例え誠が筋道を立てた主張をしても「お前は、まだ若いから、そんな風にしか考えられないんだ」とか、「お前も親になれば、俺の気持ちがわかる」等とつて、決して誠の主張を受け入れようとはしなかつた。

自分は大人であり、親である。だから子供である誠より、物事の道理を深く理解しており、より正しい道を導き出す事ができる。だから誠は、自分に言う事に従う事が、当然である。そんな傲慢さが、義秀の一拳手一投足に、ありありと見える。

大人だからなんだ。親だからなんだ。歳をとれば、何でもわかるのか。あんたが俺に示す道が、必ず成功に繋がつていると、あんたは保障できるのか。あんたの言う通りにして、上手くいかなかつた時、俺が後悔した時、あんたは何を保障してくれるつて言うんだ。あんたの為に失われた時間を、傷つけられた自尊心を、あんたはどうしてくれるんだ。

誠はいつも、そう思っていた。しかし、その気持ちを父にぶつけ事ができなかつた。そんな自分の弱さが、父の傲慢さ以上に許せなかつた。それなのに、

「もう一度、しつかり考えてみろ。自分の将来のために、どうするのがベストなのか。もつ子供じゃないんだから、それくらいわかるだろう」

子供じゃない?いつもは、お前なんてまだ子供だつて、馬鹿にしてるくせに。一体、あんたの中で、俺は子供なのか大人なのか、どっちなんだよ。そのときの都合で、大人扱いしたり、子ども扱いしたり、どこまで身勝手なんだ。胸の内で父を罵倒する自分が惨めだった。

「そんな話、俺は絶対に認めないぞ。何の為に、高い月謝を払つて塾にも行かせてやつたと思つてるんだ」

行かせてやつた?誠が、自分から塾へ行きたいなどと言つた事は一度も無い。それなのに、あんたは、行かせて“やつた”と思つているのか。怒りの中に、呆れが混じる。

「もう一度言つた。俺はそんなの絶対許さない。わかつたな」寝室へ向かう父の後姿を、黙つて見送る事しか出来なかつた時の屈辱が蘇つて来る。あんな思いは、二度としたくない。

今度は負けない。父にも、自分自身にも、絶対に負けられない。父よ、勝負だ。

自室の勉強机で、数学の問題集を解いていた宮田英治は、一区切り付いたところで問題集を閉じて、数分前に母が持つて来てくれた、アイスコーヒーの入ったグラスを手に取り、ストローを口に咥えた。グラスの中で、溶けかけた氷がカラランと音を立て、水滴が一滴、机の上に落ちた。英治は、咥えたストローからは口を離さずに、指先でなぞるようにして、机に落ちた零をふき取つた。放つておいても、すぐに乾いてしまうだろうが、性格的に放つておけないのだ。

そんな性格を人からは、几帳面だと言われる事もあれば、神経質だと言われる事もある。ただ、英治自信は、人が自分をどう評価しようと、あまり気にしないタイプだった。

人は人、自分は自分、みんな違つて当たり前。人に干渉される事も、逆に干渉する事も、英治はあまり好まない。誰かに何かを相談したりする事も、滅多に無い。自分でも、個人主義な性格だと自覚している。それが悪い事だとは思わないが、そんな自分が今、ひどく気になつている男がいる。自分でも、こんなふうに、他人のことが気になるのは珍しいとわかつてゐるから、少し驚いている。

男の名は、井岡誠。野球部のチームメイトだ。

東尾中野球部の一番ショート。自分と同じく、東尾商業野球部監督、西崎俊雄の誘いを受けた男だ。自分はそれを断つたが、井岡は東商入りを望んでいた。しかし、父の猛反対に遭い、悩んでいた。今日登校時に、偶然会つた時も、井岡の幼馴染でもある野球部主将で、同じく西崎の誘いを受け、すでに東商行きの決心を固めているという小川佑介も交えて、その話をして、井岡が、心から真剣に悩んでいいると感じた。

英治は、西崎の誘いを初めから断るつもりだった。野球は好きだけど、本気で、現実的な目標として甲子園出場を狙うような環境に身を投じて、そこに自分が馴染めるとは思えなかつた。

学生の本分はあくまでも勉強だ、などという決まり文句に、迎合するつもりはさらさら無かつたが、かと黙つて、部活を最優先した進路選択をするという発想は、全く無かつた。

東商への推薦を断り、公立高校を受験すると決めたのは、百パーセント自分の意思だ。誰かに、相談もしなかつた。そもそも、その道を選ぶのに、殆ど迷いなどなかつたから、誰かに相談しようとも思わなかつた。両親も、反対はしなかつた。

自分は今までに、あれほど深刻な悩みを抱えた事は、無い。

子供の頃から、要領がいいとよく言われた。勉強も、スポーツも、それほど必死に取り組んで来たわけではなかつたが、何をやつても平均以上の能力を発揮できた。友人が多いタイプではないが、かと言つて周囲から孤立しているわけではないし、異性からの人気も決して悪くはない。比較的裕福な家で生まれ育ち、家族との関係も良好だ。

どれも、強く望んで手にしたものではない。学校の成績や、野球の技術に関しては、人並みに努力もしたが、それもあくまで“人並み”だ。

勉強、スポーツ、人間関係、家庭環境、英治がそれほど高望みをしなくとも、どれも充分に満たされていた。だけど、そのどれか一つさえ、どんなに望んでも、決して手に入らない境遇に生まれた者もいる。井岡の場合は、家族関係に悩んでいるということになるだろう。

教師をしているという、井岡の父。井岡の話からすると、かなり厳格な父なのだろう。

英治は井岡に対して、“そつが無い様で、どこか不器用”といふ、少々矛盾した印象を持つている。

勉強も結構できる。野球も東商からスカウトされるほどの実力がある。なのに、どこか危うい。同じクラスになつた事が無いので、殆ど部活のみの付き合いだつたが、一年間一緒に野球をしていても、井岡の不器用さを感じたことは、少なくなかつた。

不器用といつても、技術的なことではない。むしろ技術的な面で言えば、井岡ほど器用な選手はないと思う。ショートでの堅実な守備は勿論、バッターとしても、ミートの正確さは野球部の誰もが認めるところだ。バントなどの小技も上手い。

英治が感じている、井岡の不器用さとは、精神的な部分だつた。

英治は、野球部顧問青木健一の指示で、井岡がピッチャーをやらされた時の事を思い出した。英治達の学年には、エースを務める英治以外の投手がいまひとつ頼りなかつた為、去年の秋、一学年上の先輩達が引退し、新チームが発足した直後に、野手の中から投手が出来そうな者を、青木が何人か試したのだ。井岡も、その内の一人だった。適任だと思った。井岡は肩もそこそこだし、何よりコントロールが良い。多少無理な姿勢からでも、悪送球は滅多にしない。

実際、紅白戦で初登板を果たした井岡投手は、青木が期待した通りの、安定したコントロールを見せ、立ち上がりは危なげなかつた。しかし、結果的には打ち込まれた。原因は、アウトコース一辺倒の配球である事は、明白だつた。キヤッチャーが、そんな単調なりードをしたわけではないだろうし、井岡自身も、インコースを狙つて投げたボールが無かつたわけではないだらう。だが、優しい性格の井岡は、インコースを狙つても、無意識にデッドボールを恐れる気持ちが働いてしまい、ボールが真ん中寄りにいつてしまつたのだ。

気持ちに迷いがあれば、しっかりと腕を振り切つてキレのあるボールを投げる事はできない。小学生時代からピッチャー一筋の英治は、その事をよく知つてゐる。

甘く入つた棒球を、次々に打ち込まれた井岡は、自ら青木に降板を申し入れ、結局ピッチャーも辞退したのだった。

その井岡が、厳格な父の意向に、断固として立ち向かおうとしている。朝会つた時には、まだ、はつきりと迷いが感じられた。だが、午後になつて、部活で顔を合わせた時の井岡は、別人の様にふつ切れっていた。少なくとも、英治にはそう見えた。もしかしたら、一心不乱に不安を打ち消そうと、もがいていただけなのかもしれない。

だが結果的に、井岡は、英治の決め球であるスライダーも、渾身のストレートも、迷いの無い鋭いスイングで、ほぼ完璧にバットで捉えた。井岡のバットに、今日ほど見事に自分の投球を捉えられた事は無かつた。井岡は、その後守備でも、小川が打ち上げた際どい打球にダイビングキャッチを試みて、見事に捕球している。

練習後に、小川の勧めもあって、井岡は青木に、進路の事を相談しに行つた。そして、はつきりと東商へ行くと、断言した。その時の井岡の、凜とした口調と表情が、無性に羨ましかつた。そして、自分がそんな感情を抱いている事に、驚いた。深刻な悩みを抱えた事のない自分は、その辛さを知らない半面、逆にそこから抜け出したときの喜びも知らない。

人生山あり谷ありというが、その喻えで言えば、自分のこれまでの人生は、小高い丘が延々と続いているようなものだと、英治は思つた。いつでも、周りの人より満たされていて、大きな転落は、今のところ一度も無い。言う事ないじゃないか。何が不満なんだ。

でも、そう思う一方で、不安定で起伏の激しい、けれど刺激的な人生に、少し憧れたりもする。それは、本当の苦難を知らない者の、贅沢な無いものねだりだろうか。

自分の感情が、小さくはあるけれど、しかしそうかりと、確実に波打つているのを、英治は感じた。

井岡は、父を説得できるだろうか。

誰にでも優しくて、人を傷つける事を嫌う井岡は、自分を含めた野球部員達からも好かれている。とりわけ井岡は後輩達から好かれていた。上下関係の厳しい体育会系において、井岡の様な存在は、些細な事でギクシャクしがちな中学生のチームの和を、さりげなく保ってくれる。井岡はいい奴だ。

出来れば、井岡の父には、息子の願いを聞き入れてやつて欲しい。あの不器用な井岡が、あんなにはつきりと自分たちの前で、決意表明したのだ。その気持ちを、汲んでやって欲しい。

今日の井岡を見る限りでは、その決心は簡単には、揺らぎそうも

無い。だが英治は、あの時、マウンド上でうなだれて、自ら降板を申し入れた、井岡の脆さも知っているだけに、不安もあつた。

らしくないな。他人の事を、こんなに気に掛けるなんて、でも

でも、中学生なんて、本来そんなものなのかもしない。

大人と子供の境目の、どつちつかずな微妙な年頃。小さなことに、大きく揺れ動くのが当たり前じゃないか。そしてきっと、自分も例外ではないのだ。

「どつちみち、俺が心配したって、どうしようもないか」

波打つ感情を振り切るようにひとりごちて、英治は飲みかけのアイスコーヒーのグラスを手に取った。

グラスの中に半分ほど残っているアイスコーヒーは、すっかり氷が溶け切ってしまい、表層の部分だけ、殆ど水のようになってしまっている。

英治はそれを、ストローで念入りにかき混ぜてから、少し躊躇したけれど、グラスに直接口をつけて一気に飲み干した。

ベッドに横になり、仰向けの姿勢から、ボールを天井へ向かって軽く投げる。手首のスナップを利かせて、指先でスピinnを掛けて、ほぼ垂直に投げる。舞い上がった頂点で、一瞬静止するくらいのスピinnを掛けるイメージで、投げる。落ちてきたボールを、グローブのポケットにしつかり収まるよう、注意しながらキャッチする。考え方をする時、誠はいつも、この“一人キヤツチボール”をすると、落ち着いてゆっくりと物を考えられるのだ。小学校高学年の頃、自然と身についた。

投げては捕り、捕つては投げ、集中力を高める。

風呂にも入った。夕食も済ませた。歯磨きもした。ついでに、少し散らかっていた、机の上も整理した。後はもう、父の帰りを待つだけだ。

大丈夫、自分がやるひとしていることは決して、間違つてなんかいない。だけど

では、父の考えは？

父が、自分に示している道は、間違つているのか？
亮平との会話を思い出す。

そんなに簡単に決められる事じやないだろ。自分の将来にも関わる事なんだから、野球やり

たいからってだけで、あっさり決められるかよ

あの時、亮平の追求から逃れたいだけで、言ったわけではない。自分の中にも本音でそう思う気持ちがある。父の考えも、決して間違いではないだろ。でも、今はそれを認めたくない。

東商で野球をしたいという自分の気持ちを「将来の事を、何も考えていない」と罵る、父の考えを受け入れる事は、負けたことにな

るよつな気がするのだ。

何に対しても負けなのかは、自分でもはつきりとは分からぬ。父の傲慢さなのか、それに抗えない自分の弱さなのか、学歴を重んじる社会の規範なのか、今の誠にはわからない。ただ、ここで負けたら、自分は絶対に後悔する。そしてもしそうなつたら、それを義秀のせいにしてしまう。そうなつたら、自分があまりにも惨めだ。自分の人生が、思い通りに行かない事を、誰かのせいにして引きずつていくなんて、あまりにも惨めじゃないか。

そうだ。俺が一番したいことは、東商で野球をすることじゃない。誠は今、確信した。

一番したいことは、自分の進むべき道を、断固として自分で決める事なのだ。誰のどんな反対があるとも、それを貫き通す意志の強さが欲しいのだ。

お前、親の言いなりじゃん。

あの時は、何も言い返せなかつた、弘之の言葉。でも、今は違う。親の言いなりになんてなるものか。自分の人生は自分のものだ。自分の未来は、自分の意思で、自分の力で、勝ち取るのだ。どんなに厳しい言葉を投げつけられても、どんなに激しい叱責を受けようとも、今日の俺は、絶対に怯まない。退かない。負けない。だから……、

覚悟はもう決まっている。父よ、早く帰つて來い。

義秀は、美奈子の言つた通り、九時過ぎに帰つてきた。誠は息を潜めて、扉越しに聞こえてくる、両親が交わす言葉に、耳をすました。

義秀は、いつものように、まずは夕食を済ませ、それから風呂に入つて寝るつもりのようだ。

誠は、どのタイミングで、父に話を切り出そうか考えた。その結果、義秀が、食事も風呂も済ませ、もう寝るだけ、というタイミングがベストだらうと、誠は考えた。義秀に、「食事中だから」とかも「もう風呂に入るから」といった、話を途中で切り上げる口実を考えないためだ。

「「うそつさま」」といつ、義秀の声が聞こえた。おやじく、そう時間をおかずには、義秀は風呂場へ向かうはずだ。

誠の予想通り、義秀は食後すぐに、風呂場へ向かった。扉のすぐ向い側を、義秀のものと思われる足音が、通り過ぎて行つたのだ。リビングから風呂場へ向かうには、誠の部屋の前を通らなければならぬから、今聞こえた足音が、義秀が風呂場へ向かうものだつたのだろう。

時計を見ると、午後十時を少し回つていた。

誠は、部屋の扉を開いて、リビングの食卓へ向かい、椅子に腰掛けた。

「どうしたの？怖い顔して」

「えつ？」

食器洗いの手を止めて、美奈子が尋ねた。母にそういうわれて、誠は初めて、自分の顔が強張つてゐる事に気づいた。だけど誠は、母の不意の問いかけに、思わず緩んだ顔を、もう一度引き締めた。隠す必要は、無いと思つた。

「ちょっと、父さんに、話があるんだ」

「そう……」

それだけ言つて、美奈子はまた食器洗いに取り掛かつた。台所で、食器を洗う母の背中を見つめながら、誠は、考えた。母さんは、俺が何を話そうとしているのか、聞こうとしなかった。たいした話ではないと思ったのだろうか、それとも、大切な話だときづいているからこそ、あえて深く追求しなかつたのだろうか。母の背中からは、察する事はできない。そう思つて、誠が美奈子から目を逸らしたとき、食器を洗い終えた美奈子が、声を掛けた。

「何か、冷たいものでも飲む？」

「うん」

話し合いの前に、喉を潤しておく事は大切かもしれない。

「オレンジジュースでいい？」

「うん」

美奈子が、氷の入つたグラスに、オレンジジュースを注いだ。誠は、それを一気に飲み干した。自分でも気づかないうちに、喉が渴いていたらしい。

「おかわりは？」と、美奈子。

「ん、もう大丈夫」

「そう」

美奈子が、冷蔵庫に、ジュースをしまった。

誠は、グラスの中に残った氷を、口に含んで噛み碎いた。甘つたりオレンジジュースより、こいつのほうが、今の自分の喉には、いいような気がする。

美奈子が、テレビのリモコンを取り、電源を入れた。特に見たい番組があつたわけではないらしく、無作為にチャンネルを切り替え、スポーツニュースで、野球情報が流れているのに気づき、手を止めた。

「見る？」

「あ、うん」

メジャーリーグでプレーする、日本人選手の活躍が、ダイジェス

トで紹介されている。鍛え抜かれた身体と、洗練された技術で、夢を掴んだ男達。彼らは、野球を続ける事を、親に反対されたりはしなかったのだろうか。それとも、彼らは子供の頃から、親までもが、その将来に夢を膨らませるような、圧倒的な才能を見せ付けていたのだろうか。

自分は、どうだろう。小学生時代も、五年生から、ショートのレギュラーを任せられていたし、中学でも一年からサードのレギュラーで、辰弥の引退後は、ショート。打者としても、小中通して、主に一番を打ち、リードオフマンを務めてきた。それなりに実績を残したのかもしれないが、自分より明らかに上手いと思える選手も、試合などで何人も見てきた。客観的に見て、自分が傑出した才能を持つているとは、思えない。だけど、それと、自分が東商で野球をするのとは、全く別の話だ。

自分には、東商で野球をする資格がある。たとえ、芽が出ず、三年間ベンチ入りする事すら出来なかつたとしても、ここで父の意思に押し切られて、行きたくもない学校へ行かれるよりはましなはずだ。結果が全てじゃない。

「野球、好きなんだね」

母の声に、はつとした。

「すっこい、真剣な顔で見てた」

「いや……別に」

また、知らず知らずのつひこ、顔が強張つてのを、母は勘違いしたようだ。

「野球、続けたい？」

「……うん」

「……そうだよね、せっかく強い学校から誘われたんだもんね」

「うん、でも、やっぱり好きなことばかりじゃいけないとも思つし……」

だからと言って、父の意見に従う気は無い。だが、母が、自分と父が衝突する事を心配しているのだとしたら。もし、これから、自

分と夫が、口論する場面を田の辺たりにして、母がそれを悲しんだら。

今日こそ揺るがないと思っていた決意が、ここへ来てわずかに揺らいだ。

義秀は、まだ、風呂から上がつてこない。

「母さんは、どう思ひ？..」

今度は、誠が逆に、美奈子に尋ねた。

「進路の事？」

「うん」

「うーん、どっちかなあ。自分の好きな学校へ行つて欲しいとも思うけど、お父さんの言つとおり、堅実な道を選んで欲しいとも思う。優柔不断かもしないけど、どっちつていうふうに言いつて、ることは出来ないな」

美奈子は、義秀のように、誠に何かを強要することは決して無いけれど、こちらが意見を求めたときにも、はつきりとした答えが帰つてこないことが多い。優しいと言えば優しいが、頼りないといえば頼りない。

「ごめんな、はつきりしなくて」

誠の胸の内を、見透かしたかのよう、美奈子が言つた。

頼りないかもしれないけれど、母は確かに、自分のことを想つていてくれている。頭から見下して、自分の理想を押し付けて、それを「お前のため」などと言つ父とは違つ。

「別に謝んなくたつていよい。自分の事だもん。自分で何とかするよ」

「そう……」と言つて、美奈子は微笑んだが、その笑顔の目にだけは、微かな悲しみが宿つてゐるうに、誠には見えた。

息子が、精神に自立しようとしている、その成長を喜びながらも、力になつてやれない自分を恥じてゐるのだろうか。

「父さん、遅いね」

そういうて、誠は、風呂場の方に顔を向けた。母の顔から目を逸らす口実が欲しかつた。

「そういえば……」

誠は、ふと思い出した。

「昨日、父さん帰ってきた時、部屋の扉越しにちょっと聞こえたん
だけど、父さん、俺になんか言おうとしてなかつた？」

「えつ？ ああ、そう言えば、でも、もう寝ちゃつたって言つたら、
それ以上何も言わなかつたから、何の用だつたかはわからなかつた
けど。お父さんも酔つてたみたいだから、あの後お風呂入つて、す
ぐ寝ちゃつたし」

「そう」

自分が神経質になりすぎていたのだろうか。

その時、風呂場の扉が、開く音が聞こえた。義秀が、風呂から上
がつたのだ。

いよいよだ。

母との会話で、少し決意は揺らいでいたけど、もうわずかな迷い
は吹っ切っていた。

大丈夫、やれる、そう簡単に、今の俺の決意は揺るがない。

「母さん」

「何？」

「出来れば、二人だけで話したいんだ」

「……わかつた、頑張つてね」

美奈子はそう言って、微笑んだ。その目からは、先刻の見せたよ
うな悲しみは感じられなかつた。

美奈子が寝室へ入り、扉を閉じたのとほぼ同時に、義秀の足音が
聞こえてきた。

「なんだ、起きてたのか」
風呂から上がったばかりの義秀は、タオルで髪を拭きながら、言った。

「父ちゃん」

「どうした？」

「あのわ……ちょっと、話があるんだけど」

「何だ、改まって」

そう言いながら、義秀は、誠の向かい側の椅子に、腰を下ろした。
「母さんはどうしたんだ？まだ風呂にも入ってなかつただろう」
父の質問には答えぬまま、小さく息を吸つて、誠は言った。

「俺……、どうしても東商で野球がしたいんだ」

あの日から、ずっと言いたかった、言いたくても言えなかつた言葉を、父に告げた。

義秀の表情が、一瞬硬直する。驚いているように見えた。誠が未だに野球への未練を引きずつてゐる事など、予想もしていなかつたかのようだつた。少なくとも誠には、そう見えた。

「何を言つてるんだ、お前は？」

「俺は、東商で野球がしたい」

もう一度言つた。

義秀が、一、二度目をしばたかせた。

「今さら何を言つてるんだ。前にも話しただらう。高校へ行つたら勉強に専念して、野球はやめるつて、俺と約束しただらう。もひ忘れたのか？」

義秀は、呆れ氣味に言つた。だけど、こちらもはじめから、義秀がすんなりと聞き入れてくれるとは思つていない。ここで怯んではいけない。黙るな。言い返せ。相手に飲まれるな。

「……違う」

父の目を真っ直ぐに見据えて、誠は静かに、しかしあつさりと、
そう言った。

「違う？何が違うんだ？あの時、お前の為にも一般受験する方が良いんだって事を話して、それで、お前だって納得したんだろう」「俺は納得なんてしてない。俺は約束なんかしてない。父さんが、勝手にそう思い込んでるだけだ」

自分の言葉が、自分自身を興奮させ、語調が荒くなる。誠の義秀の目を見る視線は、殆ど睨むようなものになつた。

「あー、だったらどうしてあの時最後は何も言わなかたんだ？」何も

わからない？本当にわからなかつたのか？あの時の俺の態度を見て、自分の言葉に納得したのだと、この父は本気でそう思つているのか？独りよがりな理屈を押し付けて、一方的に話を切り上げたという事を、全く自覚していなかつたのか。

違う。本当は、わかつているのだ。今回の、進路の事だけじゃない。いつもそうだった。誠が何も言い返せなくなるまで徹底的に捻じ伏せて、“正しいのは自分”という形を作る事で、義秀は誠を、支配してきたのだ。憎い。父の傲慢さが、心の底から憎い。

誠は、自分の腹の底から、怒りが込み上げてくるのを感じた。いつもは、こういう攻撃的な感情は、いつもは抑制し、胸の内に仕舞い込んでしまっていた。ぶつけたくても、ぶつける勇気がなかつた。だけど、今日は、違う。覚悟は決まっている。抑えない。抑えられないのではなく、あえて抑えない。

「じゃあ、あの時、俺が何か言つたら、父さんは聞く耳を持つてくれたのかよ。いつもいつも、自分の言う事一方的に押し付けてばかりで、俺の言つことになんて聞く耳持たないくせに」

ぶつけた。幼い頃から、胸の奥で燻らせていた思いを、初めて、はつきりと、父にぶつけた。かつて、父にこれほど強い口調で、言葉をぶつけたことは無かつた。

「どうしたんだ、誠？ 何をそんなに、怒ってるんだ」

義秀は、田を丸くした。本気で驚いているようだ。息子が、何故自分に対してこんなに怒りをぶつけてくるのか、理解できていないのだろうか。

鈍い。鈍すぎる。

自分を正しいと信じきっている、傲慢さのなせる業だ。

自分は正しい。だから、息子が自分に従うのも当然だ。きっと、いつだって父はそう思っているのだ。今までは、そんな父に、黙つて従ってきた。従つしかなかつた。逆らえなかつた。だけど、今回は違う。

退くものか。諦めるものか。絶対に、父に自分の意思を認めさせよやるのだ。

「別に、どうもしないよ。俺は東商へ行つて野球をやる。ずっとそう決めてた。それを言いたかっただけ」

今度は、感情を抑えて冷静に言つた。それが当然であるかのように。そうだ。当然なのだ。自分の進路を、自分の意志で決める。自分がやろひとしていることは、至極当然の事なのだ。

「お前、今更何を言つてるんだ?」

義秀は、眉間にしわを寄せ、呆れたように言つた。驚きが、怒りと侮蔑に切り替わるまで、そう時間は掛からなかつたようだ。

「俺は、東商で野球をする」

父の田を真つ直ぐに見て、もう一度、はつきりと、自分の思いを口にした。

「はあ……」

義秀は、わざとらしくほど大げさな溜息をついた。よくあることだ、この程度の事で、今日の誠の心は、折れたりはしない。

「それで?その後はどうするんだ?まさかプロ野球選手になるなんて言い出すつもりじゃないだろ?」

予想外の言葉だった。一瞬、言葉に詰まる。

誠が、今思つてゐる事は、あくまで東商で甲子園を田指して野球がしたいという事だけだ。でも、もしかしたら、プロ野球選手にも、

なれるかもしない。そんな気持ちが無いわけではない。だが、それは決して現実的な目標ではなく、淡い夢のようなものだった。だけど

それを、父に一方的に否定されるのは、納得できない。

「簡単になれるとは思つてない。でも、もしかしたら、なれるかもしれない。そのために、少しでも高いレベルで野球がしたいんだ」「なれなかつたら？」

義秀は、断定的な言い方はしなかつたが、その口調には、そんな事出来つこないと言う嘲りが、はつきりと込められていた。

「そこまで先のことは、まだ考えていない」

「はあ……、もう、呆れて何も言えないな」

義秀は、もう一度大きな溜息をつき、吐き捨てるように言った。

こんな事を言えば、義秀が呆れるのはわかりきっていた。でも、それが、今の誠の正直な気持ちだつた。まだ中学生の自分に、高校を卒業した後の自分がどうなつているかなんて、見当も付かない。それが、悪い事だなんて、少しも思わない。

「前にも言つただろう、もう子供じやないんだから、もつと自分の将来の事を考えろつて。部活のためなんかに、学校選んでどうする。それで、怪我でもして、野球ができなくなつたらどうするんだ。自分の将来つていうのはな、楽しいとか楽しくないとか、そんなことで選ぶもんじやないんだよ。どうしたら、将来安定した生活が出来るか、それが一番大事なんだよ。それぐらいわかるだろう」

「じゃあ、俺が東商に行つたら、将来安定して生活は出来ないの？」

先の事なんて、誰にもわからない。それは大人も子供も同じじやないか。東商へ行くという選択が、誠の将来にマイナスになると、今の時点で断言することなんて、誰にも出来ない。出来るはずがない。

「確率の問題だよ。安定した将来を考えると言つてるだろ？叶うかどうかわからないような夢を見て成功する確率と、素直に俺の言う通りにして、堅実な道を選んで、大学へ行つて、収入の安定した

仕事に就ける確率。どっちが確實か、そのくらいわかるだろ？」「義秀はそうまくし立てて、自分の言つている事に反論が出来るか、とでもい言いたげに、誠の目を真っ直ぐに見てきた。誠は、視線を逸らさなかつた。

何なんだよ、その偉そうな態度は。“素直に”だつて？あんたが俺に求めているのは、“素直”じゃなくて“従順”だろ？あんたの言つ事聞いてりや、何もかも上手くいくみたいな顔しやがつて。「どうだ誠？どっちが確實だ？」

義秀が、重ねて問う。またそれか。

「自分の言つてる事のほうが正しげって、俺に言わせたいんだろう。だつたら最初から自分の口で、そう言えればいいだろ？何でいちいち、そんな勿体つけた聞き方するんだよ」

「お前が、何も分かっていないからだろ？」

「だつたら、あんたはどうなんだよ？」

「何もわかつてないだつて？だつたら、あんたは、自分は何もかもわかつているとでも言つのか？そんな人間、いるはずが無い。自分は絶対に正しいだなんて思つている奴こそ、何もわかつてない奴だ。確信した。父は間違つてゐる。

「あなたは何でもわかるのかよ？俺があんたの言つ通りにすれば、必ず上手くいくって、保障できるのかよ？」

「誠、お前、さつきから誰に向かつて口を利いてるんだ」

義秀は、ゆつくりと、威圧するような口調でそう言つた。誠は、怯むことなく答えた。

「父さんに言つてるんだよ。他に誰がいるつてんだよ
当たり前だろ？ここには、あんたと俺しかいないじゃないか。
わかりきつた事を聞くな。

「いい加減にしろ！」

義秀が、怒鳴つた。それでも、誠は怯まなかつた。

「俺が聞いたことに答えろよ。そんなでかい声だしたつて、誤魔化されないからな」

いいぞ。ここまで、一步も退かずに、父と渡り合っている。やれば出来るじゃないか。

「自分の言つてる事が、絶対に正しいなんて言い切れるのかよ？もし、あんたの言つ通りにして、上手くいかなかつたとき、どう責任取つてくれるんだよ。出来ないだろ？だつたら、そんなふうに何でもかんでも、自分の言つ通りにさせようとするとなよ。俺は……」

誠が、言いかけた時、寝室の扉が小さく開いて、美奈子が心配そうな顔がのぞいた。

「母さん……」

「美奈子、ちょっと」

義秀は、そういうて、空いた椅子を指差し、美奈子をそこへ座るよう促した。美奈子が、黙つてそれに従う。

「誠はどうしても、俺の言う事を無視して、野球を続けたいそうだ。お前、どう思う？」

義秀は、少し済ましたような微笑を浮かべながら、美奈子に尋ねた。初めから相手の回答を制限する、いつもの威圧的な口調だった。

「母さんは、関係ないだろ」

母の真意はわからない。ただ、父に強く迫られれば、母は自分の意思とは関係なく、父に賛同する態度を見せるだろ。そうなれば、父はさらに勢いづく事は田に見えている。そしておそらく、父の狙いが、そこににあるだろといふことも。

「関係ない事はないだろ。母さんにとっても、お前の将来は大切な事なんだぞ。どうなんだ、美奈子」

「あたしは……、誠自身の進路なんだし、本人の行きたい学校へ……」

美奈子が言い終わらないうちに、義秀が口を挟む。

「お前まで、何を言つてるんだ。どうしてもつと先のことまで考えないんだ。そうやって、お前が甘やかすから、誠が、こんな勝手な事を言い出すんだ」

義秀が、声を荒げる。美奈子は萎縮して、押し黙ってしまった。自分から、質問をしておいて、相手の言葉に割り込んでくる。これも義秀がよくやることだつた。会話をしていくても、相手の意見を聞き入れる姿勢など、頭から無い。自分の考えを、相手に一方的に押し付けるためだけの、ノリコニケーションしか出来ない。だから、こんな事ができるのだ。

父への怒りが胸の奥で、さらに激しく燃え上がる。それを、ぶつ

けてやりたい。いままでは、威圧的な父に萎縮して出来なかつたけれど、今日は出来た。今また、父にこの勘定をぶつけてやりたい。だけど、母が介入してきた事で、状況が変わつてしまつた。

これ以上、自分が父に抗えれば、父の怒りが母に受けられてしまう。いや、すでにその矛先は、母の喉元に突きつけられている。それに母自身、息子と夫が、これ以上言い争うのを見ているのは辛いだろう。

加勢はしてくれないけれど、誠が誠でいることを、いつも受け入れてくれた母を、これ以上苦しめたくないという思いが、固まつていたはずの決意を激しく揺さぶる。

今日も、ダメなのか。また父の思い通りになつてしまつのか。
嫌だ。

お前、親の言いなりじやん。

弘之の声が、頭の中に響く。

違う。俺は、親父に屈したわけじゃない。父の言つてている事を、認めたつもりも無い。でも、母さんを、これ以上苦しめたくないだけなんだ。

「誠、どうだ。これだけ言つても、まだ俺のいつことがわからないか」

義秀が、誠のほうに向き直つた。

誠は、俯いて視線を、逸らしてしまつた。

目を逸らすな。黙り込むな。今日の練習だつて、積極的なバッティングが成功したぢやないか。守備だつてそつだつただろう。あの時の気持ちを思い出せ。攻める。退くな。相手に飲まれるな。でも

俯いた誠の視界の端に映る、母の悲しげな表情が、奮い立とうとする気持ちを押さえつける。

「もう、俺は寝るからな。一人とも、もう少し頭を冷やせ」

義秀は、そう言って立ち上がり、寝室へ向かった。

16 (前書き)

今回で、一つ目の立場が終わります。でも、お話をまだまだ続くので、今後も宜しくお願いします。

一方的に話を打ち切り、寝室向かう父の背中。あの時と同じだ。止めなきや。今ここで、父を止めなかつたら、あの時と何も変わらないじゃないか。佑介達の前でも「絶対に東商へ行く」と、宣言したんじやないか。

俯いた顔を上げて、父の背中に何か言おうと口を動かすが、声にならない。

顔を上げたその目に、困惑した母の顔が映った。それとほぼ同時に、母は気まずそうに顔を伏せてしまつた。心が揺れる、決意が鈍る。だけど、今ここで父を引き止めなければ、絶対に後悔する。そう自分に言い聞かせ、沈みかけた気持ちを奮い立たせる。

「父さん！」

義秀が、面倒くさそうな顔で振り向いた。

「何だ。まだ何かあるのか？」

義秀は、げんなりとした表情で振り返つた。

「いい加減にしろ！誠、お前、学費を払うのは誰だと思つてるんだ」

「……それは……」

それを言われたら、何も言い返せない。だけど、親が子供の学費払うなんて当たり前じゃないか。それを引き合いに出して、自分の意見を押し通すなんて卑怯じゃないか。そう言つてやりたい。でも言いたくない。親が子供の学費を払うのが当たり前なら、子供はそれを、親に感謝するのだつて当たり前だ。でも、納得できない。たとえ高い学費を払つてもらつたとしても、行きたくもない学校へ無理やり行かされて、それを感謝する気にはなれない。だけど、それはやはり、甘えではないかとも思つ。

「大丈夫だよ、誠」

義秀は、穏やかな笑みを浮かべながら、そう言つた。
笑つてゐる？なぜ？

「お前はまだ若いから、そんなふうに思つんだ。大人になつて、働くようになったら、若いうちに勉強しておいて良かつたって思えるんだよ。そういうもんなんだ。みんなそうなんだよ」

父のその言葉を聞いた時、誠の中で張り詰めていたものが、 puff つりと切れた。

萎えた。心が折れた。

通じない。この人には、何を言つても、自分の気持ちは通じない。結果さえ良ければ、それでいい。そこへ辿り着くまでの過程は関係ない。この人は、そう思つているのだ。

がつくりとうなだれる誠に、義秀が追い討ちを掛けた。

「大丈夫だ、誠。父さんを信じろ」

やはり穏やかな笑みを浮かべて、義秀はそう言つた。

信じろ？息子の真剣な想いを真っ向から否定しておきながら、自分を信じじろだと？ふざけるな。怒りを通り越して、悲しくなつてきた。

こんな男が、自分の父親なのか。この男は、俺のことを一体なんだと思つているのだろう。自分の“もの”だとでも思つているのだろうか。そうとでも考えなければ、ここまで自分の“意思”を否定する理由がわからない。

自分のものだから、自分の思い通りにならなければ、許せないのだ。

義秀が、踵を返して寝室へ向かっていく背中に、もう一度声を掛ける気力は、誠には残されていなかつた。たとえ気力が残っていたとしても、父の心を動かす事のできる言葉は、見つからなかつただらう。

自分の父に、心の底から失望した。もつこの男と、心を通わせる事は不可能だ。心を通わせてみようと試みる気力すら、もつ沸いて来ないだろう。

父の姿が、寝室に消えた。

「誠……」

母が、泣きそうな顔で、自分の名を呼んだ。

誠は、母の問いかけには応えず、立ち上がりて自室へ向かった。母に、謝られたり、慰められたりすれば、なおさら惨めな気持ちになるような気がしたのだ。母もそれを察したのか、それ以上何も言って来なかつた。

自分の部屋に入った誠は、電気も点けずに、倒れ込むよつにベッドに突つ伏した。枕に顔を押し付け、声にならない叫びを漏らし、枕を何度も叩く。

説得できなかつた。あれほど強い決意で望んだのに、説得できなかつた。

何度言つても、父に自分の想いは伝わらないだろう。物事の考え方、父と自分は根本的に違うのだ。

もつ、このまま黙つて、父の言つ通りにするしかないのだろうか。

お前、親の言いなりじやん。

お前、親の、言いなりじやん。

言いなりじやん

言いなりじやん

言いなりじやん

弘之の言葉が、呪文のように頭の中で反芻される。頭を抱え込むよつにして、耳を塞いでも、忌まわしい記憶からは逃れられない。違う。違う。俺は、父の言つ事に納得なんてしていい。従つ氣もない。諦めきれない。だけど

もつ、どうしたらいいか、わからないんだ。

かつてない決意で望んだ、父との“決戦”に敗れてから一夜明け、井岡誠は、十五年の人生で、最も憂鬱な朝を迎えた。

食欲もあまりなかつたが、かと言つて朝食抜きで午前中の授業を乗り切れるほど、育ち盛りの体は、燃費がよろしくない。

ハイブリッドカーよろしく、人間の身体を外科手術で低燃費に改良できるほど医学が進歩したら、発展途上国の食糧難がどれほど改善されるだろう、などと馬鹿げた事を考えながら、香ばしく焼きあがつたトーストを「一ヒーで流し込むようにして強引に胃袋へ詰め込む。

あほくさ。声には出さずに、胸の内で呟く。我ながら馬鹿馬鹿しいとは思うが、今は少しでも、沈んだ気持ちを誤魔化したかった。朝食後の歯磨きを済ませて、制服に着替えた誠は、引きずりそうになる程重い足取りで、学校へ向かつた。

野球部の仲間に、合わせる顔がない。

昨日、顧問の青木にまで後押しられて「絶対に東商へ行く」と、高らかに宣言したにもかかわらず、父を説得できなかつた。

前にも一度、同じ話をした。その時も、断固として拒絶されたが、昨夜は、さらに決定的に拒絶された。

もう何を言つても、父に自分の想いは伝わらないと絶望させられるほど、頑なに拒まれた。

父の言つとおり、野球を諦めて学業一本に絞つた進路を選ぶ道しか、自分には残されていのだろうか。

「誠」

佑介が、笑顔で声を掛けてくる。大人顔負けの体格と不釣合いな丸顔で団子鼻の愛嬌のある顔で笑顔を見せられると、いつもは心が和むのだが、今朝に限つて佑介の笑顔は、どんな恐ろしい凶器よりも暴力的に、誠の心を抉つた。

「おじさんと、話しつけてきた?」

その質問が、誠の心の傷口を、さらに深く抉る。

「…ダメだった」

搾り出すように、誠は言った。出来れば、口にしたくなかった。

その言葉を口にすることで、より鮮明に、自分の重いが、父に受け入れられなかつたという現実を、突きつけられるような気がしたからだ。だけど、ずっと親身になつて、弱気な自分を後押ししてくれた親友に、結果を報告しないわけにはいかない。

「マジで? おじさん、そこまで、お前が野球続けるの反対なの?」

「もう、反対なんて次元じゃねえよ。完全拒否。俺今まで、あそこまで親父に本気の相談した事なかつたのに、完璧に否定された。もう、あのクソ親父に、何言つても無駄だよ。所詮、現実知らないガキが、夢見てるだけとしか思つてねえんだよ。畜生、ふざけやがつて」

顔をしかめて天を仰ぎながら、まくし立てるように吐き捨てる。自分でも、驚くほど愚痴っぽくなつていて。さつきまで、言いたくもなかつた事なのに、一言「ダメだった」と、話したこと事でたがが外れてしまつたのか、堰を切つたように父への悪態が、口を突いて出た。

亮平から聞かされた、木田という男の事を思い出した。

いつも優しくて、誰かの悪口なんか絶対言わないような人だったのに、親父さんのこと愚痴つてばつかで、なんか、かわいそうになつちゃつてさ、

佑介が、自分を哀れんではないだらうかと思い、佑介の顔を覗き込んだ。

「そつかあ。教師だもんなあ、おじさん。やつぱり、勉強のほうが大事つて事になつちやうのかなあ」

そう言つて、佑介も顔をしかめた。自分の事のように悔しがつて

くれる友の心遣いを、素直に喜べない。同情されていくようで、いたまらない気持ちになる。一日前にも同じ事を感じた。そんな自分が、惨めで仕方ない。

きっと木田といつ男の父親も、義秀のような傲慢な男なのだろう。誠は、木田とその父親が、どんな男なのだろうかと想像してみた。

まずは息子から。コントロールの良い投手だが、よくも悪くも神経が細やかな、自分より少し年上の男。体型は、細身のような気がするが、身長は高めのような気がする。体格としては、英治と同じくらいか。その体の上に、おとなしそうなたれ目で、顎の尖ったいや面長な顔が、小ちんまりと乗っかっているのが、目に浮かんだ。幼い頃から、父の特訓を受けていたという事だから、その顔はきっと日に焼けていただろ。野球をやめてからは、どうかわからないが。

次に父親。体育会系出身で、息子に野球の猛特訓を課してきた中年男。義秀と同じ、威圧的な目が真っ先に目に浮かんだ。四角い顔に、短く刈り込んだ髪型。口をへの字に曲げて、息子を睨めつける姿が容易に想像できる。会った事もないくせに勝手な想像してして、木田の父に怒りを覚える自分が、おかしい。体格は、息子と違つてがつしりしていそうなイメージだ。次に思い浮かんだのは、大きくて分厚い手。その手で、木田の父は、息子に暴力を振るつ」ともあつたのだろうか。

木田はそんな父に、どこまで抗つたのだろう。どこで諦めてしまつたのだろう。自分の意思を、自分の父親に一方的に捻じ曲げられた時、どれほど悔しかつただろ。どれほど惨めな気持ちだったのだろう。

自分もこのままだと、木田と同じ道を辿つてしまつかもしない。このままじゃいけない。このまま、父の意思に押し切られたら、絶対に後悔する。だけど、あの様子では、とても説得できそうにない。もう、どうしたらいいのかわからない。

「誠、コンビニ行こうぜ

「コンビニ？弁当持つてきてないの？」

特に用のない寄り道は、あまり好きではない。

「そうじゃねえけど、いいから行こうぜ」

佑介に押しつられ、誠は渋々コンビニの自動ドアをくぐった。

店内に入ると、季節感を無視したおでんの匂いが鼻をついた。冷房での効いた店内のレジカウンターの上で、もうもうと湯気を立てている什器から漂つてくるこの匂いが、誠は苦手だった。

コンビニでパートをしている母に、以前尋ねた事がある。

「今つてさ、一年通しておでんやつてるコンビニ多いけど、真夏におでんなんか買う人なんているの？俺、冬とかならいいけど、夏とかにさ、冷房で冷たくなった空気がおでんくさいのって、なんか違和感あるんだよね」

「よその店はどうか知らないけど、うちの店はお昼頃になると、そこそこ出るわよ。勿論寒い時期に比べたら、売れないから作る量も少なめだけだね」

「夏の昼間におでんなんて、どんな人が買つてくれるの？」

「年配のお客さんが多いかな？うちの店の近所は、結構多いみたいだし。一人、毎日のように買いに来るおばあちゃんがいるけど、その人は、ご主人が亡くなつて、一人暮らしなの。それで、一人分の料理作つても効率悪いからつて、よく買いに来てるわ。あたしも、最初は何も真夏にまで、熱々のおでん買わなくとも、つて思つてたんだけど、よく考えたら海の家なんかでもよくやつてるし、その場で食べるならまだしも、店で買ったのを家に持つて帰つて食べる頃には、熱々つてことはないだろうしね」

「そう言われてみれば、夏でもラーメンとかなら、熱々でも違和感無く食べれるな、と誠は思つた。

目からウロコ、と言つたら言い過ぎだが、その話を聞いた時妙に腑に落ちて、自分で、少し物の見方が広くなつた気がしたのを、誠は思い出した。かとつて、真夏におでんをつつく氣にはなれなかつたが。

固定観念、てやつか。

当てもなく店内をうろつきながら、口には出さずに咳いてみる。自分は、固定観念には縛られない人間になりたい。父のように、自分の考えだけを正しいと信じ、それを他者にも押し付けるような人間にはなりたくない。広い視野で、物事を考えられる人間になりたい。

お前、親の言いなりじゃん。

弘之に、あの言葉を突きつけられてからずっと、それまで何の疑いも無く、大人から与えられた課題を自分がこなしていた事に違和感を感じていた。勉強が出来なくたって、親の示す道ばかりを歩まなくたって、充実した日々を過ごしている人も、きっと沢山いるはずだ。逆もまた然り。勉強が出来て、親の言つ事になんでも従つてきても、その先に必ず、素晴らしい未来が待つてはいるとは限らない。先のことは、誰にもわからないのだ。

自分がやろうとしていることは、決して間違つてなんかいない。父がなんと言おうと、その気持ちは変わらない。でも、自分がどれほど父の意思を拒絶しようとも、結果的に、父の示す道を進む事になつたら、それは、父の考え方を認めるのと同じ事じゃないだろうか。諦めたくない。自分は、自分の進むべき道すら、自分で決められないような、弱い人間なんかじゃない。でも、どうしたら……

「誠」

「佑介」

佑介が、商品の入ったビニール袋をぶら下げて、立っていた。

「お待たせ。買つもん無いなら、もう行こうぜ」

「ああ」

佑介と並んで、店の出口へ向かう途中、賞味期限切れが近づいた商品を、無造作に籠に放り込む店員の姿が目に入った。

「ああゆうのつてさ、皆捨てちゃうんだろ? もつたいねえよな」

佑介が、小声で言った。

「うん、うちの母さんが働いてる店なんかは、一応従業員が食べた

り持ち帰つたりしてもいい事になつてゐるみたいだけど、その分を引いても毎日必ず人籠分くらいは余るみたい。店によつては、食べさしてもくれない所もあるみたいだよ」

「じゃあ、そういう店は、残つた食べ物は、全部ただのゴミになつちゃうんだ」

「そういうことだね」

自動ドアをぐぐるとき、もう一度ちらりと、件の店員の方へ目をやると、すでに三つの籠が商品で一杯になつていた。

発展途上国なんかじゃ、自分よりずっと幼い子供が、何人も、まともに食べ物も与えられずに死んでいる。その境遇と比べたら、自分はどれほど恵まれているだろう。きっと、世界的に見れば、日本に生まれたという事だけでも、相当恵まれている部類に入るはずだ。そう考えると、自分が抱えている悩みが、とても贅沢な悩みのようにも思えてくる。

俺は、やはり甘えているんだろうか。このくらいの事、我慢して受け入れるべきなのかもしない。

それが、自分の本心なのか、それとも自分を納得させる為に、必死で言い聞かせているだけなのか、誠自身にもまだわからなかつた。

「誠、これ飲めよ」

そういうて、佑介が差し出したのは、茶色い小さなガラス瓶に入つた、栄養ドリンクだった。

「結構効くぜ、それ」

「佑介……」

手渡されたガラス瓶を握り締めると、心地よい冷たさが、手のひらに伝わってきた。

これを買うために、佑介はわざわざコンビニに寄つたのだろうか。「先の事も大事かも知んないけどさ、俺達が、このチームで出れる最後の大会まで、もうちょっとしかないんだぜ。お前がそんなんじや、勝てる試合も勝てねえだろ」

「ごめん、なんか、変に気遣わせちゃって……」

「いいよそんなの。それに、東商で野球やるつもりなら、今のうちから、これまで以上に頑張らなきゃ、ついていけないぜ」

まだ、自分が東商へ行きたいという気持ちを、後押ししてくれるのか。嬉しかった。こいつと、これから先も、一緒に野球がしたいだけ……

いや、今はとりあえず、最後の大会に集中しよう。昨日の今日で、義秀に“再戦”を申し入れたところで、結果は同じだろ。それに、もしこのまま、本当に東商への道が断たれるとしたら、中学野球としてだけでなく、協議として取り組む野球も、この大会が最後といふ事になる。絶対に、悔いは残したくない。

「ありがとう、佑介。最後の大会、頑張りうぜ」

「おう、やううぜ」

誠は、ビンの蓋を開けて、ドリンクを一気に飲み干した。

「いい飲みっぷりだね」

後ろから声を掛けられて、振り向くと、英治がいた。

「おはよー、エーちゃん。俺、昨日、親父ともう一回話したんだけどさ、ダメだつた」

聞かれる前に、先に言つてしまつたほうが楽だと思い、誠はあるて、自分から昨日の事を、英治に話した。

「そんで、佑介が、そこのコンビニで、これ買つてくれたんだ」

飲み干した空き瓶を、顔の前でかざす。

「なる程ね、さすがキャプテン。いいところあるじゃん」

「まあ、最後の大会も近いし、主力メンバーがへこんでちや困るもんな」

「確かに、井岡の出塁率は、チームの得点に大きく影響するからね。自分が、チームから必要とされている。その気持ちが嬉しかった。その気持ちに、結果で応えたい。

「大丈夫、正直まだ完全には立ち直れてないけど、部活の時間までには切り替えるから」

「しつかり頼むぜ、誠。昨日みたいに、バッティングも守備も期待してるぜ」

佑介が、誠の肩を叩く。

「俺も昨日は、ちょっとショックだったもん。井岡にここまで打ちまくられたの、多分はじめてだよね」

「ショック、受けたようには見えなかつたけど」

「確かに、翔太なんか掠りもしなかつたし、俺ん時も、コントロー
ルばっちりだつたじやん」

佑介が、誠に賛同する。

「ショックを受けても、それがピッチングに影響しないよ」に、や
せ我慢するのが、エースの務めだからね」

確かに、英治は試合中にピンチを迎えて、全く表情を変えない。
投球だけでなく、自分のメンタルのコントロールも、抜群に上手い
のだ。

誠は、メンタルのコントロールが、やや苦手だった。打ち損じた

り、エラーをすると、考え込んで消極的になってしまいます。自分の精神面の弱さは、誠自身よく自覚していたし、自分にとつて最大の課題とさえ言えた。

だが、昨夜

結果的には、自分の主張が、父に受け入れられる事はなかつたが、今までにはないほど、父に自分の気持ちを激しくぶつけることが出来た事は、誠の中で、小さな自信にはなつた。

昨日の練習でも、積極的な姿勢が結果に結びついた。

まだ諦めるのは早い。俺はやれる。俺はあんな親父に、絶対負けない。

そう自分に言い聞かせた。

20 (前書き)

安西の学年を間違えていましたので、訂正しました。

県立水蘭高校一年G組の教室で、井岡義秀は世界史の授業を行つていた。

「安西、どこを向いてる。ちゃんと授業を聞いているのか」

義秀に名前を呼ばれた生徒、安西聰は、俯いた顔を上げて、表情の無い顔で一瞬ちらりと義秀の方に目を向けたが、すぐに顔を背け、窓の外の風景に目をやつた。無造作に染められた金髪。その頭頂部の、生え際から伸びた黒い地毛の部分がかなり伸びて、ぽっかりと空いた大きな穴のように見える。

義秀も、なんとなく、つられるように窓の外を見た。

体育の授業で、サッカーをしている生徒達が、目に映つた。窓が空いている事もあり、歓声や笑い声も、はつきりと聞こえてくる。視線だけを安西の顔に戻してみると、いつもの氣怠そうな表情で、外の風景を眺めたまま、ぼんやりと頬杖をついている。安西は、小中高と、スポーツとは無縁だったはずだ。おそらく今も、サッカーに興味があつたのではなく、自分の視線を避けたくて、そつちを向いただけなのだろう。

安西は、昨年度は義秀が担任を勤めていた、一年E組の生徒だった。その頃から、すでに成績は留年ぎりぎりで、義秀も、何度も安西の補修授業に付き合つた。

こちらの問いかけに、嫌気が差した時、虚ろな目で窓の外を見るのは、安西の癖だった。 義秀は、去年の一学期に、二人きりで行つた補修を思い出した。フランス革命についてだ。絶対王政の社会で、特權階級に虐げられてきた平民達が決起して起こした、この革命は、現代における民主主義の原点とも言われる。

「安西。今俺達が、民主主義の世の中で、独裁者に抑圧されずに生きていらるるのは、こういう人たちが、命がけで戦つてくれたおかげなんだぞ。お前も成人したら、選挙には必ず行きなさい。せつか

く与えられた権利を、むざむざ放棄するのは、怠慢だ。これは、平和な時代に生まれた人間の義務だぞ

「別に、俺がこいつらに革命起こしてくれって頼んだわけじゃないでしょ？俺政治とか興味ないし」

安西はこの時も、表情の全く無い顔で、そう答えたあと、虚ろな目で窓の向こうへ視線をやつたのだ。

水蘭高校は、学区内ではトップクラスの進学校である。ここへ入学していく者は、皆、中学時代までは、各中学でトップクラスの成績を収めてきた者ばかりだ。安西も例外ではない。

安西は水蘭の中では、下の下の劣等生だった。入学試験も、ぎりぎりでの合格だったと聞く。

“挫折に弱いエリート”などという言葉があるが、義秀は、安西にその言葉は当てはまらないような気がしていた。

義秀は、一年生の時も、安西のいたクラスで授業を受け持つていたが、安西は入学当初から、今と同じく、全く覇気の無い様子で、次第にクラス内でも孤立していった。

それから一年たった今も、安西は、当時と全く変わらぬ無気力さで、窓の外を眺めている。希望進路も、G組みの担任である後藤政信によると、一応四年生の大学という事になっているそうだが、今までは、よほど志望校のレベルを落とさない限り、合格できる大学は見つからないだろう。いや、それ以前に、こんな無気力なまま、大学に進学した所で、何の意味があるのでだろう。

義秀は、昨晚息子の誠に投げかけられた言葉を思い出した。

俺があんたの言つ通りにすれば、必ず上手くいくつて、保障できるのかよ？

大人しくて、素直だと思っていた息子が、あんなに感情を露にして、自分に食つて掛かった事は、初めてだった。その真剣な眼差しには、少したじろぎもした。だが、自分の教育方針を帰る気は、毛

頭無かつた。

息子に対しても、生徒に対しても、決して妥協はしない。子供達の意見を聞き入れていたら、きりが無い。子供の意見を尊重するなんていうのは、自分の教育理念に自信のない者たちの、逃げ口上だと、義秀は考へている。甘やかせば、子供は付け上がるだけだ。それでは本人の為にもならない。人生は、自の思い描いたとおりに運ぶほど、甘いものではない。人生経験の浅い若者に、現実の厳しさを教えてやるのが、大人の務めなのだ。

「安西、嫌な事から逃げ出したり、目を背けてばかりいたら、いつまでたっても成長できないぞ。もう、それぐらいわかる歳だろう」

安西が、目だけをこちらに向けた。先ほどまで何の感情も感じ取れなかつた眼差しが、微かに攻撃的で尖つたものになつたのを感じたが、義秀は、意に介さずに授業を続けた。

安西一人のために、授業時間を浪費すれば、他の生徒にも迷惑だが、決して安西を、このまま見捨てたりするつもりはない。同僚の中には、ああいう奴は毎年必ず一人はいるから、放つておけばいい、などと言つて傍観を決め込んでいる者もいるが、それは職務怠慢だ。

職務を全うするのが、社会人の義務。そして、一人前の社会人になるために、良い成績を取るべく努力するのが、学生の義務。それを教えるのが、われわれ教員の義務なのだ。

2.1 (前書き)

感想の収付を、ユーザー限定から、制限なしにしました。どんな事でも書込込んで下さい。

義秀は、海辺の小さな漁師町で育つた。義秀の父、井岡忠雄も、その父も、そのまた父も、漁師だつた。忠雄も当然、長男の義秀を、漁師にするつもりでいたし、義秀自身も、幼い頃にはそのつもりでいた。真面目で、勉強熱心だった義秀は、飲み込みも早く、義秀は、忠雄の期待を一身に受けついし、大漁旗をはためかせて、大海原へ繰り出す父の船は、誇らしくすらあつた。だが

中学生になり、自分の将来と言つものを真剣に考えるようになると、決して収入が安定して 事実、井岡家の経済事情は、決して恵まれているとは言えなかつた。そのくせ忠雄は、毎晩浴びるようにな酒を飲むものだから、家計は傾く一方で、両親が金の事で口論になることは、日常茶飯事だつた。両親が、互いを口汚く罵りあう姿を見る度に、義秀は漁師と言う職業に不安を持つようになり、こんな家族は嫌だ、自分は、将来安定した仕事に就いて、家族に経済的な負担を掛けない過程を築きたいと、願うようになつていつた。

だが、長男である自分が、漁師以外の職業に就く事など、父は決して許さないだろう。同級生同士で、将来について話し合つている時に、高校を卒業したらアパートを借りて大学へ通うなどと語つて、目を輝かせている仲間達の話を聞かされた時の、肩身の狭い気持ちは、今でも忘れられない。

大学へ通わせて貰うのは、さすがに厳しいかもしだいけど、せめて収入の安定した職業に就きたい。将来結婚して子供が生まれた時に、家族に経済的な負担を掛けたくない。そう思つて、一度忠雄に、相談した事がある。

「父ちゃん、俺、漁師とは違う仕事がしたい。自然が相手だから仕方ないけど、やっぱり俺、将来はもっと、収入の安定した仕事に就きたいんだ」

「馬鹿野郎っ！」

晩酌中の忠雄は、赤くなり始めた顔をさらに赤くして、義秀を拳で思い切り殴りつけた。

「ふざけたこと言いやがつて。俺の父ちゃんやじいちゃんが、ずっと守ってきた船を、お前はよその誰かにやっちゃまつてもいいってのか？寝ぼけてたこと言つてやがると、張り倒すぞ、この野郎！」

忠雄は、気性の荒い漁師仲間の内でも、短気で知られた男で、口より先に手が出るタイプだつた。そんな父に、漁師になりたくないなどと言えば、こうなる事は田に見えていた。だけど、言わずにはれなかつた。

「俺だつて、漁師の子供に生まれたくて生まれてきたわけじゃない！どうして俺の将来を勝手に……あつ！」

言い終わらないうちに、再び拳が飛んでくる。鼻からも口からも血が出ている。畳にこぼせば、母が気づいた時に心配させてしまつ。それが発端になり、また夫婦喧嘩が始まつてしまつ。自分のしたことが原因で、両親が争う姿を見たくない。そう思つて、懸命に手で顔を抑えた。

「口答えするんじゃねえ！」

自分自身の言葉が、怒りに拍車を掛けた様子で、忠雄は何度も、何度も、義秀を殴り続けた。父に殴られたことは、今までに何度もあつたけれど、この時ほど執拗に殴られたことは無かつた。義秀は、頭を抱え込んで亀のように丸くなつた姿で、恐怖と屈辱に耐えながら、何度も、何度も、自分に言い聞かせた。

俺は、こんな理屈の通じない人間には、絶対になりたくない。自分の思い通りにならなければ、暴力で人を捻じ伏せるなんて、絶対に間違つてゐる。正しい人間になりたい。正しい事が、何故正しいのか、それを子供に言つて聞かせることの出来る大人になりたい。教師と言つ職業を志すようになつたのは、その頃からだつた。

高校卒業と同時に、家出同然で実家を飛び出した。生活費捻出のために、三つのアルバイトを掛け持ちし、その合間に、独学で受験勉強をして、二浪の末に合格した夜間主の大学を、六年掛けて卒業

した。生活費も、学費も、自力で賄っている自分より、親の脛を齧つて通つてはいる、自分より若い同級生が、先に卒業して就職していくのを見て、一人悔し涙を流した事もあった。

そんな劣等感に苛まれていた苦学生時代に、後に妻となる田口美奈子と出会った。必修教科の英会話で、同じクラスになつたのだ。ショッちゅう宿題を忘れてくる、あまり勉強熱心でないグループの一人大つた。宿題を写させてやる代わりに、彼らに学食で昼食を奢つてもらう事が定番となり、親しくなつたのだ。

宿題もやつて来ないなんて、しかも人のものを写して提出するなんて、なんて自堕落な奴らだ。そう思つて、義秀は当初彼らを、少なからず軽蔑していたが、貧乏学生にとって、昼食を似ただでありますつけるのは捨てがたかたし、主管いつ忘れるたびに、自分を頼つて「お願ひします、井岡先生!」などと黙つて頭を下げて来る彼らが、教師を目指していたと言う事もあってか、どうにも憎めなくなつてしまつていたのだ。

大学を卒業して教師になつて三年目に、美奈子と結婚した。良くも悪くも大らかで、時にはそのアバウトさに呆れる事もあるけれど、一緒にいるとき肩の力を抜いてリラックスできる妻は、自分にとってかけがえの無い存在だ。さらに一年後に誠が生まれた。大人しくて、手の掛からない、心の優しい子に育つてくれた。

家業を継がなかつたことを根に持つていて、結婚にもあまり言い顔をしていなかつた忠雄も、誠が生まれてからと言うものの、事あることに「今度はいつ帰つて来るんだ」などと言うようになり、誠を可愛がり、父とのわだかまりも、消えていった。

人より少し遠回りをしたかもしね。だけど、後悔はしないな。人より苦労をしたからこそ、当たり前の事を幸せだと思える。

自分は幸せだ。そう思つていた。その気持ちが、昨夜、息子の言葉によつて、少し揺らいだ。

俺があんたの言つ通りにすれば、必ず上手くいくつて、保障でき

るのかよ？

いつも大人しくて温厚な息子が、怒りに満ちた田で、自分にそう言つたのだ。さすがにたじろいだ。

保障などは出来ない。ただ、自分は確率として、その方がリスクが少ないと、いう事を、言つたかったのだ。

学生時代に、好きな事に精一杯打ち込んで、思い出を作つておく事は、素晴らしい事だと思う。自分は、部活動に取り組むことそのものを、否定しているわけではない。

事実、自分の教え子が、部活の試合で勝つた報告をしてくれたりした時などは、心から嬉しかった。だけど、学生の本分は、あくまでも勉強だ。部活は、その合間に取り組むものるべきだ。

いくら名門校から、誘われたからと言つて、自分の学力レベルを大きく下回るような学校、へ息子が進学するなどと言つ事は、断じて認められない。

自分も中学生の時に、自分の将来をめぐって、父と揉めた。もしかしたら、息子も今、あのときの自分と同じような気持ちなのかもしれない。

だけど、自分と父は違つ。自分の言つ事は現実的で、理にかなつている。今はわからなくても、将来はきっと、自分の気持ちをわかつてくれるはずだ。

義秀は、そう信じていた。

東尾中学放課後のグラウンド。誠達野球部員は、夏の大会へ向けて本格化した練習に取り組み、汗を流していた。

ショートの守備位置に着き、青木のノックを受ける。ボテボテのゴロに、猛然とダッシュして打球を掬い上げ、前屈みの姿勢のままサイドハンドで一塁へ送球する。佑介がミットを構えた所に、一直線に送球が収まった。

「ナイスショート！」

顧問の青木健一の声も、次第に熱を帯びてきている。

誠達三年生にとって、一週間後に迫った夏の大会は、中学野球最後の公式戦になる。二年前は、主将・小松辰弥を中心とした、鉄壁の守備力で、県大会ベスト8入りを果たした。これは、東尾中の過去最高成績でもある。誠も主に、九番サードで出場している。去年は、三年生が比較的小粒だった事もあり、一番ショート井岡誠、二番セカンド菊池翔太、三番ピッチャー宮田英治、四番ファースト小川佑介というラインナップが、この時すでに定着していた。しかし、それは逆に、まだ成長過程の彼らを中心に据えなければならなかつた、チームの地力の弱さの裏返しでもあり、最後までチームとして機能しないまま、結局地区予選で敗退した。

だが、今年は違う。下級生時代からレギュラーを任されて来た、実戦経験豊富なメンバーが、今年は揃っている。守備力で言えば、二年前のチームには、やや劣るが、絶対的エース、宮田英治の安定感を加味すれば、失点を防ぐ能力は決して引けを取るものではない。上位打線の破壊力は、明らかに現チームのほうが上だ。トータルで見れば巣鳳目無しに、二年前のチームより、現チームの方が上だと、誠達は見てている。だからこそ、一年上の先輩達が引退して、新チームが発足した時、東尾中野球部発足以来となる、県大会優勝、つまり全国大会出場を目指に掲げたのだ。

父とは、ひとまず休戦だ。今はとにかく、目前に迫った、中学野球最後の大会に、全力を注いで。もう一度、自分の野球への想いを確認するためにも。

「ショート！」

今度は、痛烈な打球が一遊間を襲つた。間一髪、一塁キャンバス後方で打球をキャッチし、反時計回りに身体を反転させながら、その勢いを利用して、一塁へスナップスロー。体が軽い。こんなにも、自分のイメージ通りに体が動くなんて、初めてだ。

やれる。俺はやれる。県大会優勝も、甲子園も、決して夢なんかじゃない。自分の力に、自信がわいてくる。一度萎えた心に、力が漲つて来る。

見てるよ親父、俺は絶対負けないからな。あんたにも、自分自身にも。

佑介のミットに、送球が収まる。今度も、佑介のミットは微動だにしなかつた。

練習を終えて帰宅し、風呂と夕食を済ませた誠は、ベッドに寝そべり、いつものように一人キャッチボールをしながら、考えていた。最後の大会を戦い終えるまで、父を説得する事は、後回しにすることにした。中学生活、もしかしたら、野球人生最後の公式戦となるかもしれない大会に、悔いは残したくなかったからだ。

だが、悔いを残したくないのは、進路の問題も同じだ。後回しにしようと心に決めても、やはり頭の中から離れない。

もう一度、父と話し合ってみようか。いや、今は最後の大会に集中すると決めたじゃないか。それに、昨日の様子じゃ、今また父と話したって、結果は目に見えているだろう。でも、もしかしたら……

「はあ……」

誠はため息をついて、ボールを掴んだグローブを、スポーツバッグの中にしまった。

どうして俺は、こう優柔不断なんだろう。

一度固めたはずの気持ちが、簡単に揺らいでしまう。やると決めた事を、やり通せない。

登校中に、佑介や英治と話をしていた時も、練習中も「今は、最後の大会に向けて、部活に集中する」と、心に決めていたはずだった。それなのに、帰宅して自室に一人でいると、どうしても昨日の事を思い出してしまう。昨日もこうして、ベッドで一人キャッチボールをしながら、父を説得する事を考えていた。ずっと悩んでいたけど、仲間たちにも後押しされて、勇気を振り絞って、父に、自分の気持ちをぶつけた。しかし、その気持ちは、父に受け入れられなかつた。

父の、傲慢さを、鈍さを、視野の狭さを、心の底から憎んだ。許せなかつた。だけど、今自分が、この鬱屈とした気持ちから抜け出せずにはいるのは、全て父のせいにできるものだろうか。やはり、も

つと自分自身が強い気持ちで、父に立ち向かっていたら、こんな事には、ならなかつたのではないか。

昨夜、父を説得しようとする誠の気持ちが、最後の最後にぐらつかせたのは、母の悲しげな表情だつた。自分の夫と息子が、大声を出して口論をしていれば、心配にもなるだろう。だけど、そこで引いてしまつた事は、果たして正しい判断だつたのだろうか。

あの時「母をこれ以上悲しませない為に、これ以上父と言い争うのはよそう」と、誠は思つた。だけどそれは自分の本心だつただろうか。自分が、父を説得できなかつた事を、「母の為に」と言う方向に摩り替える事で、母のせいにする事で、逃げていたのではないだろうか。母を悲しませたくないかつたという気持ちは、決して嘘ではない。だけど、その気持ちは、東商への思いを断ち切るほど、強いものだつただろうか。自分自身に、問いただす。

否定は、出来なかつた。「母の為に、自分は気持ち緒抑えたんだ」と、自分に言い聞かせる事で、父を説得でいなかつた自分の弱さから、目を逸らしていたのだ。

誠は昨夜、母に「父と二人だけで話しがたい」と言つて、美奈子には、席を外してもらつていた。母が話し合いの場にいる事で、自分の気持ちを抑えてしまつかもしない、自分の気持ちを伝えきれない事があるかもしれない、という不安があつたのだ。結果的には、美奈子は耐え切れずに、一人の間に介入し、誠の気持ちは揺らいだ。あの時、母が話に入つて来なければ、父を説得出来たかも知れない。自分が、父を説得できなかつたのは、母のせいだ。そんなふうに思つてしまふ気持ちが、心のどこかにあつた。

俺は、自分の弱さを、母さんのせいにして誤魔化す為に、あそこであえて、父とこれ以上議論する事をやめたのか？

父だけでなく、母にまで責任転嫁をして、自分の弱さから田を背けている。そんな自分が、心底嫌になつた。

もう嫌だ。こんな自分が、情けない。自己嫌悪から逃れるように、誠は部屋の明かりを消し、布団を頭からかぶつて眠ろうとした。そ

れでも、その日はなかなか寝付けなかった。

誠が、眠れぬ夜を幾度か過ごした後の、大会前最後の練習日。東尾中野球部は、レギュラーチーム対控え選手チームの、紅白戦を行い、レギュラーチームの誠は、定位置となっている、一番ショートで出場した。

初戦の対戦相手、旭ヶ谷中はそれほど前評判の高いチームではない。過去の実績においても、東尾中より明らかに劣る。勿論、大事な初戦であることに変わりはないが、よほどの事がない限り、取っこぼしは無いだろう。誠も、そう思っている。

油断大敵と言うが、誠は性格的に、自分を追い込むより、少し気持ちに余裕を持たせるほうが、結果を出せるタイプである。だから誠は今「初戦は問題なし」と考えている自分の精神状態を、良い兆候であると捉えている。事実、英治の球を、ことごとく捕らえ、佑介の打球をダイビングキャッチしたあの日以降も、誠は好調を維持している。

進路の事で、気持ちにゆとりが無い日々が続いているが、部活の時間が始まってしまえば、ボールを追いかけているうちに、自然と憂鬱な気持ちは影を潜め、野球だけに集中する事が出来ていた。

一回の表、最初のバッターが、誠の正面にゴロを打つた。やや強めの打球。誠は、軽快なフットワークでボールに駆け寄りながらも、バッターランナーも視界の端に捕らえ、ある程度余裕を持って、刺せる、と判断した。

腰をしっかりと落として、丁寧に、包み込むようなイメージで、捕球する。一塁方向に視線を移すと、ファーストの佑介もすでに、一塁キャンバスに右足を掛けて、ミットをこちらに向けて開も佑介のミットだけに、資格を集中させ、ボールを投げ込む。ボールがミットに収まる。ややあって、バッターランナーが一塁塁上を駆け抜け、悔しそうに天を仰いだ。

英治は続く一人も凡退させ、控えチームの攻撃は三人でこの回を終えたが、誠が打球を処理したのは、その一度だけだった。どちらかと言えば、打撃よりも守備のほうが好きな誠にとっては、やや物足りなかつたが、それでも、初回の先頭打者の打球が、自分への比較的イージーなゴロだった事は、幸運だった。

公式戦でも練習試合でも、身内での紅白戦でも、一度ゴロを処理してアウトにするまでは、少し落ち着かない気持ちがある。フライやライナーでも、ひとつ処理する事で、落ち着けることに変わりはないのだが、捕球するだけでアウトになるフライやライナーよりも、捕球と送球が必要なゴロの処理のほうが、自分のその日の状態を、より多角的に判断できるし、何より誠自身、「ゴロを捌くことが好きなのだ。

バウンドするボールを追って、捕球して、グローブからボールを持ち替えて、送球する。その一連の動作を行うことで、自分の状態を確認するだけでなく、自分が試合に参加していると言つ事を実感し、より深くゲームに深くのめりこめるのだ。

今日も、状態はよさそうだ。

ベンチへ引き上げた誠は、バットを持つてネクストバッターズサークルに入り、控えチームの先発投手の投球に目を凝らした。今年の春に入部したばかりの一年生、渡辺章吾だ。制球力や、ランナーを背負つての投球など、技術面はまだまだ粗削りだが、小柄な体格の割りに球速があり、マウンド度胸もなかなかのもので、青木からも「将来のエース候補」と、呼ばれている男だ。

まだ小学生の面影が抜け切っていない、あどけない顔立ちだが、鋭く吊り上った目と、ややへの字氣味に結ばれた口が、レギュラーチームを打席に迎え入れても氣後れのしない、負けん気の強い性格を良く現している。そのギャップが、なんとも可愛い。実際渡辺は、マウンド上のふてぶてしさとは裏腹に、普段はどちらかと言えば大人しく、先輩達に対しても礼儀正しい為、誠も含め、上級生達から可愛がられていた。

そういうえば、俺も小松先輩によく可愛がつてもらつたっけ。あの頃から、もう一年も経つたのか。

自分よりも、一年分多く未来がある後輩を、少し羨ましいと思つた。でも、自分が後輩だった頃は、自分が持つていなし、先輩達の過去を羨ましく思つていた事を思い出し、誠はほんの少し、自嘲気味に笑つた。

渡辺の投球練習が終わり、誠は左バッターBOX入つた。いつものように、入念に足場を鳴らしてから、バットを肩に乗せて背筋を伸ばし、マウンド上のピッチャーに顔を向ける。自分でも気づかぬほど、自然に身についたルーティンワークだ。

マウンド上の渡辺と、目が合つ。誠は構えに入りながら、後輩達がまだ持つていない、自分の一年分の過去を、後輩達はどんなふうに思つているのだろう、などと考えていたが、構えを作り終えた頃には、全神経をマウンド上の投手のピッチングだけに集中させていた。

渡辺の球は、速いとは言つても、英治と比べれば劣る。技術面に關しては、比べるべくまでもない。荒れ球な分、英治よりも的を絞りにくいか、力んでカウントを悪くすると、置きに来る癖があるので、それを狙えば、攻略はさほど難しくない。

渡辺が、ワインドアップモーションから一球目を投じた。外角高めに大きく外れ、ワンボール。一球目も、ホームベース手前でワンバウンドする完全なボール球でツーボール。二年生のキャッチャー佐川龍平が、小刻みに肩をすくめるようなジェスチャーを交えながら、渡辺に「落ち着け」と、呼びかける。

誠は、次の一球を狙つっていた。ノースリーになる前に、ストライクを欲しがつて、置きに来ると読んだのだ。

その三球目。渡辺は誠の読み通りに、少し縮こまつたフォームで置きに来たが、それでもボールは高めに浮いて、ストライクゾーンから大きく外れた。マウンド上で渡辺が、唇を噛み締める。これでカウントはノースリー。セオリーなら、次の一球は『待て』の場面だ。だが、そんな消極的な気持ちに、喝を入れるかのように、自軍ベンチから佑介の声が飛んできた。

「誠、甘く入つて来たら打つていいぞ！」

佑介の言葉に、誠も頷く。

そうだ、後輩相手に受け身になつてどうする。ノースリーだから手を出しては来ないだろうだなんて、甘い考へで置きに来ようものなら、それを狙い打ちにしてやるくらいの積極性が、今の自分達には必要なのだ。

誠は、集中力をもう一段階高めてバットを構え、マウンド上の渡辺に目をやつた。渡辺は、少し追い詰められたような、緊迫した表情になつてはいるが、眼光はまだ衰えてはいない。先頭打者、それも部内屈指の快足を誇る誠をフォアボールで墨に出せば、大事な

初回に先制点を献上する事に直結しかねない。それに、何より、先頭打者をフォアボールで出墨させる事は、ピッチャーにとって、この上ない屈辱である。ましてや渡辺は、顧問の青木から、将来のエースと期待されている男だ。気持ちが引き締まるのも、当然だろう。

渡辺が、四球目のモーションに入った。置きに来る気配など、微塵も感じさせない、小さな体を目一杯使った躍动感溢れるフォームから投げ込まれた渾身のストレートは、ストライクゾーンのど真ん中に構えた佐川のミットへ、一直線に突き刺さつた。

「ストライク！」

主審青木の、右手が上がつた。

「ナイスボール！」

ボールを捕つたままの姿勢で佐川が叫ぶ。

誠は、バットを出さなかつた。正確には、出さなかつたのではなく、出せなかつたのだ。渡辺は、ここまで三球、明らかにボール球しか投げられなかつた。三球目に至つては、スピードを殺して、置きに来たにも関わらず、ストライクをとれなかつたのだ。そんな投手が、ノースリーから全力投球で、ど真ん中に投げ込むなんて。これだから、荒れ球の投手はやりにくい。

誠は、一球毎に投手の配球を深く考察するタイプのバッターだから、渡辺のような、細かく配球を考えるより、力で捩伏せに来る、粗削りなタイプの投手には、そういう「読み」が通用しにくいい為、どうにも調子が狂わされてしまう。今の一球が、まさにそうだった。

少々面食らつた。だが気圧されるという程のものではない。カウントはワンスリー。まだまだ打者優位の状況である事に、変わりはないのだ。誠とて、伊達に一年時からレギュラーを任せられているわけではないのだ。

さて、次はどんな球が来るのか。投手の特徴や、状況から、次の一球を読み当てるべく、思考を巡らせる。

渡辺の持ち球は、真っ直ぐの他には、縦割れのカーブがあるだけ

だつたはずだ。四球続けて真っ直ぐを放つたのだから、そろそろカーブが来てもいい頃だ。ただ、真っ直ぐのコントロールさえ覚束ない渡辺に、佐川がワンスリーから、すっぽ抜けやすいカーブを要求するとは考えにくいとも言える。五球連続直球勝負という事も、十分考えられるだろう。確率としては、半々くらいか。

カーブ待ちだと、真っ直ぐには振り遅れるだろうが、少々振り遅れてもレフト前に落とす事ぐらいの自信はあるし、例え打ち損じても、自分の脚力なら、打ち上げさえしなければ内野安打も狙える。逆に真っ直ぐ待ちでカーブに泳がされれば、転がしたとしても内野安打にはなりにくい。

よし、決めた。

真っ直ぐが来る可能性も念頭に置きつつ、カーブを狙う。ただし、カウントはワンスリーなので、際どいコースは見送る。これが一番無難だろう。

その五球目。渡辺が投じたボールは、ポン、と一度浮き上がりつてから、緩やかな弧を描いて落ちてきた。誠の読み通りのカーブだ。誠は、ボールの落差に、軸足の膝を折ることでスイングの高さを合わせ、素振りをするような軽さで、バットを振り抜いた。緩いボールは、力任せに引っぱたくよりも、力を抜いてしなやかにバットを振った方が、よく飛ぶ。誠の打球は、右中間を真っ一つに割るツーベースヒットになつた。

「ナイスバッティング！」

誠は一塁ベースに片足を乗せたまま、小さくガツツポーズを作つて、自分を称える仲間達の声に応えた。

一番バッターの翔太は、初球から送りバントを試みたが、胸元を抉るような渡辺の速球に、翔太のバントは失敗し、ネクストバッターズサークルにいる、英治の方へ飛んでいくフェアーボールとなつた。キャッチャーの返球を受け取つてから振り向きざまに、渡辺がちらりとこちらに視線を向けた。一塁ランナーの自分を睨む様に向けられた目は、依然として鋭い光を放つている。

誠は、以前青木の指示で、紅白戦のマウンドに立つた時の事を思い出した。投手の層が薄い事が欠点であるチーム事情から、安定した制球力を買われて、投手としての適正を試された誠は、デッドボールを恐れ、インコースを攻めきれずに自滅し、青木に自ら降板を申し入れたのだった。

自分は、投手には向いてないと思った。悔しくなかつたとまでは言わないが、もともと内野手志望だったし、その時は、それほど屈辱を感じることも無かつた。だけど、自分の心の弱さに打ちのめされそうな日々を過ごしている今になつて、改めて振り返つてみると、あの時悔しさが込み上げてこなかつた自分が、情けなく思えてくる。らと書いて、危ないボールならバッターだつて避けようとするだろうし、デッドボールなんてそう滅多出るものではない。ましてや、自分は制球力を買われて、投手としての適正を試されたのだ。自分でも、コントロールには自信があつた。なのに

なぜ、あんなに消極的になつてしまつたのだろう。降板した時、何故もっと悔しいと思えなかつたのだろう。

野球と言つ競技は、「ピッチャーガバッターに対して投球すること」で、初めて試合が動く。バッターは常に、投手に対して受身である。言い換えれば、ピッチャーガバッターに対する攻撃なのだ。それだけにピッチャーガバッターと言つポジションには、威力のあるボールを投げられる事と、それを狙つたコースへ投げる事のできる制球

力、そして、バッターに対して“攻める”という、強気な姿勢が求められる。

誠の場合、肩はそこそこ強い方だし、制球力ならエースの英治に次ぐ程のものを持っている。ただ、バッターに対して攻撃的な投球をするというメンタリティが、決定的に欠けていた。

「井岡は、優しいからな。ちょっとピッチャーには、向いてなかつたかな」

紅白戦終了後、青木にそう言われた。その時は「優しい」と言われた事が、少し嬉しくすら思つた。だけど、英治はどうだろう。デッドボールを与えてしまう事は、稀にだが、あつた。英治は、普段は優しい良い奴だ。だけど、試合中インコースを攻めきれずに自滅するようなピッチングは、一度も見た事が無い。制球力に自信があると言う事もあるだろう。だけど、誠とて、英治ほどではないにしろ、制球力は高い方だ。英治がデッドボールを与える確率と、誠がデッドボールを与える確率に、そう大きな差は無いだろう。なのに、両者の投手としての資質の差は明白だ。その差は何か。

やはり、それはメンタリティの差なのだろう。誠が不安になつて手元が狂つてしまつようなコースへも、英治は平常心で思い切り投げ込める度胸がある。小さな差のようだが、それは投手として、致命的な差だった。

投手と言うポジションに、未練は無かつた。ただ、投手失格の烙印を押された最大の理由が、自分の心の弱さであつたことを、渡辺の姿を見て、改めて実感させられたのだ。

マウンド上の小さな体が、少し眩しく見えた。少し嫉妬もした。

そんな自分が、凄く惨めだった。

一番バッターの翔太は、初球から送りバントを試みたが、胸元を抉るような渡辺の速球に、翔太のバントは失敗し、ネクストバッターズサークルにいる、英治の方へ飛んでいくフェアーボールとなつた。キャッチャーの返球を受け取つてから振り向きざまに、渡辺がちらりとこちろに視線を向けた。一塁ランナーの自分を睨む様に向けられた目は、依然として鋭い光を放つている。

誠は、以前青木の指示で、紅白戦のマウンドに立つた時の事を思い出した。投手の層が薄い事が欠点であるチーム事情から、安定した制球力を買われて、投手としての適正を試された誠は、デッドボールを恐れ、インコースを攻めきれずに自滅し、青木に自ら降板を申し入れたのだった。

自分は、投手には向いてないと思った。悔しくなかつたとまでは言わないが、もともと内野手志望だったし、その時は、それほど屈辱を感じることも無かつた。だけど、自分の心の弱さに打ちのめされそうな日々を過ごしている今になつて、改めて振り返つてみると、あの時悔しさが込み上げてこなかつた自分が、情けなく思えてくる。らと書いて、危ないボールならバッターだつて避けようとするだろうし、デッドボールなんてそう滅多出るものではない。ましてや、自分は制球力を買われて、投手としての適正を試されたのだ。自分でも、コントロールには自信があつた。なのに

なぜ、あんなに消極的になつてしまつたのだろう。降板した時、何故もっと悔しいと思えなかつたのだろう。

野球と言つ競技は、「ピッチャーガバッターに対して投球すること」で、初めて試合が動く。バッターは常に、投手に対して受身である。言い換えれば、ピッチャーガバッターに対する攻撃なのだ。それだけにピッチャーガバッターと言つポジションには、威力のあるボールを投げられる事と、それを狙つたコースへ投げる事のできる制球

力、そして、バッターに対して“攻める”という、強気な姿勢が求められる。

誠の場合、肩はそこそこ強い方だし、制球力ならエースの英治に次ぐ程のものを持っている。ただ、バッターに対して攻撃的な投球をするというメンタリティが、決定的に欠けていた。

「井岡は、優しいからな。ちょっとピッチャーには、向いてなかつたかな」

紅白戦終了後、青木にそう言われた。その時は「優しい」と言われた事が、少し嬉しくすら思つた。だけど、英治はどうだろう。デッドボールを与えてしまう事は、稀にだが、あつた。英治は、普段は優しい良い奴だ。だけど、試合中インコースを攻めきれずに自滅するようなピッチングは、一度も見た事が無い。制球力に自信があると言う事もあるだろう。だけど、誠とて、英治ほどではないにしろ、制球力は高い方だ。英治がデッドボールを与える確率と、誠がデッドボールを与える確率に、そう大きな差は無いだろう。なのに、両者の投手としての資質の差は明白だ。その差は何か。

やはり、それはメンタリティの差なのだろう。誠が不安になつて手元が狂つてしまつのようなコースへも、英治は平常心で思い切り投げ込める度胸がある。小さな差のようだが、それは投手として、致命的な差だった。

投手と言うポジションに、未練は無かつた。ただ、投手失格の烙印を押された最大の理由が、自分の心の弱さであつたことを、渡辺の姿を見て、改めて実感させられたのだ。

マウンド上の小さな体が、少し眩しく見えた。少し嫉妬もした。

そんな自分が、凄く惨めだった。

一球目も、翔太はバントの構えを見せたが、渡辺の投球は大きく外角へ外れた。翔太は投球の直後にバットを引き、カウントはワンボール・ワンストライク。投球後、勢い余つて一塁方向へ体を反転せた渡辺が、顔をしかめる。明らかに力んでいる。力んで体の開き

が早くなっているから、ファイニッシュでバランスが崩れるのだ。

ただでさえ制球が不安定な投手だ。相手バッテリーとしては、ボーアル先行は避けたいはず。逆にこちらとしては、ツーストライクを取られたら、スリーバント失敗の危険がある。次の球で、翔太に確実にバントを決めてもらいたい。

三球目は、一級目同様翔太の胸元付近に来たが、若干コースが甘い。コン、と音がして、三塁線へ、絶妙に勢いが殺された打球が転がる。一塁ランナーの誠が、スタートを切る。カードのダッシュがわずかに遅れた。ライン際で、殆ど止まりかけた打球を、マウンドから素早く駆け下りた渡辺が拾い上げるとほぼ同時に、誠が三塁へ滑り込む。それを見て、渡辺が身を翻し一塁へ送球する。矢のような送球だった。翔太も懸命に走ったが、後半歩及ばずアウト。立ち上がって、ユニホームについた土を払っていると、控え選手チームのカードを守る加藤義彦が言つた。

「さつき、カーブ狙つてたの？」

「うん。さすがに、五球連続真っ直ぐはないかなって思つたし」「なるほどね」

加藤は部内で最も背が高く、中学生にして身長は180センチに達していた。どちらかと言えば小柄な誠は、加藤と話すときは、少し見上げるような格好になる。加藤はミートが上手く、一年次から代打でよく起用されていたが、守備がどうにも苦手で、ついに三年間レギュラーにはなれなかつた男だ。特に今のようなボテボテの口の処理に、もたつく事が多かつた。

ワンアウト三塁。ヒットはおろか、内野ゴロや外野フライでも一転を狙える状況だ。しかも打順はここからクリーンアップを迎える。右打席に入った英治の顔は、エースではなく、三番バッターの顔になつている。ネクストバッターズサークルで、片膝をついて待ち構えている佑介も、真剣な眼差しで、マウンド上の渡辺を凝視している。

そうだ。格下の控え選手チームを相手に、攻めあぐねているよう

では、公式戦で結果を出せるはずは無い。相手が、一年生投手であるうと、容赦はしない。この回でマウンドから引き摺り下ろすくらいのつもりで、一気に攻め立ててやればいい。

佐川の指示で、控え選手チームは野手を前進させ、バックホーム体勢の布陣を敷いてきた。サードの加藤も、ランナーの誠そつちのけで前に歩み出た。

チームの俊足ランナーであるこの俺を、ホームで刺す気が。舐められたもんだな。いや、これは、貴重な先制点を、なんとしても献上すまいとする、相手の闘志の表れなのだろう。ならば、レギュラーチームとしては、受けて立たないわけにはいかない。

誠は、大きめにリードを取った。右投げの渡辺は、セットポジションに入る三塁ランナーと正対する格好になる。当然三塁ランナーの動きは丸見えだ。だがそれは、誠にも言える事。セットポジションに入った右投手の動きが、最も見やすいのは、三塁からだ。ましてや今は、三塁手がベースから離れているのだ。

さすがにホームスチールを狙うような状況ではないが、それでも少しでもピッチャーにプレッシャーを掛けて、意識をこちらへ散らせれば、打者に対する集中力を削ぐ事が出来る。それが、リードオフマンである自分の仕事だ。

セットポジションに入った渡辺の左足が上がり、右腕が広報へ引き絞られるのを見て、誠ホームへ向かつて数歩だけダッシュした。キヤツチャ一の佐川が腰を浮かせて半身で捕球し、こちらを向いて送球動作に入つたが、誠はその頃にはすでに帰塁している。投球の判定はボール。アウトローのきわどいコースだつたが、わずかに低かつた。

ホームスチールなど、狙つてはいない。だが、少しでも後ろへ逸らそうものなら、躊躇無くホームへ突つ込む。そういう姿勢を見せておく事で、キヤツチャ一に対してもプレッシャーを掛ける。

英治に対しての一球目。明らかに投げ急いで手投げになつてゐる。おまけに一球外しているものだから、ボールもつい甘いコースに言

つてしまつ。それを見逃す英治ではない。

鋭い金属音が鳴り響き、打球が全身守備の三遊間を襲つた。誰もがレフト前への先生タイムリーじつとと確信した当たりに、加藤が横つ飛びで飛びつく。グローブの先に、からうじてボールが收まつてゐる。ホームへ向かつてスタートを切りかけた誠は、とっさに身を翻して三塁ベースへ滑り込む。

元の守備位置に戻つてきた加藤に、声を掛けた。

「ナイスキャッチ」

加藤が、にやりとしながら答えた。

「俺なら捕れないとでも思つてたか？」

「そういうわけじゃないけど、でもちょっとびっくりしたかな」

正直、野手の守備力と打球の速さから、捕球できるかどうかを判断している時間的余裕はななかつた。

それにしても危なかつた。もう少しで、ダブルプレーを取られる所だつた。ワンアウト満塁のチャンスが、一気にスリーアウトチエンジになつてしまつ所だつた。

ツーアウト三塁。せめて一点取らなくては、レギュラーの面目が立たない。

「佑介！頼むぞ！」

打席に入った佑介に、声援を送る。ちらりとこちらを向いた佑介が小さく頷いて、ゆっくりと右打席に入つた。

佑介への初球。渡辺が投じたのはカーブだった。少々高めに抜けたが、佑介はこれを見送り、ストライク。先制点のチャンス、打ち気にはやる四番打者に、初球から直球勝負は危険だと判断した、佐川の考えだろう。

二球目、低めの真っ直ぐに、佑介が反応した。しかし先ほどのカーブの残像があつたのか、タイミングが遅れ、打球は一塁ファールグラウンドへ転がった。口元をゆがめて、佑介が悔しがる。

四番の佑介を、ツー・ナッシングに追い込んだ。セオリーなら、次は一球外してくるだろうが、佐川が制球難の渡辺にあえてボール球を要求するかは疑問だ。

その三球目。胸元を抉る速球。佑介が、腰を引かせて小さく後ろへ飛び退くほど際どいボールだったが、渡辺は平然として佐川に返球を催促するように、グローブを慌しく開閉する。

思いの他強気なバッテリーに、誠も気持ちを引き締めた。ここまで、どこかで相手を格下と見て、見下している部分があつたのかもしれない。実際、チームの自力は、自分たちのほうが明らかに上だろう。だけど、相手だって、やるからには負けるつもりなど無いはずだ。渡辺の強気な投球と、それを引き出す佐川のリード。そして、加藤のダイビングキャッチ。まだ一回の表だと言うのに、相手はこれほど気迫溢れるプレイを見せている。相手を格下と見くびつている強豪が、反骨精神に燃える弱小チームに足元をすくわれる。そんな場面は、何度も目にしてきた。一発勝負のトーナメントでは、そんなわずかな気持ちの綻びが、命取りになるのだ。

俺なら、捕れないとも思つたか？

少し自虐交じりだけど、確かなプライドを覗かせた、加藤の言葉

を思い出した。少し、相手の気迫に飲まれそうになつた自分がいることを知り、弱気になりかけた自分に発破をかける。

負けたくない。もう、自分の心の弱さに打ちのめされるのは沢山だ。実力からすれば、俺達がまけるはずは無いんだ。チームメイトといつても、チーム内ではポジション争いをしてきた、競争相手でもあるのだ。遠慮なんかするな。どちらが上なのか、はつきりさせてやれ。足りない技術を、向こうが気持ちで乗り越えようとするのなら、気持ちの面でも相手を圧倒してやればいい。

誠は、半ば自分に言い聞かせるように叫んだ。

「佑介、遠慮すんな！思いつきりぶちかましてやれ！」

「おう！」

視線は渡辺に向けたまま、佑介が答える。

佑介への四球目。渡辺も開き直ったのか、ワインドアップからの投球だった。投じたのは、勿論、渾身のストレート。コースはど真ん中だ。佑介の腰が鋭く回転し、大きく振り抜いたバットが快音を響かせる。

高々と舞い上がった打球は、あつという間に外野手の頭上を越えて、さらにその向こう側にある金網の、遙か彼方へと消えて行つた。

初回に佑介の先制ツーランを浴びた渡辺は、一回と二回にも、それぞれ一点ずつ失い、三回限りで降板した。一番手でマウンドに上がったのは、二年生の左腕、下山昌治で、この日が投手デビューだつた。スピードは渡辺に劣るが、大きく曲がるスロー・カーブでタイミングを外す、緩急をつけたピッチングは、同じ持ち球でも渡辺とはまるで異質で、四回のレギュラーチームは、三者凡退に抑えられた。しかし、次の回には下山を捕まえ、一気に二点を追加。時間の都合で、紅白戦はここまでとなり、五回の裏を行うことなく終了。控え選手チームは、英治の前にわずかに安打に封じられ、二塁を踏むことすらかなわなかつた。終わつてみれば、8対0で、レギュラーチームの圧勝に終わった。

明日の土曜はオフ日。明後日の日曜日が、いよいよ一回戦だ。

帰宅して、床に就いた誠は、最後の公式戦を目前に控えて、東尾中野球部で過ごした三年間を振り返つた。

一学年先輩の辰弥に憧れ、必死に背中を追いかけていた二年前。その辰弥達が抜け、チームの主力として期待されながらも、結果を出せなかつた、去年。そして、野球への熱意と、それを全うできないかも知れないと言う不安に悩み続けながらも、最上級生として、チームを引っ張つてきた今年。

楽しい事ばかりではなく、辛い事もあつた。だけど、辞めたいと思つた事は、一度もなかつた。誠は、東尾中野球部が、心底好きだつた。では、仲間達は、どうだったのだろう。懸命な努力も報われる事なく、野球を続ける事を諦めてしまつた隆や、三年間代打要員で終わつてしまつた加藤。退部した隆はともかく、加藤ら三年生の控え選手達は、この最後の公式戦を、どのような気持ちで迎えようとしているのだろう。一年からレギュラーとして試合に出ていた誠達や、自分達を差し置いてレギュラーになつてゐる後輩を、どんな

目で見ていたのだろう。そういうえば、加藤は以前、高校では野球部には入らないと言っていた。もし、東尾中でレギュラーにならなければ、加藤は高校でも野球を続けようとしただろうか。

誠自身、先輩達を差し置いて自分が試合に出ていた事は、彼らに對して申し訳ないと氣持ちがあつた。だからこそ、試合で恥ずかしいプレイは出来ないと思い、必死に練習に取り組んだ。チームの誰よりも、熱心に練習に取り組んで来たと思つている。その積み重ねが、西崎からスカウトに繋がつたのだ。

だけど、隆のように懸命な努力が、結果に繋がらなかつた者もいる。加藤だって、守備練習の時は、傍目にもわかるほど真剣な目つきで取り組んでいたのだ。それでも、最後まで加藤はレギュラーにはなれなかつた。

努力が必ず報われるなんて言葉を信じるほど、現実を知らないわけじゃない。そんなものはただの安っぽい詭弁だ。

自分が、三年間努力し続ける事ができたのは、その努力が、それなりに報われてきたからだ。それに、誠は野球を始めた時から、打撃も守備も走塁も、ある程度なんでもこなせていた。もともと、基本的に運動神経が良かつたのだ。それは、誠が努力して手に入れたものではない。先天的に、自分に備わっていたのだ。その“授かり物”があつたからこそ、誠は努力できたのだ。

もし、生まれつき運動が苦手で、努力も報われず、三年間控え選手のままだつたとしても、同じように熱心に野球に取り組むことが出来ただろうか。自分のような心の弱い人間に、そんなことが出来ただろうか。おそらく、いやきっと出来なかつただろう。自分の努力も、熱意も、持つて生まれた素質あつてこそそのものなのだ。それだけは忘れてはならない。

今度の大会も、おそらくいつもどおり、一番・ショートでスタメン出場する事になるだろう。レギュラーに選ばれると言つ事は、チームを代表して、チームの看板を背負つて、試合に出ると言う事だ。出たくても出られない選手のほうが多い中で、試合に出させて貰う

以上、彼らを納得させられるプレーをしなければならない。「俺達を差し置いて試合に出てる奴が、あんなに下手くそなのか」なんて、思わせてしまっては、彼らに会わせる顔が無い。

東商で野球が出来るかどうかなんて、今は関係ない。今はただ、東尾中野球部の一員として、東尾中野球部の為に、仲間達の為に、ベストを尽くそう。

そう心に決めて、誠は静かに目を閉じた。

誠が目を閉じた直後、机の上で充電中の携帯電話が鳴った。マナーモードになつてはいるが、バイブレーターの振動が音を立てている。ベッドから出て、携帯を手に取りディスプレイを開く。消灯された部屋の中で無機質な光を放つディスプレイには、佑介の名が表示されていた。通話ボタンを押して、携帯を耳に当てがう。

「もしもし」

「もしもし、誠？俺だけど、もしかしてもう寝てた？」

「ん、まあ、そろそろ寝ようかなつてタイミングではあつたけど」「そつか、ごめんごめん。あのさ、明日なんだけど、部活休みじゃん？お前空いてる？」

明日は、大会前のラストスパートでたまつた疲労を癒すべく、ゆっくりと休養を取るつもりだったので、何も予定は入れていない。「うん、空いてるけど」

「じゃあさ、明日一人でキャッチボールしようぜ。小学生のときいつもやつてた公園でさ」

「佑介と、二人だけ？」

「そう、お前と俺、一人だけ」

断るつもりは全く無かつたが、ほんの少し、考えた。最後の大会を目前に控えたこのタイミングで、佑介が自分と二人だけでキャッチボールをしようとい誘つてくるという事の意味を。

「いいよ。何時から」

佑介の意図を測りかねながらも、誠はその誘いを受けようと思つた。きっと、明日ボールを投げ交わしている時に、それがわかると思つた。

「十時でどう？？そんで、昼前に解散して、午後はゆっくり休もうぜ」

「OK、十時な」

「おう、じゃ、よろしくな

携帯の電源ボタンを押して、通話を切つた。折り畳んだ携帯を元の場所に置いて、ベッドに戻る。

通話を切る時に、それとなくディスプレイのデジタル時計で確認した時間は、わずかではあるが十一時を回っていた。佑介が、何を思つてこんな時間に誘つてきたのか、やはり少し気になつたが、目を閉じるとすぐに眠気が襲つてきた。誠はいつも、日付が変わる前には眠りにつく習慣をつけているのだ。

規則正しい生活つて、やつぱりしとくもんだな。
そんな事を思いながら、誠は眠りに落ちて言つた。

翌朝、待ち合わせの時間より十分ほど早く、誠は公園に着いた。辺りを少し見回したが、佑介は、まだ来ていないようだつた。誠はベンチに腰掛けて、佑介の到着を待つた。

公園には、すでに犬の散歩をしている老人や、砂場で遊んでいる子供とその母親と思しき女性など、すでに先客がいて、気温が上昇しきる前の夏の朝を、穏やかに彩つていた。

砂場で泥だらけになつて遊んでいる小さな男の子を見て、誠は自分がかつて、美奈子に連れられて、同じように泥だらけになつて遊んでいた事を思い出した。それから何年か後に、小学校に上がって、野球と出会い、佑介と出会い、チームの練習が無い日は、ここでよく雄介たちとキヤツチボールをした。だけど、中学に上がってからは、練習量が増えた事もあって、ここへ来る事は殆ど無かつた。ここへ来るのは、本当に久しぶりだつた。

「誠」

佑介の声がした。声の聞こえた方へ振り向くと、佑介が小走りにこちらに近づいてきた。

「悪いな、遅くに電話しちゃつてさ。でもなんか、久しぶりにここでお前とキヤツチボールしたくなっちゃつてさ」

「随分、久しぶりだよな、ここでやるの」

「ああ」

そう言つて、屈伸運動を始めた。誠も立ち上がり、軽くストレッチをする。

「そろそろやろうぜ」

準備運動を始めて、数分ほど経つた頃、佑介が言つた。

「ああ」

誠も頷く。

佑介が、数メートル程距離をとつてこちらに向き直り、左手のミ

ツトを軽く上げた。その合図に、誠は軽く頷き、緩やかなフォームで、一球目を投げた。佑介が、ミットに収まつたボールを右手に持ち替え、やはりゆつたりとしたフォームで投げ返す。

肩が温まるのに合わせ、徐々に距離を広げ、しつかりと体重を乗せたボールを投げ込んでゆく。ただし、明日のことを考えて、お互い全力投球はしない。特に事前にそう打ち合わせたわけではないが、こと野球に関しては、言葉にしなくともある程度気持ちが通じる程に、この男とは長く、そして濃密な時間を共に過ごしてきたのだと、改めて感じる。

なにか言いたい事があつて、誘つたんじゃないのか。

佑介に、そう聞いてみたい。だけど、できれば佑介から、切り出していくのを待つていてたい。

「へい、ショート！」

佑介が、不意に「口を投げてきた。誠はこれを軽快に捌き、いつもの様に一塁へ送球する要領で、佑介へ投げ返す。

「もう一丁！」

今度はボテボテのゴロだ。ダッシュして地面の砂ごと拾い上げるようにして掬い上げ、そのままグラブトスで佑介に返す。そのまま小走りに、『守備位置』まで戻る。

「よし、来い！」

腰を落として、グローブを拳でひとつ叩く。自然に笑みがこぼれてくる。佑介も笑っている。楽しい。試合でも、部の練習でもない。公園で佑介と二人で、ただボールを追いかけているだけ。たったそれだけのことが、こんなにも楽しい。

誠は、夢中になつて佑介が投げるボールを捌いては投げ、投げてはまた捌いた。

そういえば、小学生の頃はここでいつもこんなふうに、佑介と二人で、暗くなるまでキャッチボールをしてたつけ。

「ラスト！」

最後の一球を捌き、佑介が返球をしつかりと受け止めたのを見届

けて、誠はふうつ、と息をついて、天を仰いだ。

「こんなもんにしどうか」

佑介の声に、誠は無言で頷いた。

「なんか飲み物買つてくれるよ。付き合つてもらつたから奢るぜ。何がいい?」

「じゃあ、なんか、スポーツドリンク的なやつ

「OK」

そう言つて、佑介は公園の入り口のそばにある、自販機の方へ歩いて行つた。

「ほい、お待たせ」
ベンチに座つて待つている誠の所へ、佑介が戻ってきて、ス
ポーツドリンクの缶を誠に差し出した。

「ありがと」

手のひらに伝わる、缶の冷たさが心地よく、一度腕を両手で握り
締めてから、開封し一気に半分ほど飲み干した。

額から汗が噴き出し、心地よい疲労を全身に感じた。

「いよいよ、明日からだな」

誠の隣に腰を下ろしながら、佑介が言った。

「うん」

誠が答える。お互に、視線は合わせない。

「あのわ」

佑介が、何か言いかけた。

「うん?」

「うーん……なんて言つたらいいのかな」

なんとなく、佑介が何の話をしようとしてるのか、何の為に、こ
こに自分を呼び出したのか、わかるよつた気がしていた。

「東商の事?」

切り出しひらいのはお互い様だし。黙つて佑介が切り出すのを待
つてるだけじゃ、申し訳ないよつた気がして、口から切り出し
た。

「うん、あの、お前にはお前の事情があつて、俺がこんな風に口出
しするような事じやないのかもしれないけど、でも、やっぱり、な
んていうか、ずっと一緒ににやつてきたし、俺は、東商でもお前と
一緒に野球したいんだよ。でも、その……」

佑介はそこまで言って、言葉に詰まってしまったのを誤魔化すよ
うに、ひとつ大きく息を吸つてから、再び口を開いた。

「誠は、俺と違つて頭も言いし、そういう意味で考えたら、その、東商には行かせたくないっていう、おじさんの気持ちもわかるような気がするし、お前にとつても、長い目で見たらその方がいいのかかもしれないから、もし、お前が、そんな事、思つてないのかもしれないけど、もし、そうなつちゃつたら、お前と野球するのも、中学が最後になるから、だから、その、なんて言つたらいいんだがり……」

そこまで言つて、佑介はまた言葉に詰まってしまった。開いた膝の上に肘を乗せて、うなだれるような姿勢になつてゐる。

「もういいよ、そんなに無理しなくとも」

途切れ途切れで、たどたどしい言葉だけれど、懸命に胸の内を伝えようとしてくれている。どんなに歯切れの良い理路整然とした言葉よりも、真摯な想いが伝わつてくる。

「なんとなくだけど、佑介が言いたいこと、よくわかつた気がする。ありがと」

ここまで、自分の事を想つてくれる友達がいる。今は、ただそれだけで良い。その気持ちだけで、凄く嬉しい。

「俺の進路がどうなるにしろ、俺達が東尾中の野球部の仲間と試合するのは、今回が最後だ。中学生生活の最後に、悔いの残らない試合をしようぜ」

「ああ、なんか、わるかつたな、」しゃしゃ余計な事ばっかり言つて、大事な時なのに

佑介は、本当に申し訳なさそうに言つた。

「なんで、謝るんだよ。ここまで自分の子と考へてくれてる奴がいるんだ、つて思つて、嬉しかったよ、ほんとに。ほんと、ありがとな

「うん」

誠は、ポケットから携帯電話を取り出して、時間を確かめた。

「もう十一時半か、そろそろ帰ろうか」

「ああ、せめて午後ぐらいは、明日のために体休めとか無きやな

公園を出たといひで、別れの言葉を交わして佑介と別れ、誠は家路に着いた。

帰宅した誠は、シャワーを浴びてから昼食を摂り、自室のベッドで横になっていた。とはいっても、まだ昼の一時を少し過ぎたばかりである。何をするでもなく、何度もぐるぐると寝返りを打った後、本棚から高校野球の雑誌を取り出し、ぱらぱらとページをめくつた。表紙に書かれた東尾商業の文字が目に入り、迷わず購入したものだ。辰弥が記事に乗っているかもしない。そう思つて雑誌を購入した誠だったが、記事になつていたのは、今年東商野球部に入学した期待の一年生大谷孝介の特集だった。それでも誠は、迷わずその雑誌を、書店のレジカウンターに持つていつた。

大谷の名は、その雑誌を購入する前から、誠も知つていた。一年生にして、東商の四番を任せられた男として、市内の野球ファンの間では、すでに有名な存在だつた。

高校球児のお約束である坊主頭。よく日に焼けた顔には、太い眉毛と鋭い光を放つ双眸と太い鼻筋。肩幅が広く胸板の厚い、がつりとした体。プロフィールには、身長百八十一センチ、体重八十四キロとある。すでにプロ並みの体格である。

小学生の頃から硬式野球をしており、強打者としては勿論、投手としても、高校一年の現時点すでに百四十キロに達する速球を投げているという。東商では、四番ライトでスタメン出場し、終盤にリリーフ投手としてマウンドに上がる、と言つ起用法が定着している。そこで、雑誌には、大谷インタビューに応じる姿や、バッティングフォームとピッチングフォームの連続写真が掲載されている。その脇に評論家の解説が書かれており、その解説によると強靭な背筋とリストが、最大の持ち味であり、将来的には打者としてのほうが期待値が高いが、投手としての可能性も捨てがたい、とのことである。

バッティングのスイングも、ピッチングの腕の振りも、大きな

フォロースルーが印象的で、まだ実際に大谷のプレーを見たことは無い誠でも、そのダイナミックなプレースタイルは、容易に想像できた。

インタビュー記事には、『古豪復活の鍵を握る超新星・父と一人三脚で追い続けた夢』という見出しの後に、大学野球で活躍しプロ入りを囁きながらも、怪我でプロ入りを断念した父に、幼い頃から野球の厳しい指導を受けてきた事、将来はプロ入りは勿論、メジャーリーグへの挑戦も視野に入れている事などが書かれている。その中に、誠にとつて、どうしても気になるコメントがあった。

「自分のプロ入りは、父と自分との一人分の夢です。でも、僕は父に為に野球をしているという意識はありません。父の影響で野球を始めたのは事実だけど、自分はあくまで、自分がプロになりたいから野球をやっています。勿論、それを誰よりも応援して支えてくれてきた父には本当に感謝していますし、父が自分のプロ入りを喜んでくれれば、僕も嬉しいんですけど。気が早いかも知れないうけど、プロになつたら契約金は全部父にあげようと思っています」「これだ。

自分と義秀の間にある最大の障壁は、これなのだ。
雑誌を閉じて本棚に戻し、誠はまた一人キヤッチボールをしながら考えた。

井岡誠と大谷孝介。二人の少年が、いずれも“父が示す道”を歩んでいる事に違いはない。だが誠が、自分の意思とは無関係に、父が示す道を歩まされているのに対し、大谷は自分自身もそれを望んで歩んでいるという所に、決定的な違いがある。

誠自身が思い描く“自分は将来こうなりたい”というビジョンと、義秀が思い描く“誠に将来こうあって欲しい”というビジョンは違う。だから今、井岡父子の間には大きな溝ができてしまっている。でも、大谷親子の場合は、それが一致している。同じ夢を追い求めて、共に歩み続けてきた大谷父子は、硬く強い絆で結ばれている。
そこでまた、誠は木田の事を思い出した。大谷と同じく、父に厳

しい野球の指導を受けていた木田。でも木田自身の気持ちと、木田の父の気持ちには大きな隔たりがあり、誰も望まぬ最悪の結末を迎ってしまった。

木田の父も、息子が憎くて厳しい野球の指導をしていたわけではなかつたのだろう。木田の父も、自分なりに、野球をさせることが息子にとつてプラスになると思って、したことだつたのだとは思う。義秀は、どうだろう。自分が憎くて、自分から野球を取り上げようとしているのだろうか。それはきっと違うだろう。義秀が、自分に厳しく勉強をさせていたのは、それが誠の為だと思っているからだ。それは、誠自身もわかつてゐるつもりだ。

でも、父さん。俺、勉強だけが全てじゃないと思うんだ。他の事何もかも犠牲にして勉強したつて、きっと楽しい人生なんか待つてないと思うんだ。それじゃ意味無いだろ。

自分が考へてゐる事は、決して間違つてはいないと思つ。でも、父が言う事も、正しくないとは言い切れない。どちらも一理あると思つ。ならば、自分が進む道は、自分の意志で決めたい。

やつぱり、俺はどうしても野球を諦めきれない。

明日から始まる大会が、自分の野球人生最後の公式戦だなんて思いたくない。これからも、もつともつと、野球がしたい。その気持ちを、父にわかつて欲しい。受け入れて欲しい。でも、その方法がわからぬ。

誠は苛立ちを振り払うかのように、大きく反動をつけて起き上がつた。少し乱暴に扉を開き、部屋を出て、リビングのソファにどさつと座り込む。何か目的があつたわけではない。ただもどかしくて、何もせずに入られなかつたのだ。その音で気がついたのか、キッチンから美奈子が顔を出した。

「あら、ずっと静かだから、もう寝ちゃつたのかと思つてた」

少し困惑氣味の声色に、またしても自分の顔がこわばつてゐる事に気づく。

「こんなに早くに寝ちゃつたら、へんな時間に目が覚めちゃうよ」

できるだけ軽い声で言おうと思つたが、上手くいえなかつた。

「それもそうね」

美奈子が苦笑気味にそつ返したが、それ以上会話は続かなかつた。外から微かに聞こえてくる蝉の鳴き声が、気まずい沈黙を際立たせていた。

重苦しい沈黙から何とか逃れようと、誠はテレビのリモコンを手にして、電源を入れた。特に見たい番組があるわけではない。ただ、リモコンを握る手を止めていることすらもどかしく、でたらめにチャンネルを切り替える。衛星放送のプロ野球中継の画面が映つた所で、ふとリモコンを持つ手が止まった。

誠は、ぼんやりとテレビの画面を眺めていたが、視界の端に、あの時と同じような、悲しげな母の顔が見えて、一瞬チャンネルを変えるか、テレビを消そうかと考えたが、そんな事をすれば余計に母に心配を掛けるだろうと思い、母の表情に気づかぬ振りをしながら、テレビの画面を見つめていた。

テレビ画面に映るプロ野球選手達。厳しい競争を勝ち抜き、狭き門を潜り抜け、さらに厳しい競争の中に身を置いている彼らは、一体どれほど強靭な精神力の持ち主なのだろう。彼らの中には、親に野球を諦めさせられそうになつた者はいなかつたのだろうか。いたとしたら、どうやって親を説き伏せたのだろう。それとも、彼らは皆、幼少時から圧倒的な能力を發揮していて、親でさえもその将来に夢を託したくなるような、類稀な才能の持ち主だったのだろうか。いや、そんなことは無いはずだ。プロ野球選手の誰もが、常に野球エリートだったわけではない事は、誠も知っている。高校時代は、控え選手だったような男が、大学で素質を開花させ、一流のプロ選手になつた例も、決して珍しくは無い。逆に、プロ入り前に輝かしい実績を残していたものが、プロでは全く日の目見ることなく、ひつそりと引退していくことだって、よ 才能と努力。何をするにしても、成功するためには不可欠なものだと思う。でも、つい先日にも考えたように、努力ができると言つ事にも、少なからず幸運に恵まれた部分が必要になつてくることも、また事実だと思う。偶然熱意を注げるものに出会えた者。偶然稀有な資質を持って生まれた

者。それらに巡り会つ幸運に恵まれた者だけが、自分の才能を存分に発揮する事ができるのだろう。才能と運。どれも努力だけでは決して手に入らないものだ。ならば、努力する事は不毛な事なのだろうか。才能や運に恵まれていらない者は、どんなに努力しても報われないのだろうか。ならば、全ては運次第なのではないだろうか。

そんなの、認めたくない。認めたくないけれど、どこかで認めざるをえない部分があるとも思う。だとしたら、この世はなんて理不眞で、なんて無慈悲で、なんて不条理に満ちているのだろう。

悶々として気持ちで野球中継を見ていたら、いつの間にか試合は終盤に差し掛かっていた。窓の外に映る美しい夕焼けが、どこか物悲しい憂いを帯びているように見えた。

テレビで中継されていた、プロ野球の試合が終わり、誠は、まだどこか手持ち無沙汰になってしまった。何もしないでいることがじれつたくなり、母に声を掛けた。

「晩御飯何?」

「ああ、そのことなんだけど、お父さんが今日は外食にしないかつて、せつきメールがあつたんだけど、誠、何か食べたいものある?」義秀は、まだ仕事から帰っていない。土曜日は、授業が休みでも仕事はあるということは珍しくない。でも、義秀が自ら外食を提案するところには珍しい。

のタイミングで外食に誘ってきた事とは、無関係ではない気がする。外食の席で、義秀がかけてくるだらう言葉は、誠にもある程度想像はつく。

「“最後”の大会なんだから、頑張つて来いよ」

そんなことを言つて、今度の大会が誠にとつて“最後”である事に釘を刺しつつも、表面上応援もしてやつていると皿づポーズを見せておくつもりなのではないだろうか。

あの理屈っぽい父なら、ありうる話だ。

「どうしたの? あんまり、お腹すいてない?」

美奈子が、少し心配そうに聞いてくる。

母は、じつはこの時の自分の感情を汲み取る事には敏感だ。おそらく、ある程度自分の心境を察してくれているのだらう。

「いや、そういうわけじゃないけど……」

歯切れの悪い返答しか出来ない。

なんとなく、気乗りしないんだ。

でも、そう言えば、母にまた余計な心配を掛けてしまふかもしない。だけじゃぱり、今は父と楽しく外食なんて、出来やつて無い。

「行きたくなかったら、別にいいのよ。明日大事な試合なんだから、ゆっくりしたい？」

「んー……」

行きたいとは思わない。でも何か、断るのにも躊躇してしまう気持ちがある。

父の話を聞いてみたい。その内容がどんなものであれ、もう一度父の気持ちを確認する事で、今後自分の打つべき手を考える材料になるのなら、言ってみる価値はあるはずだ。

「今はそんなにだけど、もうちょっとしたら食べなくなるころだと思うから、俺も行くよ。別に、何でもいいから」

そう答えた。

「あ、そう。よかつた。せっかく外で食べるなら、三人一緒の方がいいもんね。じゃあ、お父さんに誠も行くってメールしとくね」
そう言って、美奈子はポケットから携帯電話を取り出し、義秀に当ててメールを打ち始めた。

誠は、夕食なんて何を食べに出来ようとかまわなかつた。ただ、今の父の気持ちを、聞いておきたかっただけだ。

数分後に、義秀から美奈子へ、メールが返ってきた。
「八時前には帰つてくるつて。いつもより、少し晩御飯遅くなつち
やうけど、いいよね」

美奈子は、少し嬉しそうだ。

「うん、いいよ」

また無意識に強張りそうになる顔に、形だけの笑顔を作つて、誠は答えた。

今度は、少しだけ上手く笑えた気がした。

義秀は、言葉通り八時前に帰つて来ると、仕事の時にいつも着ているスーツから、スラックスとポロシャツに着替え、井岡家の三人は車に乗り込んだ。

「今日は誠が行きたい所へ行こう。誠、何が食べたい。」「義秀が、誠に尋ねた。

誠は、特に何が食べたいと言つ事はなかつた。それよりも、最後の大会を前日に控えた、このタイミングで、義秀が外食に誘つてきた事が、やはり気になつて仕方ない。

おそらく、義秀の胸の内にも、誠に野球をやめさせる事に対して後ろめたい気持ちが、大なり小なりあるのだろう。だけど、それが野球を諦める理由にはならない。自分にとつて、父の意思で野球を諦めると言つ事は、その時点で後悔する事になるのだ。

もし、父がこの食事の席で、改めて野球を諦める事を「認めかすよう」な事を言つてきたら、その時は、もう一度はつきりと「伝えよう」絶対に嫌だと。

父がもし、自分の幸せを本当に願つているのなら、きっと伝わるはずだ。でも、もし、それでも、父に自分の気持ちが伝わらなかつたら

「どうした? 何か食べたいものは無いのか?」

ガレージでエンジンを掛けたまま、静かに排気音を立てている車が、自分の中で燃つていてる気持ちと重なつた。早く車を出して欲しい。食事なんて、何でもいい。

俺に気を遣つてくれるのは、何となくわかるよ。でも、今俺が父さんにして欲しいのは、そんな事じゃないんだ。

「別に、何でもいいよ」

父の見当違いな気遣いが、もどかしくて、誠はぶっきらぼうに答えた。普段ならこんな態度を見せれば、すぐに不機嫌になる父が、

今日は何も言つて来ない。いつもは小言くさい父に辟易しているくせに、こんな時だけ、何も言つて来ない父を不快に思うなんて、身勝手かもしれないとも思つが、じわじわと胸の奥から湧き上がつてくる苛立ちを上手く誤魔化せるほど、誠は器用ではなかつた。

「そうか、じゃあ中華にしようか。それでいいか？」

「いいよ」

さりに無愛想に、誠は答えた。もう、返事をするのも億劫だつた。「じゃあ、中華にしよう。美奈子も、それでいいか？」

「うん」

美奈子は明るくうつ笑んだが、母はこいつらの時、大概自分の主張はせずには、誰かの意見に合わせるタイプなので、その返答は予想通りだつた。だけど。

母を憎む気持ちは無い。でも、自分の進むべき道を、自分の意志で決めることができずにもがいている誠にとって、母の主体性の無い言動は、誠を少し苛立たせた。

「それじゃあ、行こうか」

義秀がそう言つて、充分過ぎたのでアイドリングを終えた車が、よつやく動き出した。

明日から、息子の中学校最後の公式戦が始まると言つ事は、以前から知つていた。義秀は、息子が小学校時代から続けていた野球を、高校以降でやることを認めていない。義務教育の間はともかく、がうせ維持代よりずっと長い将来のことを考えれば、高校三年間を楽しむ事より、早いうちから勉強に専念し、より良い大学へ行き、より良い企業に就職し、安定した収入を得ることが、何より大切な事だ。息子にも、その意向は中学の野球部に入った時点で言い聞かせておいた。息子も、不承不承といつた様子ではあつたが、それを受け入れてくれとよう、少なくとも義秀には見えた。昔から、物分りの良い、手の掛からない子だった。

ところが、東尾商業高校から勧誘された事を機に、息子の態度が変わり始めた。

初めは「向こうから誘われたから、やつてみたい」程度の事しか言つていなかつた。勿論その時も、義秀は断固として容認しない態度を見せた。

それからしばらくは、何事も無かつたが、ある日の夜、仕事から帰宅した自分に、もう一度野球を続けたいと息子が言つてきた。この時も、義秀は厳しい態度で臨み、息子の要求を跳ね除けた。しかしこの時、息子は今までに義秀が見たことも無いほど激しい口調で、義秀に反論してきたのだ。

驚いた。息子が自分に逆らつてきた事に対する怒りよりも、驚きのほうが大きかつた。それほど、息子は普段温厚で、激しい感情を覗かせる事などなかつたのだ。

息子が、野球を好きだと言う事は、義秀も以前からよく理解しているつもりだつた。小学生の頃、少々根の張るグローブを買ってやつた時は、いくら自分が出した条件をクリアしたとはいえ、こんなに高いものを使っても、大差は無いだろうと思つていたが、息子が

未だにそのグローブをまめに手入れをして使っている事は、買い与えた者としても勿論嬉しかつたが、それ以上に、この治療消費の時代にも、物を大切にする息子の気持ちが嬉しかつた。

息子から、野球を取り上げるのは、申し訳ないといふ気持ちは、義秀なりにある。だけど、親として、やはり息子には、目先の楽しさよりも、長い将来を見据えた進路を選ばせなくてはならない。大人が甘い顔を見せれば、子供は増長するものだ。ごねれば何でも通ると思い、大人のアドバイスに聞く耳を持たぬ、身勝手な人間になつてしまふ。それでは、まともな大人にはなれない。だけど、やはり、息子から大切なものを取り上げるのは心苦しい。

その罪滅ぼしのために、最後の大会が始まる前日に、外食に連れて行くなんて、我ながら白々しいとは思う。だけど、何もせずにはいられなかつたのだ。

悪いとは思つてゐる。でも、これはおまえ自身の為なんだ。わかってくれ。

ルームミラー越しに、後部座席を見ると、息子は頬杖をつきながら、窓の外をぼんやりと眺めてゐる。窓の外に、何か気になるものがあるというより、ただ何をするでもなく、そうしてゐるだけといった様子だった。能面のようなその表情からは、何の感情も読み取れなかつた。

店に入り、席に案内されてからも、井岡家三人の空気は、どこかぎこちないままだった。息子は、何か考え事でもするかのように、虚空を睨んで神妙な面持ちでいるし、重苦しい空気を誤魔化そうと、車内では、無理に明るく振舞つていた妻も、押し黙つてしまつていて。

やはり、いくらなんでもあざとかつただろうか。

息子に、野球を辞めさせるのは、あくまでも自分の意思だ。それは、わかつているつもりでいる。例え自分が息子から恨まれようとも、それが息子の将来の為になるのであれば、それに耐えるのが、親の義務だとも思つていて。だが

どこかでそれを、割り切れない今までいる自分がいる。息子に、恨まれたくない、嫌われたくない。そんな気持ちが、まだ胸の奥のどこにある。

義秀自身、身勝手で横暴な父を恨み、嫌つた過去がある。そんな自分に、罪悪感が無かつたわけではない。

どんな親でも、親は親だ。親がいなければ、自分は存在しないし、親が世話をしてくれなければ、自分はここまで育つ事はできなかつた。それは事実だ。

それでも、もつと“いい親”の子に生まれていれば、もつと自分を理解してくれる、もつと自分を受け入れてくれる親の子に生まれていれば、もつと幸せだったのに。そう思つてしまつことがある。

父の収入が不安定で、貧しい家庭で育つたことは、義秀にとつて大きなコンプレックスだった。もし自分が、将来家庭を持ち、人の親になつたら、自分の子供にも、その子供にも、そのまた子供にも、そんな惨めな思いをさせたくない。そう思つて、一人息子の誠には、幼い頃から厳しく接してきた。それが、息子のためなのだと、信じていた。

だけど、あの夜の息子の態度が、義秀に信念が、微かにぐらついた。

息子の人生は息子のものだり、例え親であろうと、必要以上に干渉すべきではないのかもしない。本人の意思を、尊重すべきなのかもしない。でも、まだ若い息子に、どこまで将来の見通しがついているのだろうか。そう考えると、若さゆえの勢いに任せてしまう事は、大いに不安だった。

息子に、失敗をして欲しくない、安全な道を選んで欲しい。そんな親心が、息子を束縛し、苦しめる事になってしまっているのかもしない。

自分のやり方は、必ずしも正しいとは言えないのかも知れない。でも、決して間違つてはいけないはずだ。自分が息子にさせようとしている事は、必ず将来息子のためになるはずだ。そう信じている。でも、もしかしたら、それはそう信じたいだけなのかも知れない。自分にそう言い聞かせる事で、自分自身を納得させているだけかも知れない。

不安だ。どうしようもなく不安だ。でも、それは、自分自身の自信の無さが、そう思わせているのかも知れないとも思う。

今は、自分にとつても正念場なのだ。息子の長い将来を見据えたら、今努力しておく事が、是他に大切なのだ。愛する息子に、楽しい時間を過ごさせてやりたい。だけどそれだけでは、将来必ず苦労する。そのためにも、今は自分自身も我慢して、息子にも忍耐を強いる事が必要なのだ。

自分の教育方針は、決して間違つてはいけない。息子に、少しでもリスクのある未知を避けさせる事は、親である自分の義務なのだ。義秀は、何度も自分にそう言い聞かせ、必死に不安を打ち消した。

井岡家の三人が注文した料理が全てテーブルに並んだ。義秀は、自分が注文したワンタン麺をすりながら、自分の正面の席で、定食のレバーラ炒めと白飯を、交互に、黙々と口へ運ぶ息子の様子を見ていた。

息子の誠は、俯き加減に顔を料理のほうに向けたまま、一言も口を利こうとしない。もともと口数の多い子ではないし、夕食の時間が遅くなってしまったから、腹が減っていたのかもしない。でも息子は、育ち盛りの男の子にしては、どちらかと言えば食が細い方で、今もがつがつと食べているような感じではない。流れ作業のように、皿の上の料理を箸でつまんで、口に入れ、咀嚼した物を飲み込んでは、また同じことを繰り返している。

「うまいか、誠？」

義秀が、そう尋ねた時、誠は初めて顔を上げ、小さく頷きながら、ぼそりと「うん」とだけ言った。

「明日から、大会があるんだってな」

あえて、『最後の』とは言わなかつた。

どうしたら、うまく切り出せるのだろう。いや、そもそも、自分は息子に何を伝えたいのだろう。

野球を辞めさせる事を、許してくれとでも言つつもりだったのだろうか。いや、そんな事を自分の口から言い出せば、自分が息子にさせようとしていることを、自分自身で否定するようなものではないか。だけど、自分の中にも、息子から大好きな野球を奪う事に、罪悪感はあるのだという事は、わかつて欲しい。でも、それには耐えなければいけない。息子の将来の為なら、嫌われ役にもならなければいけない。そう心に決めて、今まで息子に厳しく接してきたのだ。だけど

義秀は、自分自身がかつて、父を憎み恨んでいた時のことを思い

出した。普通ならば、最も信頼を寄せ、尊敬するべきであるはずの

親を、嫌っている自分自身を嫌悪していた。こんな大人になりたくない。こんな親になりたくない。いつもそう思つて、義秀は育つた。

結果的には、その経験を糧にして、義秀は人一倍の努力をし、理性的な人格を磨き上げ、収入の安定した職業に就くことに成功した。だけど、父がひたすら憎く、そんな父に逆らえない自分の弱さも同じくらい憎かつた当時の自分の精神状態は、決して健全なものではなかつただろう。

自分は今息子に、あの時の自分と同じような思いをさせているのかもしねりない。そう考えると、堪らなく不安になる。でも、自分がさせようとしていることは、間違いなく、将来の息子にとって、有意義なことなのだ。父のような、感情に任せて暴力で捻じ伏せるようなやり方とは違う。自分が息子にさせようとしていることは、理論的にも筋の取つたことなのだ。父と自分は、断じて同じような父親ではない。今は自分の言つている事がわからなくても、いつか必ず、息子にも自分の気持ちがわかる時が来る。それまでは、自分も耐えなければならないのだ。それが、親の務めなのだ。

「どうしたの？」

はつとして、顔を上げると、誠が怪訝そうな顔で、自分の顔を覗き込んでいた。

「食べないの？」

そう言われてみて、義秀は、初めて自分の箸が止まつていた事に気づいた。

「ああ、いや、別に」

少ししどろもどろになりながら、少し冷めてしまったワンタンメンを口に運ぶ。

下手な事は言わない方がいいのかもしれない。まだ野球への未練を断ち切れていない息子の気持ちを、これ以上搔きぶるような事は、控えるべきなのかもしれない。そう思つて、義秀は結局、それ以上何も言わなかつた。そして、誠も何も言わなかつた。

父の運転する車で、帰宅する途中も、帰宅してからも、誠は一言も口を聞かなかつた。父がこのタイミングで外食に誘つたことや、その席での態度などから考へても、自分の進路の事に關して何か言いたげなのは、誠にもわかつた。もしかしたら、父なりに、自分煮から野球を奪う事に、罪悪感を感じてゐるかもしれない。だけど、それならなおさら、自分の意思を尊重して欲しい。自分の将来は、自分の意志で決めさせて欲しい。だけど、父は結局、最期まではつきりとした態度を示す事はなかつた。いつも独断的で、一方的な父にしては、珍しい事だつた。

自室のベッドに身を預け、誠は考へた。父にも、迷いがあるのだろうか。それとも、そういう素振りを見せる事で「俺にもお前の気持ちちはわかつてゐる」つもりである事を、遠まわしに示したかったのだろうか。

いざれにしても、父がはつきりとした態度を示さなかつたことは、誠にとっては、肩透かしを食らつたような気分にさせられただけだつた。

部屋の灯りは消してある。目を閉じて、眠る前に、誠はもう一度、明日から始まる中学最後の大会への思いを、自分で整理した。卒業後、東商で野球をしたいと言つ気持ちと、そこで自分の力が通じるだろうかという不安。それを案じてとはいへ、一方的に自分に野球を辞めさせ、学業に専念させようとする父と、その父の胸の奥に微かに垣間見えた、自分への罪悪感。

高いレベルで野球がしたいというだけでなく、父に従順だつた今までの自分から脱却するためにも、あくまで野球を続けたいと言う気持ちを貫く事と、将来の安定を最優先に考え、父の意向に従う事と、果たして自分にとって、どちらの選択が“正解”なのか、今の自分には分からぬ。

ただ、今後自分がどんな道へ進もうとも、東尾中野球部員としては、この大会が最後の公式戦であり、一度でも負けてしまえば、そこで自分の中学野球は終わる。それははつきりしている。

やはり今は、東尾中野球部員として過ごした三年間の想いだけを込めて、試合に臨むべきだ。進路の事は、それから考えればいい。最後まで諦めなければ、きっと自分の願いはかなうはずだ。そう信じて、誠は静かに目を閉じた。

4.1 (前書き)

先日、初めてポイントを入れて下さった方と、お気に入り登録をして下さった方がいらっしゃいました（同じ方でしょうか？）。ありがとうございます。とても励みになります。もっと沢山の人に気に入つていただけるよう、がんばりますので、今後も宜しくお願ひします。

日曜の朝、誠は旭ヶ谷中学との試合が行われる、東尾市民公園のグラウンドに三塁側入り口到着した。市内で最も広いこの公園は桜の名所としても知られ、春には多くの花見客が訪れる。今は公園内に設置されている市民プールが、涼を求める市民達で賑っている。携帯電話を開き、デジタル時計を見ると時刻は、午前八時四十五分を示している。東尾中対旭ヶ谷中の試合は午前十時試合開始予定。集合時間は九時半。早すぎるとは思っていたが、家でじっと時間を潰しているよりは、と思い、誠はかなり早めに家を出た。まだグラウンド近辺に、チームメイトの姿は見えない。

七月に入り、すでに梅雨明けからも一週間が過ぎたが、まだ朝のうちは、まだ日差しも穏やかで、過ごしやすい。天気予報は晴れとなっていたから、試合が中盤に差し掛かる頃には、夏らしい、さらついた陽射しがグラウンドに照りつけているだろうが、試合に入り込んでしまってからなら、さほど気にはならないだろう。

誠は、三年間身に纏つて来た、東尾中のユニフォームを見つめなおした。白地の上下の胸に、ロック体の青い文字で「HIGAS HIO」と書かれている。帽子には青地に、白で「H」の文字。実は東商のユニフォームを模したデザインである。ただし、“本家”のそれは、胸と帽子に刻まれた文字に、金色の刺繡で縁取りが施されている。

来年の春には、自分はあるユニフォームに袖を通す事が出来ているだろうか。そんなことを考えて、まだ無人のグラウンドを眺めていると、後ろから声を掛けられた。

「なんだよ、俺が一番乗りだと思ったのに」
振り向くと、佑介が立っていた。

「オッス、早いじゃん」

「佑介」

「いつごろ来たの？」

「五分くらい前かな、なんか家でじつとしてるのもなんだつたから
れ」

「そりなんだよな、俺もだよ。誠」

それここまで笑顔だつた佑介の顔がきゅっと引き締まつた。

「うん？」

「いよいよ今日からだな。絶対勝とうぜ」

「ああ」

誠も、自分の顔が引き締まるのを感じた。

そうだ。もう間も無く、中学野球最後の大会が始まる。相手は格下とはいえ、大事な緒戦。一発勝負のトーナメントだから、絶対に取りこぼすわけにはいかない。負ければそこで、誠達三年生の中学野球は、終わつてしまうのだ。

この大会で、いい成績を残して、さらに東商野球部監督西崎にアピールしたいと氣持ちもある。でも、それより何より、大好きなこのチームで、少しでも長く野球がしたい。それが今の誠の、最大のモチベーションだった。その想いは、同じく西崎の誘いを受け、すでに東商行きの意思を固めている佑介も、きっと同じはずだ。

誠は、少しづつ胸の鼓動が高まって来るのを感じた。

「おお、一人とも随分早いな」
九時頃になつてやつて來た、顧問の青木が誠達の姿を見て、驚いた声を上げた。

「おはようございます」

二人揃つて、頭を下げる。

「何だ、一人とも、家でじつとしてられなかつたのか」

「ええ、まあ、そんな感じですね」

少してれたように佑介が答え、誠もそれに同調するように頷いた。
それから徐々に部員が集まり始め、集合時間の九時半ぎりぎりになつて、最後の一人、翔太がやつてきて、部員全員が集合した。

「菊池、一応集合時間ぴたりだけどな、こついうときは五分くらい早めに見積もつて来るもんだぞ。特にお前はレギュラーなんだから、もっと自覚を持って」

「はーい」

スポーツバッグのベルトを頭に掛けたまま、翔太がおどけたように手を上げる。

「まあ、とりあえずこれで全員揃つたな」

青木が、部員全員の顔を見渡しながら言った。

「わかつてはいるだらうけど、これが今年度最後の大会だ。勿論三年生にとつては、中学最後の公式戦と言つ事になる。今年の三年生は、一年生の頃から試合に出てた人も多いし、チーム全体としての総合力は、ここ数年のうちの野球部では、一番だと、俺は思つてる。東尾中初の全国出場を目指す、今日がその大事な第一歩目。勝つだけじゃなく、はつきりと“俺達のほうが強い”つて思えるような試合をしよう。俺はそれだけの練習を、君達に課してきたし、その練習についてきた君達には、それだけの力があると信じてる。それじや、気合入れてこう！」

「はい！」

部員達が揃つて返事をした。普段はあまり大きな声を出さない誠は、こういうときも他の部員にまぎれて消えてしまつ様な声しか出さないが。この日は自然に、腹の底から声が出た。

誠達東尾中野球部の面々が、三塁側ベンチに入る頃には、先にグラウンド入りしていた対戦相手の、旭ヶ谷中野球部が、守備練習をしていた。顧問の教師がノックをし、選手達が順次その打球を捌いている。

旭ヶ谷中の守備は、決して拙くは無いが、かといって洗練されていると言つほどのものでもなかつた。巣鳳目無しに、自分たちのほうが上だと、誠は思い、仲間たちも同じ気持ちだらうとも思った。ただ、一人だけ気になる選手がいた。ノックを受けている野手ではなく、ファールグラウンドに設けられたブルペンで、投球練習を行つてゐるピッチャードだ。

すらりとした長身の左腕投手だ。おそらく170センチはあるだろう。顔が小さく手足が長い。真夏だと言つのに長袖のアンダーシャツを着込んでいる。

ゆったりとしたモーションから繰り出されるボールは、スピードこそそこそこだが、しなりの利いたフォームから繰り出されるボールには、かなりキレがありそうだ。

「誠、旭ヶ谷あんなピッチャーいたっけ？」

旭ヶ谷中とは、何度か練習試合をしたことがあつたが、ブルペンで投球練習をしてゐる長身左腕には、全く見覚えが無かつた。

「知らない」

「だよな。一年生かな。それにしちゃ随分背え高いけど」

旭ヶ谷中とは、今年度に入つてからは対戦経験が無い。今春入学した一年生なら、見覚えが無いのも頷ける。

「でも、そこそこは速そうだけど、別にあのぐらいなら打てないってレベルじゃないしょ」

翔太がやりと笑いながら、自信を覗かせる。

「まあ、試合が始まるとまでは、なんともいえないけどね。変化球も、

どんなの持つてるかわからないし」

英治が、淡々と言った。

「よし、俺達も、守備練習始めるべや」

「はーー！」

青木の声を聞き、野手陣がグラウンドへ駆け出す。誠も、慣れ親しんだショートのポジションへ向かつた。

旭ヶ谷中の練習中に、乱れた土をスパイクで丁寧にならしながら、自分に打球が来るのを待つ。

「シートー！」

青木の打球は、正面への平凡な「ロ。すばやく駆け寄り、拾い上げ、一塁へ送球する。体の調子はよれやうだ。やがて、東尾中の練習時間が終わり、主審の指示で両チームの選手が、ホームベース付近に整列した。

東尾中主将の佑介と、旭ヶ谷の主将がじょんけんをして、かつた佑介は、後攻を選んだ。

「えー、これより、東尾中学対旭ヶ谷中学の試合を開始します。礼！」

「お願いします！」

主審の合図で、両軍の選手が帽子を取つて頭を下げ、誠達東尾中ナインは、それぞれの守備位置へ散つていった。

マウンド上で、英治が投球練習をする間、内野手間でボール回しをするときも、やはり体の調子は良いと、誠は感じていた。

一回の表、旭ヶ谷中の攻撃は、東尾中先発宮田英治の前に、三者凡退に終わった。一・二番は、共に低めのスライダーで内野ゴロに仕留めた。三番はこのチームのキャプテンで、試合前から英治が最も警戒しているバッターだったが、このバッターに対しても、逆にスライダーを見せ球にして、最後は胸元を抉るインハイの真っ直ぐで見逃しの三振。殆ど完璧な立ち上がりだった。

「ナイスピッチ！」

ベンチ前で、控え選手達と英治がハイタッチを交わすのを横目に、誠はネクストバッターズサークルへ向かった。

投球練習のボールにタイミングを合わせ、素振りをする。しなやかな腕の振りから繰り出されるボールは、やはりかなりスピンドが効いていて、伸びがありそうだ。

ここで見ているイメージよりも、少しはやめのタイミングで合わた方がいいかもしない。そんなイメージを抱きながら、誠は左バッターボックスに足を踏み入れた。

「プレイ！」

主審の右手が上がり、誠はいつものように、入念に足場を馴らしながらバットを構え、前を見据えた。その視線の先には、マウンド上から誠を見下ろす長身のサウスロー。改めてみると、上背はあるが、顔立ちはまだどこかあどけない。佑介の言うとおり、一年生なのかもしれない。だとしたら、相当な長身だ。しかも長い手足に左利き。ピッチャーをやるために生まれてきたような体と言つてもいい。事実、この男の投げるボールは、同学年として考えても、かなりのものだった。

だけど、どんなに身体的な面で恵まれていても、経験や技術が伴つていなければ、本当に優秀な選手とは言えない。誠は、どちらかと言えば小柄だし、体の線も細いけれど、一年時から東尾中のレギ

ユーラーの地位を守り続けてきた実績がある。意地がある。ましてやこの大会は、誠達三年生にとって、中学野球最後の公式戦。試合に掛ける意気込みも、最上級生とそうでない者との間には、決定的な違いがある。

負けたくない。いや、絶対に負けられない。そんな気持ちをこめて、マウンド上の投手に視線をぶつけた。相手は、そんな誠の気持ちなどまるで眼中に無いかのように、キャッチチャーとサインの交換をし、首を縦に振り、セットポジションに入った。

真っ直ぐか、変化球か。

投手の右足がゆっくりと上がり、第一球目が投じられた。

しなやかな腕の振りから投げ下ろされたボールは、ストライクゾーンのほぼ真ん中に決まった。やはり打席で見ると、外から見たイメージ以上に速く感じる。それに上背があり、比較的銃身を高く保つたまま投げ込んでくるフォームなため、角度もある。

思った以上に、手強いかもしれないな。

打席の中で、誠は相手に対する評価を少し高めた。それにしても、あれだけの長身と長い手足、さらにサウスポートと言うスケール感のある投手にしては、ランナーがないときでもセットポジションで投げるというのは、少し大人しすぎる気がする。それでもあの速球なら、充分通用するだろうが、あの投手は、もつと自分が天から授かっただ資質を、思い切り使って投げ込みたいとは思っていないのだろうか。指導者の方針か。だとしたら、身体的な資質に比べ、精神面はそれ程でもないかもしれない。

余計なお世話だな。もつと試合に集中しないと。

ヘルメットの後頭部を、コン、と軽くバットで叩き、誠は二球目に備えた。

二球目。今度もストレート。高めだがコースが甘い。
いける。

そう確信し、誠はバットを振り抜いた。しかし、誠のスイングは、僅かにボールの下を掠つただけで、打球はバッケネットに当たって落ち、ファールグラウンドを転々とした。タイミングは合っていたが、誠のイメージ以上に、ボールが伸びているのだ。たった二球で、誠は追い込まれてしまった。

カウントはツー・ナッシング。セオリーなら、一球外に外すところだが、この投手はどうか。

ストレートに対しては、二球目はファールにこそなつたが、タイミングは合っていた。三球勝負の決め球に、ストレートとは考えに

くい。ストレートならば外して来る。逆に決めに来るならば変化球か。誠はそう読んだ。

三球目。ボールは投手の腕を離れた瞬間、誠の顔に向かつて飛んできた。

あつ、危ない。

誠は咄嗟に、しゃがみこむようにして避けようとしたが、次の瞬間ボールは失速しながら大きく曲がり落ち、アウトローに構えられたキャッチャーミットに、吸い込まれるように収まった。

「ストライク！」

しゃがみこんだまま呆然としている頭上で、主審のジャッジが聞こえた。

カーブ。曲がり幅、落差、共に、今まで見たことも無いような、凄まじい変化だった。

半ば呆然としたまま、ベンチへ引き上げる誠と入れ違いに打席へ向かう、一番の翔太に忠告した。

「真っ直ぐも伸びるし、カーブも凄い。気合入れてけよ」「うわあ、打てるかなあ」

おどけて首をすくめる翔太の背中を、ポン、と叩いて送り出した所へ、ネクストで待機する、三番の英治が尋ねた。

「最後の球、カーブ？」

「うん、凄かった。あと、真っ直ぐの伸びも凄い。イメージより、ボール二つ分くらい高めに来る感じ」「なる程、なかなか手強そうだね」

「うん。簡単には、援護できそうに無いな」

誠は、そう言いながらも、こちらも英治が投げている以上、簡単に点は取られまいと思つていた。

翔太は、初球のストレートと、一球目のカーブを空振りし、三球目のストレートを打ち上げて、ファーストファールフライに倒れた。三番の英治は、初球のストレートをバックネットへファウルチップ。二球目のカーブをかろうじてバットに当たものの、平凡なサ

ードゴロに終わった。だが、誠と翔太への投球を見て、多少なりとも情報を得ていたとはいえ、三人のうち唯一、空振りを喫しなかつたのはさすがだった。初回は、両軍共に三者凡退。

今日は、投手戦になりそうだな、と思いながら、誠は一回の表の守備に就いた。

一回の表。先頭の四番バッターは、左の長距離砲で、去年から旭ヶ谷中の主軸を担っている男だった。高めの速球に滅法強い反面、低めの変化球を苦手としている。

英治は初球、このバッターに、あえて高めのストレートを投げた。勿論釣り球だ。見送ればボールになるが、高目が得意なバッターなら、思わず手が出てしまつような高さへ、絶妙なコントロールで投げ込む。

バッターが、わずかに反応したが、さすがにそう簡単には引っかかる。ワンボール。

三球目も、アウトコースのスライダー。ただし今度は、ストライクゾーンから、低めに外れるコースへ。注文道理に引っ掛けさせて、ファーストゴロ。バッターの足があまり速くない事も、去年の対戦で調査済みだ。

打球をミットで拾い上げた佑介が、マウンドからベースカバーに駆け下りてきた英治を制し、自らベースを踏んでワンアウト。

五番の右バッターには、三球連続でインコースのストレートを投げ込んだ。初球は見送ってストライク。二球目はボール。三球目はファウルチップで、カウントは、ワンボール・ツーストライク。

四球目の勝負球。アウトコースへの、ストライクからボールになるスライダーで、空振り三振。英治が最も得意とする配球パターンだ。鮮やかな、内と外のコンビネーションだった。

これでツーアウトランナーなし。ここで迎えた六番バッターは、あの投手だった。左打席に入り、バットを肩に担いで、ふうっ、と一息ついて、バットを構えた。懐の深い、大きな構え。上背があるだけに、迫力もある。

あれだけのボールを投げるほどの身体能力の持ち主なら、おそらく

く足も速いだろ？。しかも一塁に近い左打者だ。自分の所に「口」が来たら、内野安打にならないように、素早く正確に打球を捌く必要がある。誠がそんなふうに考えているうちに、英治が一球目を投げた。低めのストレート。悪くないコースだ。

バットは出ない、見送る。まずはワンストライクか。誠がそう思つた次の瞬間

風を巻き込むような豪快なスイングで、英治のボールは、まるでピンポン球のように弾き返された。内野手は勿論、外野手すら一步も動かなかつた。スイングも、打球も、およそ中学生のものとは思えない、異次元のものだつた。先制の特大ソロホームラン。

東尾中の絶対的エース宮田英治の、低めに決まる速球が、完璧に打たれたという事実を理解するのに少し時間が掛かつた。それほど衝撃的な一発だつた。

流星のような打球を放つたその男が、悠然とダイヤモンドを一蹴する姿を、誠達東尾中ナインは、それを呆然と眺めている事しか出来なかつた。

先制アーチを浴びても、英治は崩れることなく、続く七番バッターをアウトローのストレートで見逃し三振にしとめ、後続を断ち切った。

一点ビハインドで迎えた一回の裏、東尾中の先頭打者は、四番の佑介。

長身左腕は、初めて初球にカーブを投じた。決して厳しいコースではなかつたが、佑介は、これにピクリとも反応せず、ワンストライク。

二球目。今度もカーブ。二級続けてカーブを投げたのも、初めてだつた。やはり、相手バッテリーも、佑介を相当警戒していると見える。だが、今度は少し高めにすっぽ抜けた。一球目のカーブには全く反応しなかつた佑介だが、今度は見逃さなかつた。バットをボールに叩きつけるように、思い切り引っぱたく。鋭い金属音と共に、痛烈な打球が三塁線を襲つた。旭ヶ谷中の三塁手が、打球に飛びつくが、わずかに届かない。

「フェア！」

その判定を聞いて、俄然盛り上がる三塁側東尾中ベンチ。

「キャプテン、二つ！」

打球を拾つたレフトから、ショートの中継を経て、一塁ベースカバーへ入つたセカンドへ、ボールが送られた頃には、佑介はすでに悠々一塁へ到達していた。

「ナイスバッティング！」

チームメイトの声援に、佑介が軽く握り拳を上げて答える。

ノーアウト一塁。一打同点のチャンス。しかし、後が続かなかつた。東尾中打線の五・六・七番は、得点圏にランナーを背負つたことで、凄みを増した相手投手の速球とカーブのコンビネーションに

三者連続三振を喫し、スリーアウトエンジ。佑介を一塁に釘付けにされたまま、この回も無得点に終わった。

それでも、攻略の糸口は掴んだ。佑介が捕らえたのが、ストレートでなくカーブだったのは大きい。ストレートなら、いくら速くても出会い頭の一打があるが、失投とはいえ、変化球を完璧に打ち返したのだから、相手に与えた精神的ダメージは決して小さくないはずだ。

英治が打たれたホームランだつて、出会い頭だつたということもありうる。一点リードされて入るけど、チームの自力はこちらのほうが上だ。まだまだ、負ける気はない。

三回の表。佑介の一打に勇気付けられた東尾中ナインは、駆け足でそれぞれの守備位置についていった。

三回の表も、英治は巧みな投球術で、旭ヶ谷中打線を三者凡退に抑えた。やはり、先制ホームランを打たれた影響は全く見られない。その精神力に改めて感心させられながら、誠はこの回三つ目のアウトとなるショートゴロを、無難に捌いた。

その裏。東尾中のハ・九番バッターは、旭ヶ谷の投手の前に、為す術なく連續三振を喫し、あつという間にツーアウト。東尾中打線は、前のイニングをまたいで、四者連續三振を喫している。

三人目のバッターは、この日一度目の打席を迎える、井岡誠。第一打席は、実力未知数の大型左腕の前に、敢え無く見逃しの三振を喫したが、今度はそうは行かない。

ここまで投球パターンから、相手投手のピッチングスタイルと、その力量はある程度見極められている。

長身から角度をつけて投げ下ろす伸びのあるストレートと、大きく曲がり落ちるカーブ。持ち球は、この二つと見ていい。フォアボールはここまでひとつも無いが、制球力が高いというよりも、少々甘く入つても、ボールの威力で捻じ伏せていると言う印象だ。むしろ制球力に限つて言えば、比較的アバウトで、甘いコースへ来る事も、決して少なくないし、外れる時は、はつきりとしたボール球が多い。左バッターの誠にとって、背中から回りこんでくるようなカーブを打つのはかなり難しいだろうが、甘く入つたストレートに的を絞れば、かなりの確率でヒットを打てる自信はある。

一点ビハインドの状況。ツーアウトとはいえ、何とか出墨して同点のチャンス作りたい。そんな気持ちで誠は、この日一度目のバッターボックスへ向かつた。

初球はストレート。やや外よりも、ほぼ真ん中と言つていい甘いコース。積極的に打ちに言つた誠だったが、前の打席でのカーブの残像が、ほんの一瞬バットの振り出しを鈍らせ、振り遅れた。三

壘ベンチ方向への、ファール。僅かな気の迷いも、この角度と伸びのある速球には命取りになる。

一球目も、誠はストレートにヤマを張つて待つた。もしもカーブが来たら空振りでも良い。仮にツーストライクに追い込まれても、バットを普段より一握り短く持つて、叩きつけるようにして転がすくらいはできる。そうすれば、クリーンヒットは望めなくとも、内野安打は充分に狙えると考えたのだ。

二球目。狙い通りのストレートだが、今までよりも速い。それでも誠は、迷わずバットを振り抜けた。両手に、イメージよりも少し鈍い感触が伝わる。しかし、若干差し込まれ気味ではあったものの、しっかりとバット振り抜いた事で、打球は詰まりながらもサードのグラブの先を転がり抜け、レフト前へのシングルヒットとなつた。

「ナイスバッティング！」

沸き立つ自軍ベンチからの声援に、応えたい気持ちもあつたが、今はそれ所ではない。このピッチャーから、そう何度もチャンスを作れるとは思えない。誠は一塁からリードを取りながら、相手投手の一拳手一投足を、つぶさに観察した。

セツトポジションの姿勢が、一塁方向と正対するサウスキーの場合、一塁から一塁への盗塁、いわゆる「一盜は難しい」とされる。しかし、キヤツチャヤーから最も遠い、一塁への盗塁は、最も成功率の高い盗塁でもある。それに、旭ヶ谷中のキヤツチャヤーの肩は、それほど強くなさそうだ。狙つてみる価値はある。

この投手は、上背があり手足が長い分、必然的にモーションが大きくなる。バッターからすれば、迫力のあるフォームだが、ランナーを壘上に置いた際に、クイックで投げるのには少々窮屈になるはずだ。

一番バッター、翔太への初球。旭ヶ谷バッテリーも、誠の足を警戒しているのか、クイック気味のモーションからの、ストレートだった。誠への警戒心が焦りを生んだのか、ボールはすっぽ抜け、外

角高めに大きく外れた。

やはり、クイックには自信がなさそうだ。さつきよりも、半歩大きくリードを取る。

牽制球。殆ど手首のスナップだけで投げるような、極めてコンパクトなモーションだった。誠は咄嗟に、頭から一塁キャンバスへ滑り込んで帰塁した。

「セーフ！」

間一髪だった。クイックは苦手だが、牽制は上手いらしい。固まりかけていた、盗塁への決心が揺らぐ。だが、この投手から、そう何度も得点のチャンスをもらえるとは思えない。

行け。びびるな。

誠は、いつか見たテレビ番組で聞いた、かつて何度も盗塁王に輝いたプロ野球選手の言葉を思い出した。今は古巣の走塁コーチとして後進の指導に励んでいるその男は、こう言った。

「足の速さだけなら、自分よりも速い選手は沢山いました。それでも、自分が人よりも多くの盗塁を成功させる事ができたのは、“アウトになるかも知れない”という、恐怖に打ち勝つて、スタートを切る勇気があつたからだと思っています。勿論、投手の癖を見抜く研究も怠りませんでしたが、盗塁に最も必要なのは“スタートを切る勇気”。これに尽きます。だから私は、今でも若い選手達に言い続けています。例え結果的にアウトになつても構わないから、とにかく走れ、スタートを切れとね」

そうだ。勇気だ。リードを許している側の自分達が、消極的になつてどうする。

誠は、全神経をマウンド上の投手の右足に集中させた。右足を、体の中心線より内側へ入れたら、投手は牽制球を投げられない。投げればボーグ（不正投球）で、一塁ランナーの誠は一塁までフリーパスだ。

一球目。上がった右足を、体の中心線の内側へは入れないまま、相手投手は、翼を広げるよう、長い両腕を大きく開いて引き絞つ

た。その両腕が開き始めた瞬間に、誠は思い切つてスタートを切った。

盗塁に必要なのは“スタートを切る勇気”。

かつての盗塁王の言葉に後押しされて、誠はわき目も振らずに二塁キャンバスめがけて全力で走った。二塁ベースカバーに入った、旭ヶ谷中のセカンドが、捕球体勢を取つたのが見えた。スタートを切つてから、二塁キャンバスしか目には言つていなかつた誠には、投手の投球や、捕手の送球がどうなつているのかは全くわからない。ただ無我夢中で、二塁キャンバスへ頭から滑り込んだ。

懸命に伸ばした指先へ、キャンバスに触れた感触が伝わつてくるのとほぼ同時に、セカンドのクラブが覆い被さつて来た。

「セーフ！」

誠は、半ば這い擦るようにして上体を持ち上げ、片膝立ちの体勢のまま、力強く両手の拳を握り締めた。

ツーアウト、ランナー二塁。一球目は、どんなボールかはわからぬが、ストライクだつたらしい。ならば、カウントはワンボール・ワンストライクか。ツーアウトだから、誠はバッターが打つたと同時にスタートを切る。場合によつては、シングルヒットでも、同点のホームを踏むチャンスがある。外野手の肩の強さまでは、さすがに把握しきつてはいないが、それでも多少の無理は承知で、ホームへ突つ込むべきか。難しいところだ。

翔太への三球目。カーブだ。大きく曲がり落ちるボールに、翔太が喰らいつく。ボールがバットに当たつた。次の瞬間、打球がホームベース付近でバウンドし、一塁側へ高く跳ね上がるのが見えた。完全な当たり損ない立つたが、あれだけ高くバウンドすれば、翔太の足なら、内野安打になる可能性は充分にある。どちらにせよ、今 の自分に出来る事は、全力で三塁へ走る事だけだ。

誠は、三塁キャンバスめがけて全力で走つた。だが、打球が飛んだ方向からして、自分が三塁で刺される心配はなさそうだ。誠は途中でスピードを緩め、打球の行方を目で追つた。

定位置から数歩前進して打球を捕球したファーストが、一塁ベースカバーに入つたピッチャーへ送球する。それとほぼ同時に、翔太が一塁へ、頭から滑り込んだ。

「セーフ！」

ツーアウト・ランナー無しから、ツーアウト一三塁へ。一打逆転のチャンスだ。しかも東尾中の打順は、ここからクリーンナップを迎える。

ここしかない。ここで最悪でも同点に追いつけなければ、試合の流れは、完全に旭ヶ谷中へ傾いてしまう。東尾中の誰もがそう思った。そんな中、東尾中の三番、富田英治が、打席に入つた。

英治への初球を、ピッチャ―が投じた。リリースされた瞬間、ポンと浮き上がるような軌道から、カーブだとわかつた。その瞬間、一塁ランナーの翔太が、スタートを切つた。英治が、空振りで援護する。キャッチャーが捕球したタイミングにあわせて、三塁ランナーの誠が、ホームへ向けて駆け出すタイミングを見せる。勿論ホームスチールを狙っているのではなく、キャッチャーが、翔太を二塁で刺そうとするのを牽制する為だ。

誠の狙い通り、旭ヶ谷のキャッチャーは、送球の構えを作つただけで、二塁への送球を諦めた。

ツーアウト・二三塁。東尾中としては、なんとしてもこのチャンスをものにしなければならない。

英治への一球目。今度はストレート。英治が、バットを振り抜く。体の軸が全くぶれないシャープなスイングが、ボールを捉えた。快音を響かせた打球が、三遊間を真つ一つに切り裂き、三塁ランナーの誠が、悠々とホームへ還つて、同点。ベンチの仲間が、ハイタッチで誠を出迎える。

なおもツーアウト・二三塁。続くバッターは第一打席にツーベースを放つていて、四番の佑介。試合の流れは、確実に東尾中へ傾きつつあつた。

佑介への初球は、ストレート。前の打席でカーブを打たれている事と、一塁ランナーの英治の盗塁を警戒しての配球だろう。だが、英治は初球から迷い無くスタートを切つた。佑介が、先刻の英治と同様に援護の空振りをする。キャッチャーが捕球し、送球に移ろうとした瞬間、三塁ランナーの翔太が、誠と同じようにスタートを切るポーズを見せると、再びキャッチャーは送球を諦めた。やはり、肩には自信が無いらしい。英治が余裕を持つて一塁を陥れ、再びツーアウト・二三塁。

佑介の一球目。投手が、キャッチャーと正対してサインの交換をしている。

キャッチャーのサインに頷いた投手が、振りかぶった。

「あれ？ ウイングアップ？」

高く上がった右足が大きく踏み出され、叩きつけるような腕の振りから放たれたボールは、唸りを上げて空気を切り裂き、一直線にキャッチャー・ミットに突き刺さった。

「ストライク！」

「……！」

大きく目を見開いたまま硬直した佑介の表情からも、今の一球の凄まじさが伝わってくる。今までに、見たことも無いような、豪速球だった。

「なんだよあれ……」

「あんなの、打てるわけねえじゃん……」

「今まで、本気出してなかつたのかよ……」

東尾中ベンチが、俄かにざわめく。

これまでとは、フォームからして明らかに違う。これまで、あの投手は、ランナーの有無に関わらず、セットポジションからの投球だった。力感は無いが、ゆったりとしたモーションから、長身を生かすべく、重心を高く保つたまま短めのステップ幅で、上から投げ下ろすようなフォームだた。

たが、今のフォームはまるで違った。体全体の、ありとあらゆる筋肉と間接をフル稼働させたかのような、ダイナミックなフォーム。そしてそのフォームから放たれたボールは

ツー・ナッシングに追い込まれた佑介は、バットを一握り短く持つて寝かせ氣味に構えた。小学生の頃から図つと一緒に野球をやつてきた誠でさえ、佑介がバットを短く持つてミート重視の構えるところなんて、初めて見た。負けるのか？

誠は、この日初めて、負けを意識した。

東尾中野球部初の、全国大会出場を目指として来た。そして、そ

れは決して夢などではなく、充分に実現可能な事だと思っていた。だけど、自分たちが、この投手から、あと何点取れるというのだろうか。

前の打席では、ツーベースを放っている佑介だが、それでも、ここへ来て隠していた牙を剥き出しにしてきた、あの投手のボールを打てるだろうか。

佑介への三球目。再びワインドアップから放たれたボールが、佑介に襲い掛かる。佑介のバットが、迎え撃つ。しかし、その瞬間、ボールは佑介のスイングを嘲笑うかのように浮き上がり、バットが空を切った。天を仰いだ佑介の顔が、屈辱に歪む。だが、伸び上がったボールは、キャッチャーのミットさえも越えて、主審のマスクを直撃し、あさつての方向へ転がつて行つた。

「走れ！」

真っ先に叫んだのは、青木だった。その言葉にはっとした佑介が、懸命に一塁へ駆け出し、二塁ランナーの翔太も、スタートを切つた。ボールを拾い上げたキャッチャーが、ホームへベースカバーに入つた投手へボールを返す。翔太が、頭から滑り込んだ。

「セーフ！」

一対一。思わぬ形で、東尾中は、この試合初めて勝ち越した。

「ナイスイラン！」

ホームへ生還した翔太を、東尾中ベンチが、ハイタッチで出迎えた。しかし、どこか様子がおかしい。勝ち越しのホームを踏んだと言つのに、お調子者の翔他の顔が強張つている。

「あいつ……、花園シャインズの、新田恵介だ……」

「あいつって、あのピッチャーの事か？」

青木が、翔太に尋ねた。

「はい……」

「花園シャインズついで、この辺の少年野球チームじゃかなりの名門だな。知ってるのか？」

「はい。さっきまでセットだつたから気づかなかつたけど、ワインドアップから投げたときに、思い出しました。俺より、一口下だから、まだ一年生のはずです」

やはり、一年生だったのか。それにしても、中一であんなボールを投げるなんて、並大抵の才能ではない。しかも、小学生時代には名門チームにいたというではないか。何故、そんな男が、旭ヶ谷中の様な所にいるのか。あれだけの素質があれば、シニアのチームからのスカウトもあつたはずだ。

「菊池先輩の一コドつてことは、俺達とタメですよね。でも、俺が去年シャインズと対戦した時には、あんな背の高いピッチャーいませんでしたよ」

渡辺が言つた。

「俺がいたチームに、あいつと同じ小学校の奴がいたんだけど、そいつの話だと、コーチと喧嘩して、六年に上がる前に辞めちゃつたらしい。結構問題児だったみたい」

「と言う事は、一年近いブランクが合つて、あのボールか。体格と言ふ性格と言い、ある意味ピッチャーになるために生まれてきたよ

うな奴だな

青木が、感心したようにそう言つ手に、元気いっぱいに、東尾中の五番打者はあっけなく三球三振を喫し。スリーアウトチェンジとなつた。

しかし、青木は直後に表情を引き締めて、こう続けた。

「でも、俺は、お前達が負けるなんて思はないぞ。確かに凄いピッチャーダが、実際に今子トラがリードしているんだ。それに、あのピッチャーパーを除けば、俺達がチームとして、相手に劣っている部分なんてひとつも無いと、俺は思う。お前達ならやれる！弱気になるな！しっかりと守つて来い！」

「はい！」

頼れる顧問の声に勇氣付けられ、東尾中ナインは、駆け足で四回裏の守備に就いた。

一点のリードを貰つた、英治の投球は、この回も冴え渡っていた。二番から始まつた、旭ヶ谷打線に対し、徹底して低目にボールを集め、全て内野ゴロ。内一つは、ショートの誠が捌いた。やはり、青木の言うとおり、チームとしての総合力は、自分達の方が上だ。丈夫。勝つのは、自分達だ。

低めに決まる英治のスライダーを、次々に打ち擯じる旭ヶ谷中のバッター達を見て、誠は改めてそう思った。

しかしその裏、新田恵介の投球は、英治以上に圧巻だつた。東尾中の六・七・八番をいずれもストレートのみで、三球三振。遊び球は一球も無かつた。ファウルすら、無い。まさに完膚無きまでに捻じ伏せた。

本来の力を解放した新田が、マウンド上で躍動する姿は、敵であるはずなのに、思わず魅入つてしまふような輝きを放つていた。

ゆったりとした動きで振りかぶり、足を高々と上げ、右手で壁を作つて、上体の開きを抑えながら力強く踏み出し、長い腕を鞭のようにしならせて一気に振り抜く。フィニッシュの際、体重移動の余韻で跳ね上げる左足が、なんとも美しい。

その美しいフォームから放つ剛速球で、東尾中の打者を捻じ伏せても平然としている。まるで、それが当然であるかのように。その自信に満ち溢れた姿は、とてもリードを許しているチームの投手とは思えなかつた。

五回の表。この回先頭の、五番バッターが打席に入った。だが、東尾中ナインは、旭ヶ谷のクリーンナップを打つこの男よりも、ネクストバッターズサークルで片膝をついて目を光らせている、六番の新田の方が、よほど気がかりだつた。あれほどの打者を、あえてクリーンナップを外しているのは、ピッチングに集中させるためだらう。

新田の前に、ランナーは出せない。もし、このバッターを出塁させて、新田の一打席連続のホームランを打たれれば、逆転だ。そくなつたら、東尾中は、新田から、少なくとも一点取らなくては勝てない。負ける。全国への夢が、そこで途絶える。ランナーがいなければ、ホームランが出ても同点。それでもかなり厳しいが、勝ち越されるよりは、だいぶましだ。そういう意味でも、この五番バッターを出塁させるかどうかは、試合の流れさえも変えるほど大きな意味を持つている。

もし、自分のエラーで、このバッターを塁に出してしまったら。そして、英治が新田に、一打席連続のホームランを打たれてしまつたら。

不安が過る。

守備には、自信がある。野球を始めた頃から、守備の確実性は、誠が一番自信を持っている分野だつた。東商の西崎からも、真っ先に誉められたのが守備だつた。だが、勿論エラーをした事が無いわけではない。

俺の所に、打たないでくれ、と言う弱気な気持ちが湧き上がる。そんな自分に、これからさらに上を目指すつもりなら、こんな事でびびるな、と言い聞かせ、奮い立たせる。

英治の初球。アウトローへのストレート。コーナー一杯に決まりかに見えたが、判定はボール。

二球目、今度はタイミングを外す緩いカーブ。さすがに冷静だ。虚を突かれたバッターが、はつとしたように目を見開き、思わず手を出した。しかし、緩いボールを待ちきれず、完全にタイミングを外されて、大きく体勢を崩されながら空振り。

三球目、低めへのスライダー。バットが回る。ボールがバットに当たる。が、完全な当たりそこない。打球は、ピッチャーとショートとサードの守備範囲の、ちょうど真ん中へ、力なく転がつた。来た。

完全に打ち取つた当たりだったが、打球の勢いが殺されている分、

素早く処理しなければ、内野安打になる。誠としては、最も恐れたいたシチュエーションだった。それでも、最も守備力のある自分が、この打球を処理すべきだ。

誠は、全力で打球に駆け寄り、バウンドにあわせて腰を沈め、足元にグラブを差し出し、捕球姿勢に入った。

大丈夫。捕れる。誠がそう思った、次の瞬間。

打球は、グラウンドの土の、わずかに窪んだ部分に当たり、突然高く跳ね上がった。

イレギュラーバウンド。

嘘だろ。こんな時に。

自分の顔をめがけるように跳ね上がった打球に、誠は、咄嗟に顔を背け、一度足元で構えたグラブを、懸命に打球が飛んでくるであろう方向へ突き出した。グラブの先に、微かにボールが触れた感触が伝わる。

しかし打球は、誠のグラブに収まる事なく、レフト前へ転々と転がつていった。

無理な体勢から捕球しようとした誠は、振り向きざまに崩れ落ち、力なく転がる打球を、レフトが無造作に拾い上げる光景を、呆然と見つめていた。

「「めん」

誠は、チームメイトに謝罪した。イレギュラー・バウンドだから、記録上はヒットなのかもしかなかつたが、誠の中では、決して取れない打球ではなかつた、と言う気持ちがあつた。

「今のはイレギュラーだから、仕方ないよ。切り替えていこうぜ。ドンマイ」

佑介が、励ます。

そうだ、切り替えなくては。次のバッターはノーアウト一塁。ここで打席に入るのは、第一打席に特大ホームランを放っている、新田恵介だ。打席でバットを構えた新田の姿が、心なしかさつきよりも大きく見える。

英治、セットポジションからの、初球。アウトコース低めのスライダー。しかし、前の打席の残像が、手元をわずかに狂わせたのか、鋭く曲がり落ちたボールは、ワンバウンドとなり、あらぬ方向へ跳ね、それを見た一塁ランナーが、スタートを切つた。誠は、二塁ベイスカバーへ入つて、キヤツチャーからの送球を待つたが、間に合わないと判断したキヤツチャーは、送球姿勢を作つただけで、ボールは投げず、そのままがつくりとうなだれた。

「内野集合！」

ファーストの佑介の合図で、東尾中バッテリーと内野陣が、マウンド上に集まつた。

「ごめん、せめて前に転がせれば……」

キヤツチャーが、土のついてしまつたボールを手でこねながら英治に手渡し、申し訳なさそう謝罪する姿が、ついたきの自分と重なる。

「いや、こっちこそ「めん」。今のは、俺の失投だよ。それより……」

英治が打席の新田をちらりと見ながら言つた。

「歩かすか？」

「えつ！？」

英治の提案に、一同は、驚きを隠せなかつた。しかし、それは東尾中ナインの誰もが、頭の片隅で考へていた策でもあつた。ランナーが似るへ進んだ事で、ホームランでなくとも、一打同点と言つ状況なのだ。だが、一塁は今、空いている。仮に新田を歩かせて、ノーアウト・一塁としても、旭ヶ谷中の七番以降の下位打線に、英治が打ち込まれるとは考えにくい。

まだ五回とはいゝ、七回制の軟式野球においては、もう後半戦だ。それでも、敬遠策という、いわば“守りに行く”には、まだ早い段階といえる。セオリーとはいえない作戦だ。しかし、誠の捕球ミス、英治の失投、キャッチャーの後逸。小さなミスが重なり、試合の流れは確実に相手に傾きかけている。事実、ついさつき、自分達も、相手のミスから勝ち越し点を奪つたではないか。消極的かもしれないが、今打席にいるバッターは、真つ向勝負などと言つ綺麗事で、どうにかなる相手ではない。逆に言えば、ここで嫌な流れを断ち切ることが出来れば、旭ヶ谷中へ傾きかけた流れを、もう一度引き寄せることもできる。

「エーちゃんは、それでいいのかよ？」

佑介が、英治に尋ねた。真剣な表情だつた。

「そりや、やられっぱなしは悔しいけど、こんなどこで負けるわけには行かないだろ？トーナメントなんだから、一度でも負ければ、そこで終わりなんだ。多少消極的かもしれないけど、勝つ為には最善の策だと思う。俺の個人的な感情で、危険な選択をするわけにはいかない。それに、やっぱりあのバッターはちょっと次元が違う。でも、はつきり言つて、向こうは彼のワンマンチームだ。仮に彼一人との勝負を避けて、俺達が勝つたとしても、それをとやかく言われる筋合いは無い。こつちは自らランナーを一人出してやつてるんだから、他のバッターが、それを返せばいい。それを向こうが出来なければ、それは俺たちの方が強いチーム、勝つのにふさわしいチ

「ムだつたと言つ事や」

英治の言葉には、チームメイトを納得させるだけの説得力があった。英治は、決して弱気になっているのではないのだ。前の打席で完璧に打たれた相手、それも一年生を、敬遠のフォアボールで歩かせる。この上ない屈辱だろう。しかし、英治はあえて、それを自ら提案した。こういうときに、小さなプライドに拘らずに、客観的で冷静な判断が出来るのが、いかにも英治らしい。

佑介が、ちらりとベンチの青木に、目配せをする。腕組みをして、こちらに向けられている視線は、真剣そのものだったが、青木は何か指示を出そうとはしなかった。

「こざとこつこそ、どうすべきかを自分達で考える。言われたとおりしているだけじゃ、いつまで経っても成長しない。その代わり、どんな結果になつても、お前達が考えた末に出した結論なら、俺はそれを尊重するし、結果に関しては責任を取る」

青木に、何度も言われた言葉だ。一部の保護者からは、無責任だと非難する声もあったというが、選手達を子供扱いせず、彼らの主体性を重んじる青木のやりかたを、少なくとも部員達は信頼していた。

「大丈夫。七番以降の奴らは、俺が絶対に抑える」

英治が、珍しく断定的な口調で言つた。確かに、常識的に考えれば最も打力の劣る選手が並ぶ、七・八・九番という打順を打つバッターが、英治のボールを捉えられるとは考えにくい。

「エーちゃんがそこまで言つなら、俺はそれで良いと思つ。実際、それが一番確実だとも思つし。皆はどう思つ」

佑介の問いかけに、全員が頷いた。

「よし、それじゃ決まりだ。きつちり守りつけ」

佑介の合図で、誠達は各自の守備位置に散つて行った。

キャッチャーは立ち上がりはしなかつたが、一球目、三球目と、明らかにボールで、カウントノースリーとなつたところで、旭ヶ谷中ベンチから、英治に罵声が浴びせられた。

「勝負しろよ！」

「逃げてんじゃねえよ！」

「びびってんじゃねえぞ！」

一塁ランナーが、ショートの誠に言った。

「おいおい、敬遠かよ。いくらさつきホームラン打たれてるからって、あいつ一年だぜ。お前ら、情けなくねえの？」

誠は、相手をちらりと一瞥したが、何も言い返さなかつた。

その一年の力に頼りつきりで、ようやく自分達と対等に渡り合えている、お前達こそ、情けなくないのか。

喉元まで出かけた言葉を、懸命に飲み込む。この程度の事で、自分がエキサイトするわけにはいない。マウンド上の英治は、自分以上の屈辱に耐えていた。強敵を恐れずに、真っ向から立ち向かう事だけが勇気ではない。臆病者と罵られても、勝利の為には恥辱に耐える事もまた勇気なのだ。英治は、俺達のエースは、断じて臆病者などではない。

決して、誉められた作戦ではないが、ルールの範囲内だ。なにも、後ろめたい事なんてない。英治の言う通り、相手の罵声は、旭ヶ谷中側が新田の力なくして自分達に勝つ自信が無いと言つ気持ちの現れなのだ。

四球目も、明らかにボール。新田は、バットを放り出し、一塁へ向かった。

「こつからだぞ、きつちりやるぜー。」

「おう！」

佑介の声に、ナインが応える。

ノーアウト、一・一・一塁。打順は七番。一本でもヒットを打たれれば、同点になる危険もある。長打なら、逆転もありうる。しかも、そうなれば、打順もトップまで回る。

下位打線には、絶対に打たれないと言い切った英治の度胸に、改めて感心する。頼もしいエースだ。だけど、仲間に頼つてばかりはいられない。そもそも、このピンチは自分のミスから始まつたものだ。その汚名を返上するためにも、今度はどんな打球にでも喰らいついて、絶対にアウトにしてやる。

英治の初球はストレート。バッターは、初球に、送りバントの構えを見せた。しかし、英治の速球の勢いを殺しきれず、中途半端な打球が、ファーストを守る佑介の正面へ転がつた。

二つ取れる。

誠は、瞬時にそう判断した。

ダブルプレーを成立させるには、少々際どいタイミングだつたが、誠は佑介が必ず二塁へ送球して切ると直感的に感じ、素早く二塁ベイスカバーに向かつた。

「佑介！」

誠の予想通り、打球を拾い上げた佑介が、素早く体を切り返し、誠へ送球してきた。誠は、二塁ベースへ駆け寄りながら、ズシリと重たい送球をがっちらりと愛用のグラブでキャッチすると、二塁ベースを蹴つて、滑り込んできた一塁ランナーの新田を、ひょいと飛び越えるように交わし、セカンドの守備位置から一塁ベースカバーへ入った翔太へ、スナップスローで送球した。それを翔太がキャッチする。

「アウト！」

一塁塁上を駆け抜けたバッターランナーが、悔しさに顔を歪めた。

「ナイスショート。さすがのフットワークだね」

英治にそういわれた誠は、少し照れながら左手を軽く上げ、笑顔を返した。

ダブルプレー成立。この間に一塁ランナーは二塁へ進み、ツーア

ウト、三塁。まだまだ油断は出来ない。

しかし、八番バッターは、英治の速球とスライダーのコンビネーションに掠りもせず、三球三振。東尾中は、見事にピンチを乗り切った。

「しゃあっ！」

八番バッターを三振に斬つて取つた瞬間、英治が、小さくガツツポーズを作り、短く叫んだ。誠は、三年間共に野球をしてきた英治が、初めて感情を剥き出しにする姿を見た。おそらく、他の部員の前でも、これほど感情を露にするところを、今までに見せたことはなかつただろう。

勝ちたい。この最高の仲間達と、もつと野球がしたい。誠の中で、一度萎えかけた思いに、再び火が灯りはじめた。

自然に、声が出ていた。無意識に、拳を握り締めていた。そんな自分に、富田英治は自分で驚いていた。

旭ヶ谷中の六番バッターで、第一打席に先制ホームランを打たれた新田恵介を敬遠しようと言ったのは、自分だった。

決して、闘争心が旺盛な方ではないと、自分でも思っている。だけど、チームのエースナンバーを背負う者としてのプライドは、人並みにあるつもりだ。個人的な立場から言えば、例え結果がどうなるようと、もう一度新田と、正面から勝負がしたかった。

だが、前の打席では、新田に完璧な打球を打たれている事。その新田に、二打席連続のホームランを打たれれば、逆転を許してしまった状況であった事。バッテリーエラーにより、一塁が空いた事。他の打者は、ほぼ完璧に抑えている事。これから試合が後半に差し掛かる状況で、自軍のリードは僅か一点だという事。秘めた力を解放した新田の投球からは、これ以上の追加点を挙げるのは、極めて厳しいと考えざるを得ない事。さまざまな視点から、冷静に分析した結果、英治は、新田と勝負するよりも、新田を歩かせて、続く下位打線を抑える事のほうが、東尾中が勝てる確立が高いと判断し、敬遠策を提案した。

もう一度新田と勝負をして、抑えてやりたいと言つ気持ちは、当然あつた。一年生にやられっぱなしで、逃げるような真似は、耐え難い屈辱だった。しかし、相手は、明らかに自分よりも力量が上だつた。中学生にとつて決して小さいとはいえない二年分の経験や体格の差など、問題にもせぬほどの圧倒的なスケールを、新田は、マウンドで、打席で、英治達に見せ付けてきた。

こいつだけは、完全に別格だ。だけど、他の奴らはどうだ？チーム全体の総合力なら、自分達の方が明らかに上だ。野球は、団体競技なのだから、チームの総合力が高いチームこそ、勝つのにふさわ

しいはずだ。一年生におんぶ抱つこのチームに、全国への夢を断たれてなるものか。そう自分に言い聞かせた。

それでも、不安はあった。下位打線とはいえ、百パーセント抑えられるわけではない。出会い頭のヒットを打たれることもあるかもしれない。打ち取った当たりが野手の間にぽとりと落ちるかもしれない。でも、もしそうなれば、同点、逆転の可能性もある状況だった。しかも、打順がトップに返れば、ピンチはさらに広がる。

強打者との勝負から逃げ、格下と侮っていた下位打線に試合の流れをひっくり返される。もしそれで点を取られたりしようものなら、自分は笑い者もいい所だ。

それでも、新田と勝負に行って、抑えられる確率に比べれば、確実な手段だったとは思う。表情には決して出さなかつたが、最後のアウトを取る瞬間までは、不安に押し潰されそうだつた。

万に一つの失敗も許されない。そんな状況に、野球をしていて初めて、英治は追い込まれた。しかし、切り抜けた。最後の三振はともかく。その前のダブルプレーは、仲間の好守に助けられたとしか言いようがない。

英治は、バッターがバントの構えを見せた瞬間、マウンドを駆け下りて、前方へ全力でダッシュした。バント処理の基本だ。

そしてファーストの小川の方向へ、打球が転がつたのを確認すると、二塁ベースへ視線を移した。一塁ランナーの、二塁封殺を諦めて、バッターランナーを一塁でアウトにすることだけに専念すれば、全く問題ないタイミングだったが、場合によつては一塁ランナーを二塁で刺せるかも知れないと思つたからだ。だが、仮に一塁ランナーを一塁でさせても、ダブルプレーは厳しいだろうと言うのが、英所の予想だった。それでも、ひとつアウトが取れればそれでいい。後の二人を、打ち取れば、点は取られない。自分達のリードを守れる。それだけで、充分だった。

しかし、ショートを守る井岡は、持ち前の軽快なフットワークで素早く二塁カバーに入り、打球を拾つた小川も、それをあらかじめ

見越していたかのような迷いのない動きで、一塁へ送球した。それを受け取った井岡は、ランナーのスライディングを冷静に交わし、小川の前方チャージのために空いてしまった一塁ヘベースカバーへ入ったセカンドの菊池へ、流れるような動きでスナップスローへつ取るにはこれしかないと言ひ形で、見事にダブルプレーを成立させた。次打者を、英治が三振に打ち取った事で結果的には、トップに返すどころか、九番打者にすら打順を回さなかつた。

ここまで上手くことが運ぶとは、正直思わなかつた。仲間に救われた。頼りになる仲間達だ。自分が提案した賭けとも言える選択に、付き合つてくれただけでなく、最高の結果で応えてくれた。野球がチームスポーツである事を、改めて痛感した。

負けられない。

このチームは、こんな所で負けるべきではない。もっと大きな舞台で、この仲間達と野球がしたい。

野球を始めて、いや、生まれて初めて、自分の内から燃えるような闘志が沸きあがつて来るのを、英治は感じていた。

五回の表の守備を終えて、ベンチへ引き上げた小川佑介は、ペットル入りのスポーツドリンクをバックから取り出して、口に含んだ。一リットル入りのペットボトルに、半分ほど残っているドリンクを一気に飲み干したい程に、喉が渴いていたが、試合中は一度に飲む量は、三口までと決めている。顧問の青木に、一気に飲み物を飲むと体が重く感じるから、試合中は喉が渴いていても少しづつ飲むようにと、指導されたのは、まだ一年生の頃だった。

「一気にがぶがぶ飲まなくても、ある程度飲めば、喉の渴きは落ち着くから大丈夫」

半信半疑で、言われたとおりにしてみると、その通りだった。以降、佑介はこの教えを忠実に守っている。

「小川」

「はい」

その青木に名前を呼ばれて、佑介は顔を上げた。

「さつきの敬遠策は、お前の指示か？」

青木は声を少し潜めながら、佑介にそう聞いてきた。

さつきの敬遠策とは、五回の表の、一人目のバッター、旭ヶ谷中の六番バッター、新田恵介を故意のフォアボールで出塁させた事だ。自分が声を掛けて、内野手をマウンド上に集めてからの事だったから、青木は、佑介の指示かもしれないと考えたのだろう。小声で聞いたのは、おそらく英治に会話を聞かせないためだろう。結果的には無失点で切り抜けたとは言え、前の打席でホームランを打たれたバッターを敬遠で歩かせると言う事が、ピッチャーにとつてこの上ない屈辱である事に変わりはない。それを蒸し返すような事を避けたかったのだろう。青木は、子供に対してもそういう細やかな気配りが出来る、数少ない大人の一人だった。

「皆で相談して、最終的には、俺がそうしようつて言いました」
出来る限り、自分に責任があるという聞こえ方をするような言葉を選んで、佑介は言った。英治のアイデアとも、マウンドに集まつたメンバーの創意とも言いたくなかった。そういう言い方をすれば、自分以外の誰かに、責任を押し付ける事になる。それはしたくない。敬遠策に賛成した以上、自分にも確実に責任がある。怒られるなら、自分ひとりでいい。誰かが起ころれるのを見ているよりはましだ。キャプテンとしての責任感から出た言葉だった。

「どうか」とだけ、青木は言った。

「まさかったですか？」

やはり、真っ向勝負をするべきだつただろうか？不安になつて、佑介は青木に尋ねた。

「いや、俺もあの時、あいつを歩かせる事を、少し考えたんだ。でも、俺がお前達の立場なら、実行には移せなかつたと思う。正直、良く決断したと思うよ。お前達が、本当に勝ちたいと思つていてることが良くわかつた」

“よく決断した”と言つ言葉が、嬉しかつた。敬遠をしたという、表面的な事実だけではなく、自分達なりに苦心した末での決断だつたと言う事を、この人はわかってくれている。

「しかし、本当に凄い一年生だな。油断していたつもりはないけど、まさか初戦でこんな苦戦を強いられるとは思わなかつたよ」

佑介自身も、少し不安だつた。青木が言つたように、今日の試合でここまで苦戦は想定していなかつた。だけど、青木にも、チームメイトにも、自分が不安な気持ちになつていてることを、悟られたくない。そんな気持ちから、青木にむけられた自分の目が、睨むようなものになつてしまつていていたことに気づいたが、佑介は、青木から視線を逸らそうとも、目つきを変えようとも思わなかつた。虚勢でも良い。キャプテンである自分が、弱気なところを見せれば、それはチーム全体の士氣にも関わる。

その不安を打ち消したくて、佑介は自分に言い聞かせるように言つ

た。

「でも、さつき先生も言つてましたけど、今は俺達が勝つてます。
あの新田つてピッチャ―がどんなに凄いピッチングをしても、俺達
が点を取られなければ、俺達が勝ちますから」

「そうだ。その通りだ。そして、お前達ならそれが出来ると、俺は
信じてる」

その言葉に、こわばつた顔の筋肉が少し緩むのを、佑介は感じた。
それとほぼ同時に、東尾中の九番バッターが三振を喫し、スリーア
ウト・チェンジとなつた。四回の佑介から数えて、六連続だ。
ワンアウトランナーなし。打順はトップに返つて、前の打席でヒ
ットを打つている、一番の井岡誠が入る。

「誠！頼むぞ！」

親友の背中に向かつて、佑介は声の限りに叫んだ。

五回の裏。ワンアウト・ランナーなしの状況で、誠にこの試合二打席目の打順が回ってきた。二対一。東尾中のリードは、わずかに一点。打順の抉り合せからいつても、この回に追加点を取れなければ、厳しい。

なんとしても、墨に出なければならない。

前の打席では、ヒットを打っている。しかし、今マウンド上にいるピッチャーやは、同一人物ではあるが、まるで別のピッチャーと言つていい。

佑介ですら、力で捻じ伏せたほど剛速球は、バットに当てる事すら困難だろう。それでも、モーションが大きくなつた分、制球にはバラつきがある。フォアボールで出墨できるチャンスは、今のほうがあると考えられる。

初球は、どんなに甘いコースでも見送るう。まずは打席から見た体感速度がどれほどのものなのか。それを知る必要がある。

ワインドアップからの初球。セットポジションから投げていたときよりも、フォーム全体が大きく、迫力がある。その動きだけでも、打者を威嚇するほどの圧力がある。

鈍い音を立ててキャッチャーミットに突き刺さつた、ボールは、外角高めに大きく外れて、ワンボール。

凄い。

今までに見た、どんなボールよりも速い。そして、猛烈なスピンドルが掛かったボールが、空気を切り裂く音も、尋常ではない。

だが、やはりその分割球は荒れている。セットから投げていたときまでは、こんな明らかにボール球は殆どなかつた。

初めてからフォアボール狙いで歩かせてくれるほど甘くはないだろうが、ボールが先行して、置きに来たところを狙い撃ちする事ぐらには出来るかもしれない。

一球目もストレート。今度はインコース。ストライクだとはわかつっていたが、反応できなかつた。初球は、体から遠かつた分、じつくりと見極める事ができたが、体の近くに来た二球目には、一瞬身がすぐむような迫力があつた。

ワンボール・ワンストライクからの、三球目。今度は、ほぼ真ん中のストレート。バットを振り抜く。しかし、当たらない。誠のスイングは、ボールのかなり下で空を切つた。速さだけでなく、伸びも桁違いだ。

ワンボール・ツーストライク。追い込まれてしまつた。少々ボーラル氣味でも、喰らいついていくしかない。しかし、これだけ速いボールを、じつくり見極めるのはかなり厳しい。バットが都督と判断したら、なりふり構わず打ちにくしかない。

四球目。今度は胸元を抉るような危険なボール。誠は、仰け反るようにして避けた。一瞬、またカーブかもしれないと言う考えも、頭を過つたが、それを冷静に判断している時間的余裕はなかつた。これでカウントは、ツーボール・ツーストライク。

上手くぶつかつて、デッドボールをもらればよかつたかな、とも思つたが、あのボールをまともに喰らえば、いくら軟式球とはいえ、ただではすまないだろう。マウンド上の新田は、一応帽子を取つて謝罪する態度を示してはいるが、その表情には、誠に対する申し訳なさよりも、カウントを悪くしてしまつた事への苛立ちの方が、色濃く現れていた。

生意気な奴だ。

そう思う一方、そんな新田が羨ましくもある。恵まれた体格と身体能力も勿論だが、誠が何より羨ましかつたのは、新田の精神面だつた。コーチと衝突して、チームを飛び出したと言つほどの、激しい気性。一年生でありながら、投打の中心に自分がいて当然であるかのように振舞う、自信に満ち溢れた態度。

あんなふうに振舞えたら。誰が相手だろうと一步も引かず、年齢の差などものともせず、自分の力で、意思で、自分の道を切り開い

て進んで行く強さが、自分にあれば。

誠が今、何よりも欲している“心の強さ”を、新田は持っている。誠は、そんな新田を、生意氣だと思った自分を恥じた。

年なんか関係ない。俺だって、自分が大人だからと言うだけで自分を見下す父の態度に、何度も不条理を感じ、悔しい思いをしてきたじゃないか。下級生だからと言って、あいつが自分に対してへりくだらなければならない理由なんて、ひとつもないじゃないか。あいつには、それだけの力があるんだ。

年の差なんて関係ない。一人の対戦相手として、相手を客観的に見ろ。

綺麗なヒットなんかじゃなくたって良い。フォアボールでも、デッドボールでも、振り逃げでもかまわない。とにかく墨に出たい。出なければならない。

誠は、いつも以上にバットを短く持ち、寝かせ氣味に構えた。

五球目。真ん中高めのストレート。殆ど反射的に、上から叩きつけるようにバットを振る。辛うじてバットには当たものの、打球は力なく三塁ファールグラウンドに転がつただけだった。無意識に小さく舌打ちした。

ミートに徹しても、喰らいつくのが誠一杯かよ。

五球目もストレート。これもファール。だが、四球目同様、打球は三塁ファールグラウンドに転がつたが、今度はしつかりと捉えた。僅かずつではあるが、ついていくようになつていてる後はタイミングだけだ。

六球目もストレート。誠は、ワンテンポ始動を早めて、思い切りバットを振りぬいた。

捉えた。

誠の打球は、一塁線のほぼ真上に、ライナーで飛んでいった。ファーストがジャンプしたが届かない。誠は、バットを放り出して全力で一塁へ走った。フェアになれば、スリーベースも狙えるコースだ。

しかし打球は、ファーストの頭上を超えたあたりから切れでゆき、ライトファールグラウンドに落ちた。わずかに、タイミングが速かつたのだ。

一塁へ向かう歩調を緩めながら天を仰いだ誠は、打席へ戻る途中にマウンドへ目をやつた。マウンド上の新田も、こちらを見ている。目が合つた。新田の切れ長の目から放たれる鋭い眼光には、さつきまでとは違う、自分に対する明確な敵意を孕んでいるように見えた。たががファールだろう。芯で捉えられる事すらできないことでも思つてたのかよ。

負けじと睨み返す。

いくらなんでも、真っ直ぐだけで、抑えられるなんて思ひなよ。仕切り直し。カウントは、依然ツーボール・ツーストライク。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2735w/>

理由ある反抗

2011年11月27日13時50分発行